
スピネル奮闘記

アンモライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピネル奮闘記

【Nコード】

N0774T

【作者名】

アンモライト

【あらすじ】

スピネルは三歳の誕生日突然高熱に見舞われ、三日間もの間生死の境を彷徨う。そして四日目の朝、ようやく意識を取り戻したのである。ようやく意識を取り戻したスピネルは自分の身に起きたあまりにも大きく、非現実的な変化に唖然としてしまう。高熱から立ち直ったスピネルには突然前世の記憶が甦ってしまった……

一章 幼少期 1話 高熱×覚醒(前書き)

この作品はハンター×ハンターの二次小説となります。初めて小説を書く為読みにくい上に更新は不定期になるかと思いますが、それでも良いよ〜っていう方は宜しくお願いします。

一章 幼少期 1話 高熱×覚醒

「せ、先生……………診察代の支払いも随分溜まってしまっているのにワザワザこんな町外れまで本当にすみません……………」

かなり老朽化している建物の木製扉を開け、先生と言われた白衣の老人を向かえ入れているのはシスターと言われる人が着るような修道服に身を包んだ初老の女性である。

「長い付き合いなんじゃ、今更気にせんでええ。で、あれからあの子の具合はどうじゃ」

適当に挨拶を返しつつ勝手知ったる我が家の様に白衣の老人は急ぎ足で二階の階段を上り、後ろから慌てて追いかけてくるシスターらしき女性に声を掛ける。

「はい、今日朝方になってようやく熱は下がり落ち着いてはきましましたが……………」

「……………ふむ。三日間高熱が出っぱなしじゃからな……………あの子は幾つだったたかの？」

「……………生まれて間もない状態で孤児院裏のゴミ山に捨てられているのをヒューリ達が見つけてきたんです……………あの子が……………スピンルがここに来た日から丁度三年目、孤児院で誕生日の準備を始めた時急に熱が出始めたんですよ……………生まれただけか三年しか経っていないあの子に神は一体どれだけの試練を与えれば気がすむのでしょうか……………」

階段を上がり一番奥の部屋の前で崩れる様に膝を付き、両手で顔を覆いシスターは嗚咽をもらした。

「……………三才の幼児に三日間の高熱……………確かに何らかの後遺症がでる可能性は高いの。じゃが、必ず後遺症が出ると決まった訳ではないんじゃないぞ。取り敢えず熱が下り命の危機は去ったんじゃない、まずはそれを喜ばねばのう。さて、診察をするかのう」

白衣の老人は座り込んでいるシスターの肩を一つ叩き扉を開け部屋に入って行く。

「あつ、ヒゲ先生っ！。やっとスピネルの熱が下がったのっ！」

「そうか、そうか、それは良かったのう。ヒスイがずっと看病してくれてたのか？」

老人が扉を開けるとベットには小さな子供が寝ており、そのベットの横で車椅子に乗った十歳くらいの女の子が甲斐甲斐しく額に乗せたタオルを取り替えているのが目に入った。

「うん、スピネルは大事な弟だし……………私はみんなみたいに外で畑仕事とかできないから……………私が出るのはこれくらいしかないの……………」

俯き気味に話すヒスイと呼ばれた少女の頭に、老人は穏やかな笑顔で手を置き話す始める。

「何を言つとるんじゃない？お前さんが頑張って看病してくれたからこの子の熱は下がったんじゃないよ。よく頑張ったのう」

「先生の言う通りよヒスイ。スピネルの看病だけじゃ無く、毎日洗濯や食事の準備も沢山手伝ってくれてるわ。私も他の子も皆感謝してるわ」

目じりを指で拭いながら部屋に入って来たシスターも柔らかい笑顔で少女の前に座り、目線を合わせ両手をゆっくり包む。

「ヒスイ、すまんが場所が変わってくれんかのう。熱は下がったみたいだがちゃんと診察はせんとな」

シスターが少女の車椅子を後ろに下げ、白衣の老人は鞆から色々な器具を取り出すと診察を開始した。

「うむ、心配はいらんようじゃな。もう熱も上がる事は無いハズじゃが、何かあったらいつでも呼ぶんじゃぞ」

白衣の老人はシスターに細かい注意点を幾つか述べた後、帰っていった。

「さあ、ヒスイ。先生も大丈夫って言っておられたでしょう？あなたも看病のしっぱなしで疲れたでしょうから部屋で少し体を休めましょうね」

二人は心配気に目線を一度寝ている子供に向けた後、しずかに部屋を後にする。

「……………ううっ……………」

二人が部屋を出て一時間くらい時間が経った頃、ベットに寝かされていた子供が苦し気に身悶えをし始めた。

「……………あ、頭がズキズキする……………一体俺は？あれ僕？あれ何だ？」……………」

ベットで苦しそうにしていた男の子は、顔を歪めながらもゆっくりと目をあける。

「……………（ここは……………そ、そうだ覚えてる……………ここは僕の家。俺、いや僕の誕生日の準備をみんながしてくれてる時、急に頭がすごい痛くなつて……………きつと僕は倒れたんだ……………あれ？……………じやさつきまでずーっと見ていたのは夢？……………一人の男の人一生だった……………違う……………違うぞっ……………僕には解るっ！あれは夢なんかじゃないっ！きつと俺の、いや、僕の人生だったんだ……………よく解らないけど、あれは前の僕が送った人生なんだ）」

ベットの中の男の子は自分の小さな手を目の前に持ち上げ、ゆっくりと指を動かしている。

「……………（そうだ僕は三才のハズ……………やっぱり変だよ……………僕の常識では三才の幼児がこんな考察なんて出来る訳が無い……………ん？ちよつと待てよ、常識って……………その常識はいつ覚えたんだ？……………そうだよ、今のこの思考だって……………解る……………何となくだけど。きつと今の僕は、（前の俺）と（今の僕）が混ざった状態なんだ……………そう考えるとすごくシックリとくる。精神年齢はどのくらいなんだろう……………感覚では十代後半くらいか。自分の状態は何となく理解出来た気がするけど……………自分の周りの環境はサッパリ解らない……………記憶はちゃんと有るから、この家には優しい母さんと仲の良い沢山の兄弟が居る事も当然覚えてる……………そうだっ！今の僕だからこそ解る事もある。食事の事や、上の兄弟達の日頃の行動。この家にいる兄弟は僕の知る限り、上に四人、同じか下くらい

の年齢が僕を入れて八人も居る。普通の家庭環境とは考えにくいよな……ふう、何も解らない状況で色々考えても仕方ないよな。取り敢えずは変に思われない様に記憶にある僕の行動から外れないように注意しながら、状況を知る事からやっつけていこう」

・ ・ ・

スピネルは熱が下がった日から三日間はベットに寝かされていたのだが、四日目からは他の幼い兄弟達と一緒に一階の大部屋で過ごしていた。

「…………おかあさん、昼ごはんを食べてからずっとスピネルが外をボーッと眺めてるんだけどどうしたのかな？誰かに怒られたのかな？」

「そんな事はなかったと思うけど？」

キッチンの洗い物をしていた初老のシスターは一旦手を止めて大部屋の方を覗き込んでみると数人の幼児達はそれぞれが玩具等で遊んでいるのだが、一人だけ大部屋から裏庭に出る事が出来る大きな窓の前でペタリと座り込んだ姿勢で外を見ている幼児の姿が見える。

「あら？サフィアの言う通りね。誰かに好きな玩具でも取られてスネちゃってるのかしら」

あまり気にする様子も無く、キッチンに向き直りシスターは洗
物の続きをやりはじめた。

「そうなのかな？何か後ろから見ると悲しそうだもんね。スピ
ネルは前から手の掛からない大人しい子だったけど、熱が下がって
からはさらに聞き分けが良くなったように思うんだよねえー。スピ
ネルと比べるとヒューリ兄さんの方がよっぽど我侂だよ」

「それは言ってるっ！そうだ、聞いてくれるっ！昨日の夕ごはん
の時だって……………」

シスターとサフィアの会話に車椅子を自分で動かしてきてきたヒ
スイも飛び入りし、兄の悪口で盛り上がり始めたのだが話題の中心
人物は晴れ渡った空を眺め幼児には似合わない大きなため息付いて
いる。

「……………ううう……………（……………ベットから降りてきて一週間、そ
れとなく母さんや上の兄弟達の会話に耳を傾けたりして色々と解っ
てきた事はあるんだけど……………思ってた以上に厳しい現実を知って
しまった気がする……………）」

この時家族は話しに夢中で誰も気付いていないのが幸いなのだが、
窓際で小さな体の三才児が頭を両手で抱え苦悶している姿はなか
かシュールな光景だ。

「……………ハアア……………どうしよう……………（ふう、焦っても仕方な
いし取り敢えず少し落ち着いて考えよう……………まずは家の状況は大
体解った感じだな。ここがどういった地域かは良くわからないけど、
かなり田舎の町みたいだ。そしてこの家はその町のさらに外れに有
るらしく、家から少し離れた場所はこの国の広大なゴミ捨て場（前

の俺の知識の中で近い物と言うとゴミの島のような物らしい) になつてらしい。そしてこの家は個人の教会が運営している孤児院のようで、母さんは一人で教会と孤児院の運営をしているみたい。僕も含めた家の兄弟は全員捨てられていた孤児で母さんが引き取って養子として育ててくれている。母さんの名前はアマリア「ストン。そして母さんの姓を貰った僕の名前はスピネル「ストンだ)」

窓から外を見ていたスピネルは座っているのが疲れてきたのか、そのまま後ろにコロンと寝転がり天井に目をやっている。

「……………(この孤児院は相当に貧乏みたいなんだな……………ま、子供が十二人も居る上に教会っていつても殆ど収入らしい物が無いみたいだし当然と言えば当然だよな。教会の裏庭で作っている野菜と上の兄弟達がゴミの山から集めてくる物を売って辛うじて食べている状態みたいだし。食事の量が少ないのは辛いけど我慢できるし、それ以上に母さんも兄弟もみんな本当に仲が良い家族で僕は幸せだ。僕の中の(前の俺)知識でいくら大金持ちでも家族が不仲な方が絶対に不幸だと思うしさ。正直な話、僕を取り巻く環境はそこまで悪い物でもない、本当に頭を抱えている問題はもっと大きな次元の話だ。この世界が僕の中にある(前の俺)の世界と違い、どうやら僕の知識(前の俺)の中にある架空物語の世界か、それと酷似した世界である事の方が問題なんだ)」

寝転んで天井を見ていたスピネルは、ゆっくり起き上がり横の壁に貼ってある大きな世界地図を見上げた。

「……………やっぱり形が全然違うよ……………(……………僕の知識の中にある世界地図とこの壁に貼ってある地図は明らかに配置や大きさが違うんだ……………それに昨日サファイア姉えと母さんの話にてきた通貨の呼び方、確かジェニーって言ってた……………それにさっきの昼こ

はんの時、ラジオから聞こえてきたニュース……カキン国で密猟
していた犯罪者の集団がハンター教会から派遣されたプロハンター
三人に捕獲されたって……まいったな……全く知らない世界な
らまだしも、まさか架空物語の世界。しかもかなり危険が多いハズ
なんだ……この（ハンターハンター）の世界は……本当にどう
するかな……」

一章 幼少期 2話 二年×手伝いその1 (前書き)

この辺りはある程度サクサク勧めたくおもいます。ご不満な方もおられるかもしれませんが何卒ご容赦下さい。

一章 幼少期 2話 二年×手伝いその1

「ここ最近スピネルは寝てばかりだねえー。エメラも三才だけどスピネルとは逆に玩具で遊んでばかりでお昼寝もしたがないのになえー」

洗濯物をたたみながら大部屋を見てサフィアがのんびりとしやべっている。

「そう言われれば確かによく寝てる姿を見かけるわね。あの熱の後しばらくは後遺症が心配で様子を見てたけど最近になってようやく一安心できたわね。まあ、小さな子にも色々な性格があるからいいんじゃないかしら。寝る子は育つって言いますからね」

サフィアの話に柔らかく言葉を返し、アマリアは優しい眼差しで大部屋の子供達に視線を向けた。

現在の時刻は昼の二時を少しまわったところである。さらに詳しく言つと、スピネルの熱が下がってから半月ほど経過している。

「……………むう……………何も感じない……………」

大部屋の隅で座った姿勢で壁に背を預け目を瞑っている、パツと見寝ている様にしか見えないスピネルの口から小さな声もれる。

「……………フウ……………（ハア……………この世界が（ハンターハンター）の世界と解つてから三日くらいは必死で言い訳を探して否定しようとしていたけど……………悲しいかな、知れば知るほどより確実にそれを肯定せざるえない事ばかりだった……………それから二日間僕は事

実を受け入れ自分なりに今後の目標を一生懸命に考えた。そして大きな目標を1つ掲げた。それは大好きな母さんや仲の良い兄弟のみんながもう少し幸せになってもらえる様にお金を稼いで、この孤児院を今よりも少し裕福にしたいっ！でも三才の僕には当然お金を稼ぐ方法なんて思いつかない……………それに僕の中にある（前の俺）知識では本当に危険な世界のようなだった……………そうして今の自分出来る事を行こうという結論になった訳だ。僕は念能力を身に付ける事を決めて、一昨日から知識の中にある方法……………瞑想をしてオーラを感じ取り精孔を開けるといふ訓練を始めた……………この三日間、幼児の特権として一日中寝ていても怒られないを発動し延々と瞑想つばい事しているけど全く何も感じない……………まだ三日しか経っていないけど本当に僕に出来るのか既に自信が無くなりつつあるよ……………しっかりしないと……………がんばろう……………」

・
・
・

「ヒスイ姉えー、コップを一つ借してくれる？」

「いいけどなにをするの？」

「ヒスイ姉にはないしょ〜」

スピネルはキッチンで食器を洗っているヒスイからグラスを一つ借り、水を入れ庭の隅に座った。

「……………ふう、ドキドキするなあー。ここまで来るのは本当に大変だったよ……………」

スピネルはコップ一杯に水を入れその中に葉っぱを一枚浮かべ感慨深そうに見つめている。

孤児院では明日行う予定のスピネルの誕生会の準備をしていた。

スピネルが瞑想の訓練を開始してから約1ヶ月近くの月日が流れている。自身の体内のオーラを感じ取り、精孔を明けるまで実に六ヶ月もの時間を必要としたのである（途中数え切れない程挫折そうになっていた）。その後は知識の中にあつた念の四五行（念の基本技）

纏（テン）オーラが拡散しないように体の周囲にとどめる技術。纏を行うと体が頑丈になり、常人より若さを保つことが出来る（

絶（ゼツ）全身の精孔を閉じ、自分の体から発散されるオーラを絶つ技術。気配を絶つたり、疲労回復を行うときに用いられる（

錬（レン）体内でオーラを練り精孔を一気に開き、通常以上にオーラを生み出す技術。

の内3つまでを1ヶ月を要し、ようやく何とか形にしたのである。

「……………この水見式で自分の系統がハッキリするんだ……………ドキドキ、ワクワクって感じだな……………よしっ、やるぞっ！ハアアッ！」

（水見式とは心源流という武術に古くから伝わる念の系統判断をする方法。グラスに溢れるぐらいの水を入れて、その上に葉っぱを浮かべ、両手をグラスの脇にかざし「発（練）」を行う）

強化系 グラス内の水の量が変化する。（例：水の量が増える）

放出系 グラス内の水の色が変化する。

変化系 グラス内の水の味が変化する。（例：甘くなる）。

操作系 水面に浮かぶ葉っぱが動く。

具現化系 グラス内の水の中に、不純物が生成される。

特質系 上記以外の変化が起きる。(例：葉っぱが枯れる)

スピネルが両手を向け気合を込めたガラスのコップに浮いていた葉は風が吹いていないのにゆっくりと左右に動き出し、何故かコップの中の水には小さな埃の様な物が漂いはじめた。

「……………これは……………具現化系と操作系の反応だよな……………知識によると普通は一人1つの系統しか無いはずなのに……………もしかして前の俺と今の僕の影響で2つの系統がでたのかな……………ま、今深く考えても答えは出ないな。でもどうせなら強化系がよかつたんだけどなー、違っただのはしかたないけどさ。これで明日からは基本四大行をやりつつ応用技の特訓も始めよう」

「念能力は、オーラの使われ方によって6つの系統に分類される。念能力者は例外なくこれらのいずれかの系統に属した性質を持っている。自身が属する系統と相性の良い系統は(天性の系統には及ばないまでも)高いレベルで身に着けることが可能であり扱う際の威力・精度共に高いが、そうでない系統は本来の系統から遠い能力ほど習得できる念のレベルと共に念の扱いが不得手となる為に威力や精度が落ちる。」

強化系 モノの持つ働きや力を高める能力。主に自分自身を強める能力者が多い。自分自身を強化すると、攻撃力だけでなくダメージ全般に対する抵抗力や治癒能力も高まるため、この系統そのものを極めるのが最もバランスが良いと考えるものもいる。

放出系 通常は自分の体から離れた時点で消えてしまうオーラを、体から離れた状態で維持する技術。この系統の能力としては、

単純にオーラの塊（「念弾」）を飛ばす技が最もポピュラーである。
また、体外に離れた人の形などに留め操作系の能力で操作するとい
う使い方もある。

変化系 自分のオーラの性質を変える能力。オーラに何かの形
をとらせる技術も変化系に分類される。オーラ自体を別の何かに変
えるという点では、具現化系と共通点のある系統であるが、変化系
はオーラの形状と性質を変化させ、具現化系はオーラを固形化させ
物に変えるという違いがある。具現化系と同じく、オーラを別の何
かに変えるには、その「何か」に対する強いイメージが不可欠であ
る。

操作系 物質や生物を操る能力。オーラ自体に動きを与える能
力や、他の何かにオーラを流し込み、その動きを操る能力もある。
前者である場合、具現化系・放出系など他の能力と併用する事が多
い。逆に後者の場合は操作系能力単体で完結する事も可能であるが、
道具などを操作する能力である場合、道具に対する愛着や使い込み
が能力の精度に影響する事が多く、その道具を失うと能力が発揮で
きなくなるリスクがある。

具現化系 オーラを物質化する能力。オーラに形を持たせるとい
う点では変化系と共通する部分がある。オーラを物質化するほどに
凝縮するには相当に強いイメージが必要である。物質化したものに
特殊な能力を付加する者が多い。また、人間の能力の限界を超えた
ものは具現化できない。（例：なんでも斬れる刀等）

特質系 他の5系統に分類できない特殊な能力。血統や特殊な
生い立ちによって発現する。他の系統に属する者でも後天的に特質
系に目覚める可能性がある。

スピネルが本格的に念能力の訓練を始めて早や一年が経過した。

「よしっ！今日からスピネルも俺達と一緒に家の手伝いをしてもらうぞ。エメラも今日からサファイアやヒスイと一緒に家事の手伝い始める。うちは五歳になったら家の仕事を出来る範囲で手伝うんだ。みんながそれぞれ協力して少しでも母さんを助ける。解るか？」

「うんっ！僕がんばるよっ！ヒューリ兄い」

スピネルの前で腕を組み、元気一杯のスピネルの返事に笑顔で頷くヒューリとその横で穏やかに微笑むスフェーンが立っている。

「おうっ！やる気十分だなスピネル。それじゃー最初は水汲みからだが、お前は小さいから無理せず一番小さいこのバケツだ。それと水汲み場なんだが、近くの川はゴミ山から出る色々な物が混ざって危なくて使えない、だから山に入って川の少し上流の綺麗な水を使ってるんだ。歩いて大体三十分くらいは掛かるから、最初は無理してバケツ一杯に水をいれないようにするんだぞ」

スピネルは山に向かう二人の兄の後ろについて、歩きだす。

ストン孤児院には今現在12人の子供達が居る。長男は13才のヒューリで黒髪に角刈りでサツパリとした性格の体育会系である。長女はヒューリと同じ13才のサファイアで金髪のふわりとした長い髪に垂れ目でおっとりとした少女。次男は12才のスフェーン、女

の子のような綺麗な顔立ちをしており穏やかな性格。続いて次女も12才のヒスイ、薄い緑色ストレートロングヘアで頭脳明晰なのが拾われた時に負っていた両膝の怪我が原因で両足が思うように動かない為、車椅子で生活を送っている。家族には優しいが基本は冷静な性格をしている。そして三男は線が細く見える年の割には長身な体に二重の吊り目で短髪黒髪のスピネルとなり、同じ年齢にはエメラという金髪セミショートの髪型に思い込んだら一直線といった性格の少女が居る。そしてスピネルの下にもまだ6人の兄弟がいるのである。

「さあ、水を汲んだら家に戻るぞ。家のタンクが七割くらいまでは最低でも水を貯めておかないと一日に使う水が足りなくなるんだ。三人で四往復くらいすれば貯まると思うけどな。スピネルもし疲れたら無理はしないでいいぞ、始めての水汲みだからな。少しずつ慣れていけばいいんだし」

兄弟達の仕事にはある程度仕事の分担分けに近い物が出来上がっている。取り立てて決めた訳ではないのだが、それぞれが得意な物をこなしていく中で自然と出来上がってきたようだ。朝は男の子グループが水汲みを行い、女の子グループが朝食、昼食、洗濯を行う。昼からは、ヒューリは畑仕事とゴミ山にゴミ拾い、スフェーンはゴミ拾いか、町に集めたゴミを売りに行く係りだ。サファイアとヒスイの二人は協力して家計のやりくりや弟や妹の世話、みんなの服の繕い等細かい仕事をしている。そして母のアマリアは家の事をしながら、町での募金活動、誕生、葬式の祈り等をしているのだ。

「グツハアー……………疲れたあー、もう足が動かないぞお……………」

昼前に家に戻ったスピネルは部屋でベットに倒れ込み、昼食に呼ばれても中々目をさまさなかった。結局その日スピネルはフラフラ

になりながらも必死で兄達について行き、小さいバケツを手に持ち家と水汲み場を四往復していたのだ。その翌日から午前中は水汲みをし、昼から二時間程スピネルとエメラはヒスイの元で読書き等の勉強を習い夕飯までの時間は自由に過ぎしていた。

・
・
・

「くうく重いつく、でも二ヶ月で大きいバケツ2個まで運べるようになった……さ、さすがはハンターハンターの世界だ……メチャクチャしんどいけど、その分力がつくのはスゴく早いや。見た目はそんなに筋肉が増えるようには見えないのにな。こ、この調子ならグングン力がついていきそうだ」

今、スピネルは両手に普通の大きさの水が一杯に入ったバケツを二個持ち家に向かって歩いていて、始めて水汲みをしてから二ヶ月経ち大きなバケツ2個を運べるようになっていて、初めの頃は一番小さいバケツに半分ほどしか水を入れてなくてもバケツの重さでフラフラしていたのだが、毎日四往復運び続け力がつきだいに大きいバケツに変え、二ヶ月経った今では両手に二つのバケツを持って家と水汲み場を毎日四往復している。最近ではスピネルが一人で全ての水汲みを行うようになり、兄達二人は他の仕事をする時間が出た事によりほんの少しだが孤児院の収入が増えたようだ。

そしてさらに五ヶ月後にはドラム缶に水を入れて運び始め、六歳になる頃にはドラム缶2つを鉄のパイプ（ゴミ山で拾った）にくくりつけ背負って運ぶようになっていた。

一章 幼少期 3話 6才×食事改革（前書き）

幼少期はなるべく早く進めたいなーと思っています。

一章幼少期 3話 6才×食事改革

「ムグムグムグ……………ゴクゴク……………ふう、「ごちそうさまあー!」
や、行ってくるよっ」

「も、もう終わったのっ? ちょっ、ちょっと待ちなさいスピネル」
昼ごはんを物凄い勢いで食べ終わり、部屋を飛び出そうとしていたスピネルを慌ててヒスイが呼び止めた。

「んん? ヒスイ姉え、何?」

部屋の出入り口のドアを閉めようとした所で、廊下から顔だけ覗かせてスピネルが答える。

「ヒューリ兄さんから聞いたけど、あなた今日から昼の勉強をしなくてよくなったから、その時間を使って山に焚き木拾いに行くんですって?」

ヒスイの横で昼食をまだ食べているエメラは、今の話に一旦手を止め不満そうな顔でスピネルを軽く睨んでいる

「あ、え〜と……………うん。そのつもりだけど……………」

「そう……………山の奥まで入ってはダメよ。山の奥深くには危険な獣も沢山いるって聞いているから。わかった?」

ヒスイに出かける前に呼び止められ、エメラにはあからさまに睨まれたスピネルは内心山に行く事を止められるのかとヒヤヒヤして

いたのだが、話しの内容が注意だけで済んだ事にホツとしていた

「あ、うん、わかった。ちゃんと注意するよ。じゃ、行ってくるね」

嬉しそうな顔で返事をし、スピネルは廊下を走って行った。

「……………エメラ姉さん、何でスピネルはもう勉強しなくてもいいの？（私だって勉強は苦手なのに……………）」

未だに不満気な顔をして、木のフォークで野菜を軽くつつきながらエメラはヒスイに顔を向ける。

「エメラ、お行儀の悪い事をしてはダメでしょう……………まあ、あなたの気持ちもわからない訳じゃないけど……………あの子は読み書きを覚えてからは、その後にする予定だった勉強をアツという間に覚えてしまったわ。読み書きを覚えるのはエメラの方が少し早かったけど算数や文章の書き方なんていつの間覚えたのか、もう私でも教える事が無くなってしまったんですもの。仕方ないでしょう？」

ヒスイが笑顔でエメラの頭に手を置くと、多少まだ不満そうな顔はしているがエメラは大人しく食事を再開した。

「……………ふう、良かった。一瞬反対されるかと思ってハラハラしたよ。さて、大きい布袋も持ったし、背負子も背負ったし、出発っ！」

スピネルは六歳の誕生日を迎えて既に二ヶ月経った。今までは水汲みを午前中に行い、昼からは勉強の時間に当てられていたのだが、文字や数字を覚えてからは記憶（前の俺）の中に一般的な知識が有

つたお陰でいくら優秀とはいえ、13才のヒスイから教わる事は殆ど無くなったのである。そして長男のヒューリに掛け合い、毎年冬場には足りなくて困っていた焚き木拾いをしに山に入る許可を貰ったのだ。

「水汲み場より奥に入った事がなかったんだよなー、ここまでの道のりではほんの少ししか拾えてないしやっぱりもう少し奥に入らないと集まらないよな」

少しドキドキしながらも嬉しそうに山の奥へ入って行ったスピネルは、駆け足で辺りを探し回り二時間も経たない内に背負子からはみ出さんばかりの枝を集めた。

「フム、思った通りだ。人があまり入らない山だから沢山有るんじゃないかと思っていたんだよなー。これで少しはうちの食料事情も良くなるハズ」

満載になっている背負子を降ろし、手に持っている布袋の中味を地面に広げ嬉しそうに呟いている。

「かなりの量は取れたけど……………どれが食用になるのかサツパリだよな。多分ヒスイ姉えや、サファイア姉えも知らないだろうし。さすがに適当に食べる勇氣は無いよなー、何か良い方法はないものか……………」

スピネルが腕を組んで考え込んでいる目の前には色とりどりのキノコや木の実、山菜などが大量に広げられている。

「……………うーん、無難な方法は本とか買って調べるのが良いんだろっけど……………貧乏なうちには本代に回せるジェニーは無いだろう

し……………ムムム……………ん？そう言えばこの前スフェーン兄いがゴミ山から集めたクズ鉄を売りに行く荷物持ち（一年間無茶な水汲みを散々したお陰で、今のスピネルはその辺の大人とも比べ物にならないくらいに腕力が強くなっている為孤児院内で重たい物を運ぶ役目はスピネルの係りとなっている）をして町まで行った時、孤児院と反対側の町外れに猟師が一人居るって言ってたような……………山で生活している猟師さんならきつと山で採れる物には詳しいハズだよな！。お腹一杯に食べる為だっ！うん、ここは1つ聞きにいつてみるかっ！」

そう決めてからのスピネルの行動は非常に早かった。一度背負子を背負いなおし袋を片手に孤児院の近くまで山を降り、草陰に背負子を隠し布袋の中に入っている沢山の山菜やキノコを取り出し小さい袋に種類づつ入れて残りは布袋に戻し背負子の横に隠した。

「さて、急いで行かないと夕方に帰れなくなるな……………」

一度太陽の方へ目を向けた後、小さい袋を片手にかなりのスピードで町に向かい走り出す。

「ふう……………町の人に聞いた通りに来たから合ってると思うけど、この小屋に猟師さんが住んでるのかな」

大人の足で孤児院から町の中心地までは普通に歩いて四十五分くらいは掛かるのだが、今居る猟師が住んでいるというこの小屋は町の中心地からさらに三十分は掛かるのだ。大人の歩行距離で一時間以上かかるこの距離をスピネルは一度も停まらずに走り通し、十分ほどで到着した。そしてそれだけの距離を走り続けたにも関わらずさほど汗も掻いてはおらず、息切れもほとんどしていない。念能力は全く使っていない事から、ここにも水汲みを一年間もの間やり続

けた成果が現れている。

「すみませーん、ごめんくださーい」

スピネルは一度息を吸ってから木のドアを叩き家の中に聞こえる様に少し大きな声を出した。すると数秒してからゆつくりと木のドアが開き、中から年頃は四十か五十代で2メートルはあるうかという大きな体に逞しい口髭を生やした大男が出てきた。

「ん？だれもいねえじゃねえか……………ん？おんめえだれだ？」

ドアを開けた大男は最初は前を見てキョロキョロしていたのだが、下を向きやつとスピネルが視界に入った。

「え、あの……………ぼ、僕は町外れの孤児院から来たんだけど……………」

今までに見た事が無いくらいに大きな男の姿に呆気に取られて言葉を失っていたスピネルだったが、話しかけられ戸惑いながらたどたどしく言葉をかえす。

「町外れの孤児院だと……………おうっ！スタンさんとこの孤児院だな。おめえ、スタンさんとこの子だか。で、何の用でワシんここに来ただ？」

「あ、えーと……………え？母さんを知ってるんですか？」

「ああ、しってるぞ。ワシの名前はドーレというだ。昔おっかあが死んじまった時、スタンさんには色々助けてもらったでな。」

「あ、そう言う事ですか。なるほど………実はこの中でどれが食べる事ができるのか教えて貰いたくて来ました」

母と知り合いと解り少し安心したスピネルは普段の口調に戻り、袋を持ち上げ中身が見える様に広げた。

「ほう、山で取れる木の実やキノコだな。わがった、家にはいりな。スタンさんには世話になったからこれくらいおやすいごようだ」

家の中に入った二人はテーブルにスピネルが持ってきた山で採れた物を並べ、ドレーが食べれる物と食べられない物に分け順番に説明していった。

「今の時期に山でとれる山菜類で食べれるのはおめえさんが持ってきた中に大体は入っているな。まちごうたら大変だで、よく覚えるんだぞ。それとこれも持ってくがええ」

説明が終わりテーブルに広げていた山菜類を袋に戻しているスピネルに、ドレーは自分の腰につけていた大振りのナイフを外しスピネルの前に置く。

「え？このナイフですか？」

「んだ。山に入るなら必要だ。孤児院の裏の山もこの北側の山と同じで大型、中型、小型と多くの獣が住んでるだ。中型、大型には危険な肉食の獣も居るからな、もし逃げるにしても護身用のナイフぐらいは必要だ。ワシはまだ幾つもあるで遠慮せんと持ってくがええ」

「すみません。それじゃ、ありがたく貰っていきます」

受け取ったナイフを腰につけ笑顔でスピネルがお礼を言うと、いかつい顔を微妙に崩しながらドーレは頷き返した。

「色々教えてもらった上にナイフまで、ありがとうございます」

「ああ、気にせんでもええ。それともし山で獣を仕留める事が出来たら、また来ればええぞ。捌き方も教えてやるでな。あとさっきも言ったがこの辺りの山には獰猛な狼類と熊類が何種類かいるでな。注意するだ」

ドーレの言葉に対し真面目な顔で頷いたスピネルはお礼を言って孤児院に向かって走り出した。そしてその日の夕飯はスピネルが集めてきた山菜類が食卓を彩り、普段の夕飯より少し多めの食事となり皆に喜ばれたのである。

「よし、焚き木拾いも終わったし、ドーレさんに教えてもらった食用の山菜類もそこそこ集まった。さて、山に入ってやりたかった事二つ目に掛かるかな、川で魚をとりたかつたんだよなー」

スピネルはドーレの家に訪れた翌日も山での活動を行っていた。

一度水汲み場に戻ったスピネルは背負子と山菜類を入れた布袋を草陰に置くと、川にそってさらに上流側に山に入っていったのである。そして川の流れが緩やかになっている辺りで足を止める。

「この辺りなら川底も深くなさそうだし丁度いいか。ガチンコ漁（記憶の中にあった魚法 岩と岩をぶつけた衝撃で魚を気絶させて獲る漁法）の石はどれくらい大きさがいいのかな？ま、試してみ

るか」

スピネルは、川岸にあった自分の頭の倍ほどもある大きさの石をヒョイッと軽々と持ち上げ川の中に入って行った。

「この岩とか良さそうだな。おもいつきりした方がいいんだろうか？ま、始めての事だし失敗して当然だ。目一杯やってみよ。おりやっ！」

スピネルは岸から少し入った所にあるドラム缶三つ分くらいの大さきの岩の前に立つと、両手に持っていた大きな石を頭上に掲げると力一杯に石を岩に叩きつけたのだ。すると辺り一帯に響かんばかりに大きな音がし、叩きつけられた岩は石が当たった所が砕けてへこみ、真ん中には亀裂がはいった。そして当てた石の方はぶつかった衝撃でバラバラに砕け散ってしまった。その際、砕けた石の破片がスピネルの顔や体へ大量に跳ね返ったのだが、服は所々穴が開いているが体や顔には怪我どころかスリキズ1つ付く事はなかったのである。

「……………す、すげえ……………力はメチャクチャ付いた自覚はあつあけど、まさか石が砕けるとは思わなかった……………しかも結構大きな破片が顔中に当たったハズなのに全く無傷つて、普通ならソコソコな大怪我になってるよな……………これって纏テンのお陰なんだろうけど……………そう言えば念を覚えてから殆ど怪我した事つて無い気がする。僕の知識（前の俺）の中にあるこの世界の物語に出てくる人物つてかなりメチャクチャな気がしてたけど、なるほど確かに念能力つてのは強力だな。十分に気をつけないと……………あぁっ！ヤバい、気絶した魚が流されて行くぅー待ってくれえー」

ブツブツと思考の海に入っていたスピネルだったが、川にプツカリと浮かんでいた魚達が水の流れに乗って流されて行くのを見て慌てて追いかけた。

「ふうー、危ない危ない、無事回収できた。でも、思ってたよりずっと大きい魚が多かったな」。僕のイメージじゃ川魚って大体十センチくらいと思ったけど、ほとんどの魚が三十センチは優に超えてるんだもんなー。豊かな自然にバンザイだ」

結局三十匹ちかく獲れた魚は持ってきていた袋に全部入りきらなかった為、スピネルは木のツルを適当に切って魚を縛り肩に担ぎ持ち帰った。

そしてその日の夕飯は誰かの誕生日でも無いにも関わらず沢山の山菜に新鮮で大きな魚が何匹も食卓に並び、家族の皆は大盛り上がりとなったのだ。しかも翌日には朝からサフィアとヒスイの二人が嬉々として魚の干物を作る姿が見えたのである。

. . .

そして初めて魚を獲れるようになって三ヶ月、孤児院の食料事情はかなり良くなっていった。しかしあまり乱獲するのめためらわれたのかスピネルは二週間に一回くらいのペースでしかガチンコ漁法をしなかった、ただそれ以外の山菜やキノコ、木の実などは毎日集めていた為痩せ気味だった家族全員はほんの少しずつだが確実に良くなってきていた。そんな毎日を送っていたスピネルだったが、今は少し顔色が変わってしまっている。

「……………ここは喜ぶところなんだろうけど……………当てるつもりで投げたんだけど、まさか本当にあたるとは思わなかった……………」

スピネルが恐る恐る近寄った地面には中型犬くらいのサイズの大きなウサギが横たわっており、その首には1メートルくらいの木で出来た槍らしき物が深々と刺さっている。

「……………山に入った時からいずれ獣を仕留めてお肉を食べたいとは思っていたし、そのつもりでこの三ヶ月獣を獲るために絶^{ゼツ}で気配を絶っていたけど……………」

初めて自分の手で獣の命を奪ってしまったスピネルは少なからず動揺していた。最近になってスピネルも判った事だが、孤児院の所在地はパドキア共和国という国の南側の外れにあり国のゴミ捨て場的な町のさらに外れに孤児院はある。そしてこのゴミ捨て場は様々なゴミが捨てられており、管理は国が行っているとの建前にはなっているが実質的には殆ど無秩序に捨てられている。このゴミ山にはこの国のマフィアが抗争の末に対抗勢力の者を殺しその死体を捨てるにすることがあり、孤児院で五才を超えていてゴミの山にお金になる廃材探しに行った事がある子供は、全員一度はそのような物を目にしているのだ。スピネル自身も実際に何度かそのような物を目にしていたので、獣の命を自分が奪う行為に動揺するとは当初思ってもいなかったのだ。実際にはこの三ヶ月の間に獣との遭遇は十回どころでは無かった。絶^{ゼツ}をし自分の気配を殆ど消す事により、周りの生き物の気配をより鋭敏に感じることができた。その為、スピネルにとって獣を発見することは容易にできていたのだ。それでも三ヶ月間一匹も仕留める事が出来なかったのは、いざとなったら腰が引けてしまい本気で仕留めに掛かれなかったのが原因だったのだ。

「……………ふう……………このままにしていたらウサギがダメになって

しまつな……命を奪つた上に無駄にする訳にはいかない……ゴ
メンよ。勝手な言い草だけど絶対に無駄にはしないから……」

スピネルは一度ウサギに手を合わせた後、袋に入れ大急ぎで荷物を背負い直しドーレの小屋に向かい全速力で走り始めた。

一章 幼少期 4話 7才×決意（前編）（前書き）

微妙に長くなりそうなので前編、後編にわけてみました。宜しくお願ひします。

一章 幼少期 4話 7才×決意（前編）

先週七才の誕生日を迎えたスピネルは身長も130センチになり、少し体付きもようやく男の子から少年と違っていいようになってきた。見た目にも変化が出始めたスピネルは六才の頃と比べて毎日の行動にも多少変化がみられた。

午前中に水汲みと焚き木拾い山菜採りを終わらせ、昼からは罨の見回りや獣を獲る事に時間をあてるようになっていた。捕った獣はドーレに教わった裁き方で肉、骨、内臓、毛皮と分け、肉は孤児院での食用とし、骨はダシを取るのに使った後は砕いて畑に蒔いた。毛皮に関してはドーレが下取り商人に売ってくれるとの事だったので預けたままの状態だ。内臓と抜いた血液は罨用の誘いエサとして使っている。六才の頃の様に獣を仕留める事に抵抗は無くなったのだが、スピネル自身は獣を捕る事にそこまで執着をしていないのか、罨の見回りついでに見かけたらといった感じであった。

「ヒューリ兄い、何か最近元氣無いけどサファイア姉えとでもケンカした？」

何時もの午前中にやる作業が終わったスピネルは、昼からヒューリに誘われゴミ山に廃材集めにやってきたのである。

「……………そんな事は無いけど、おまえにはそう見えるのか？」

ゴミを掻き分ける手を休めず手元から視線を外さずにヒューリは答えた。

「うん、何となくだけどね。二、三日前からかな」

スピネルも作業を続けながら顔を上げずに答えた。

「……………なあスピネル。おまえは将来の事とかつて考えた事あるか？」

ヒューリの雰囲気が変わった事を感じスピネルが顔を上げると、作業の手を止め真剣な目をしているヒューリの視線とぶつかった。

「……………し、将来って大人になったらって事？全然考えた事ないよ……………何で？」

普段あまり真面目な態度を取らないヒューリの真剣な表情に、少しスピネルは驚いた。

「俺とサファイアはもうすぐ16才だ。スフェーンやヒスイだって後半年もしたら15になる。街に居る普通の子供なら高等学校に通っていて大学が働くかを考え始める頃なんだ……………でも俺は別にそれが羨ましいとか思った事は一度だってない。捨てられた事は悲しいけど、母さんやおまえ達みんなと家族になれた事には物凄く感謝してるんだ。おまえはどうだ？」

「ぼ、僕だって母さんやみんなと居られる事は嬉しいに決まってるじゃないかっ！」

多少憤慨気味に言うスピネルに笑顔を向けてヒューリは頷いている。

「そうプリプリするなって、ちゃんと解ってるよ。おまえが頑張ってくれてるお陰で、みんながひもじい思いをしなくて済んでるん

だから。みんなおまえには感謝してるんだぜ。母さんやサファイア、ヒスイあたりは山に行くおまえが心配で仕方ないみたいだけどな。ただ俺やスフェーンはこのままってのはマズいと思う様になってきたんだ……………」

ヒューリの真剣な話しぶりに少しためらいながらスピネルは聞き返した。

「い、今の家の生活がマズいって事？」

「いや、生活がどうこうじゃないんだ……………おまえはこの町で俺達をちゃんと雇ってくれる所があるとと思うか？初等学校の通信教育過程すら修了してない俺やスフェーンを」

「や、雇ってくれない？」

不安そうに聞くスピネルにヒューリは真剣な顔で頷いた。

「ああ、まず雇ってくれる所は無いだろうな。俺とスフェーンはこの半年くらい町に行く度に色々聞いて廻ったんだが、この町自体に働く場所は殆ど無かった。さびれた田舎の町だからな、どの家の子供も知り合いの伝手を頼って都会に働きに行くのが普通なんだ。ただ、都会で働こうと思ったら最低でも高等学校を卒業しないとマトモな所は雇ってくれないらしい」

「……………ヒューリ兄いや、スフェーン兄はどう考えてるの？」

「ああ、俺は体だけは丈夫だからな。街に出て荷物運びでも何でもして金を貯める。その金で車の免許を取ってトラックにでも乗れば文句ないな。スフェーンは顔も人当たりも良いから接客業のバ

イトなら雇ってくれるだろうな。でもそれじゃーダメなんだ」

話しの途中までは楽しげに話していたヒューリは最後には唇を噛みしめている。

「な、何でそれがダメなんだ？僕にはわからない……………トラックの運転手だって立派な仕事だよ」

「違う違う、別にトラックの仕事を見下してるんじゃないぞ。それ以前に沢山の問題があるんだよ。俺達2人が街まで行く交通費が無いだろ？それに仕事が見つかるまで飲まず食わずつても無理だし泊まる金もない。もしそんな話したら母さんが無理して用立てしてくれるかもしれない……………それで俺とスフェーンは何とか働く事が出来たとしても……………サファイアやヒスイはどうなる？おまえやエメラだってそうだし、その下の兄弟達は？いくら何でも毎回そんな大金用意出来るわけ無いからな……………」

話を聞いている内にヒューリが何を言いたいのかおぼろげながら解って来たスピネルは喉をならした。

「……………た、確かにこのままじゃマズいね……………」

「ふつ、まだ8才でそこまで解るおまえに俺は驚くよ……………ま、そういう事だ。それで俺とスフェーンは色々と考えてたんだが、今の所一台でもいいから早くコンピューターを家に置きたいんだよ。そうすりゃー2人は通信教育で初等学校の修了過程の資格が取れるからな」

「一台で2人も通信教育が受けれるんだ」

「ああ、時間帯が重ならない様に工夫はいるけどな。兄弟の誰かが初等学校の修了過程の資格を取ったからって即座に何かが変わる訳じゃないが、現実的に出来る事からやっていかないと。俺達の予定じゃスピネルとエメラが七才になる前にコンピューターを手に入れ、おまえ達2人には七才から通信教育をさせてやりたかったんだけどな。なかなか思うように行かなくて不機嫌になつてたかもなー」

「そっか……………ところでコンピューターっていくらぐらいするの？」

「値段か？前に町でスフェーンと調べた中古のコンピューターが一番安いのが十一万ジェニーだったな。それ以外にも中古の小型発電機が八万ジェニーだろ、家には元々電話回線はあるから電脳ネットにつなぐナンバーコードも買わないといけないなー、確か四万ジェニーだ。しめて二十三万ジェニーだ……………俺とスフェーンとサファアの三人でこの事を相談して一年前から少しづつ貯めてやっと九万ジェニー、まだ半分にも届いてないんだ」

スピネルの問いかけに答えながらも、落ち込み気味にヒューリは話した。だが今の孤児院の状況で考えれば一年でそれだけ貯めるのは大変な苦勞だっただろうとスピネルにも十分に理解できた。

「あと十四万ジェニーか……………（ドーレさんの所に預けっぱなしの毛皮が幾らで売れたのか解らないから何とも言えないな……………明日にでもドーレさんの所に行ってこよう。んん？でも、それが上手く行ったとしてもヒューリ兄いやスフェーン兄いの街に出て働く件はどうするつもりなんだろう？）ねえヒューリ兄い、もしコンピューターを家に置く事ができたとしてもヒューリ兄いやスフェーン兄いが街で働く予定ってどうなるの？」

コンピューターを買う為の残金と預けっぱなしになっている毛皮の事を考えていたスピネルはふと、ヒューリが先ほど楽しげに話していた街で働く話しをどうするつもりなのか気がなった。今迄貯めていたお金をコンピューターに使ってしまったら兄達が街で働く為に必要なお金をどうやって用意するつもりなのか、他に何か考えがあるのか気になったのである。

「あ、ああ。俺達はちゃんと考えてるから大丈夫だ。それより今度俺も山に入るかなー、魚の獲り方や山菜の事をスピネルに教えてもらって町で売ったらもう少しお金を稼げるかもしれないし。どう思う?」

スピネルの問いかけに少し戸惑ったように見えたヒューリだったが、何故か山についての話しを振ってきた。

「……………ヒューリ兄い、思いつきり走る僕に最低三十分くらいはついてこれる?。もし肉食の獣に見つかったら全速で逃げないといけないからね」

街の件についてそれ以上触れず、少しふざけた感じでスピネルは答えた。

「いや、そりゃ絶対に無理だつて。最近のお前の腕力や体力には大人だつて到底歯が立たないんだぜ。俺が適う訳ないだろ? やつぱり山は危険つて事か。ま、無理せず今の方法でかんばるかあー」

その後はたわいもない話しをしながら作業を行い、日が傾きだした頃に二人は帰って行った。

「ひいー疲れたあ……………未だに堅^{ケン}は一時間しか維持できないかあ

「
その日の夕飯のあと何時ものように部屋で念の応用技、堅（ケン）纏（テン）と練（レン）の応用技。通常よりも遙かに多いオーラで肉体を強化する技術。オーラの消費量はかなり多く、まともな鍛練を積んでいない能力者は2分と続けられない。それなりの実力者と戦うには最低でも30分は維持できなければならない。戦闘時の堅（ケン）ではおよそ6倍以上の速さでオーラは消費される」の訓練を終え、汗だくになつた体を冷ましに庭の芝に寝転がるスピネルだつた。

「……………ふう、アツいな……………（……………昏間のヒューリ兄いの話し、多分自分達が街に行くのを諦めるつもりだろうな……………俺達年下の兄弟の為に……………でも実際に今の家の状況じゃ両方は絶対に無理だしな。ただ家にコンピューターを置いたとして、みんなが通信教育で初等学校の卒業資格を取つても実際にその効果が現れるのつて早くても十年は先だろう。ヒューリ兄いやスフィン兄いなら解つてるハズなのに）……………」

寝転んでいたスピネルはその場で膝を抱えて座り直した。

「……………ハアー……………多分解つても他に良い方法が無いからだろうな……………俺だって簡単に思いつかないし。ヒューリ兄い達はそれでも自分出来る事を少しづつでもやろうとしている……………俺だって家族がみんなが幸せになるにはどうしたらいいか解らないけどこの世界の事が解って何時か役に立つと思つて三才から念の訓練をしたんだよな……………最近目の前の事ばかり考えてたかもしれない……………」

そのまま30分以上その場で座り込んだままだつたスピネルは、ゆっくり立ち上がると強い意志を感じさせる眼差しで部屋に戻つて

行ったのである。

翌日何時もの様に午前中の仕事を終わらせたスピネルは昼食のあと、山の中をかなりの速さで走りまわっていた。

「ハアハア、追い詰めた……………ふんっ！」

肩にはキツネとイタチを一匹づつ担ぎ、前方を右や左と逃げ回る大きなウサギを追いかけていたスピネルだったが、大きな岩の所に追い詰めた瞬間にウサギの首筋にナイフを突き立てた。

「ふうー、時間的に裁いてる余裕はないか。仕方ない、ドーレさんの所でさせてもらうかな」

狩ったウサギの足を紐で縛り、そのまま町の方向へスピネルは走り始めた。

「くう〜……………さすがに全力でこの時間走るのは疲れる……………もっと鍛えないとダメかな」

スピネルは山からドーレの小屋まで歩きでは二時間かかる距離を全力疾走でわずか20分ほどで到着したのだ。

「すみません、来て早々に獲物捌きなんて手伝ってもらっちゃって。早く終わって助かりました」

久しぶりに小屋を尋ねて来たスピネルが背中に背負っている獲物を見たドーレは、先に獲物の処理をした方が良くないかと言出し、結局二人で獲物を捌き終わってから小屋でテーブルに腰を落착けたのだ。

「ああ、大して手間のかからんごとだて、気にせんでええ。それより預かっていた毛皮だども、頼まれてた下取りの商人が来たで金に替えたぞ。大ウサギが六匹、黒イタチが四匹、茶キツネが一匹、灰色山犬が五匹、全部で三万五千ジエニーだ」

ドーレは指を折って確認したあと、茶色い封筒をスピネルの前に置いた。

「やったあ！ありがとうございますっ！これなら思ったより早く買えるかもしれぬ」

嬉しそうにお礼を言ってスピネルは封筒を受け取った。

「んん？オメエ何か欲しい物があるだけか？それなら、山犬やウサギよりなるべくキツネやイタチを狩るがええだよ。山犬の毛皮は一匹千ジエニー、ウサギは二千だけんど、茶キツネは六千、イタチは三千だ。金がいるならなるべく高く売れる獲物を取るがええだ」

スピネルはドーレの説明に真剣に聞き入っていた。

「そんなに金額がちがうんですか？よく覚えとこう」

「当たり前だ。キツネやイタチの毛皮は毛並みが柔らけえから人気があるけど、山犬やウサギの毛皮は服には使わねえからな。白キツネや黒キツネならもっと高えだな。ところで、何が急に金が入り用になっただか？」

母さんの事や孤児院を知っているドーレには別に隠す必要は無いかと思つたスピネルは、通信教育の事コンピューターや発電機を買

う為にお金を貯めている事を簡単に説明した。

「……………むう、ワシはコンピューターの事はよく解らんが子供達の勉強の為にいるって事は何となくわがった。だけど、悪りいがワシも金は酒と食いもんに変えっちまうから手持ちはねえな」

頭を掻きながら申し訳なさそうに言うドーレにスピネルは笑顔で顔を振る。

「そんなの全然気にしないでくださいよー。毛皮を売ってもらってることだつてすごい助かってるんですから」

「そうか？何かすまん。うん？そう言えば昔し使つてた古い発電機がまだ倉庫に置いてあつたハズだ。まだ動くから捨てずに放り込んだんだ。あれで良がったらオメエもつてつてもええぞ、古くで音はうるせえがまだ使えるハズだ」

「ええつ、本当ですかっ！ドーレさんが良いなら是非お願いしますっ！」

ドーレが何かを思い出す様に腕を組んで目を瞑りながら言った言葉に、スピネルはテーブルに身を乗りだした。

「んだば、見にいつでみるが」

のっそりと立ち上がり家の出口に向かうドーレの後ろをワクワクしながらスピネルがついて行く。

「これが昔オラが使つてた発電機だ」

家の裏側に回ると家と変わらない大きさの木造りの小屋がたつていて無造作に扉を開けたドーレはノシノシと一番奥まで歩き、大きなダンボール三つ分くらいの大きさの四角い物に掛かっているシートをめくり中身をスピネルに見せながら言った。

「昔に使ってたやつだで、大きいし、音もうるせえが立派に動くハズだ。明日にでも町でリフトを借りて倉庫の外に出しとくで、明日また来たらええ」

「あ、あのドーレさん、この発電機って重さはどのくらいありますかね」

「ん？よく覚えてねえけど、100キロくらいはあるんでねか？」

ウキウキした顔で発電機から顔を逸らさずに聞くスピネルに、少し考えてからドーレ適当には答えた。

「100キロ……そ、その重さなら俺一人で持てますから、このまま持って帰ってもいいですかね？そうすればドーレさんにもワザワザ町に行ってもらう手間も掛かりませんし、ね？そうさせてくださいっ！是非お願いしますっ！」

何故か必死で頼むスピネルを、何て言ったらいいのか困った顔でドーレは発電機をみた。

「あ、先に倉庫から出さないといけませんよねっ！んじゃ、ちょっと運ばせてもらいますねっ！……んしょっ！」

困り顔で言葉を搜しているドーレを他所に、スピネルはチョコチョコと機械の前に近づき丈夫そうな骨組みを確認ししゃがみ込むと

一気に持ち上げてしまったのである。

「…………お、おでれえた……………すんげえ力だ……………オラでももう一人いないと運べねえぞ……………おめえ、ちっこいくせにすんげえな。大したもんだ」

「へへ、力には自信がありますから。んじゃ、ちょっと避けてくださいね」

「あ、ああ……………すまねえ」

目をシロクロしながら驚いて避けるドーレの横を、あまり重さを感じさせない動きでトコトコと倉庫の外まで歩き、機械をそつと地面に置いた。

「うん、これなら毎日運んでる水汲みドラム缶2本より軽いから担いで帰れそう」

「…………ド、ドラム缶2本分の水だて……………半分でも200キロくらいは有るんでねえか……………そんな事毎日してるだか……………とんでもねえな」

スピネルの独り言に呆れた顔でそう言うドーレは立ち尽くしていた。そんなドーレを気にも留めず、スピネルは軽い足取りで倉庫から太い荒縄を出すと機械を担げる様に固定している。

「ドーレさん、この縄かしてもらいますね。近いうちに返しにきますから」

「あ、ああ……………別にかんまわねえよ……………気いつけてけるんだ

ぞ」

「はい、発電機、本当にありがとございました。早く家族に見せてやりたいから今日は帰りますね。またお礼にきますからっ！んじやっ！」

「発電機を背中に担ぎ、嬉しくて堪らないと言った表情で礼を言うとスピネルは少し駆け足で町へ向かった。

「……………あのちいせえ身体で獣を仕留めて来るからてえした子だとは思ってたけど、すんげえ子もいたもんだで」

後ろから見れば体が小さすぎて発電機に足が生えたようにしか見えない背中を、姿が見えなくなるまで見送ったドーレはノシノシと家に戻って行った。

一章 幼少期 4話 7才×決意（後編）（前書き）

バランス良く区切れませんでした。トホホ……………宜しく願いします

一章 幼少期 4話 7才×決意（後編）

空の太陽が沈み始めた頃にドーレの家をでたスピネルは、何時もなら夕飯を食べ終わっている時間になってようやく家に到着したのである。

「ヒューリ兄いっ！ちょっときてよーっ！」

「ちよっ、スピネル。あなた帰ってくるのが遅いじゃないっ！心配したのよっ！」

「うん、ごめん、ごめん。ヒスイ姉え、ヒューリ兄いは？」

夕飯を皆が食べ終わった頃になりようやく帰ってきたスピネルにヒスイは不機嫌な顔で文句を言うのだが、それに適当な言葉を返しながらスピネルはキョロキョロとヒューリの姿を探した。

「んー、俺をよんだかー」

部屋で自分を呼ぶ大声を聞きつけ、キッチンからヒューリが顔をだした。

「あ、ヒューリ兄いっ！ちょっと来てよっ！早く、早く」

ヒューリを見つけたスピネルはヒューリを大急ぎで庭まで引っ張っていき、それを見た何人かの兄弟達はその後について庭に出てきた。

「こ、これって……も、もしかして……は、は、発電機じゃね

えかよおっー！」

庭に出て機械の前まで連れてこられたヒューリは機械が目に入ると数秒間固まり、そのあと絶叫をあげた。

「ど、ど、どうしたんだこれっ！う、動くのかつ！」

「うん、動くよ。猟師のドーレさんが使ってないお古だからって譲ってくれたんだ」

「うん、兄さん見た目は古いけど機械はあまりいたんでないみたいだ。十分使えると思うよ」

興奮しながら話すヒューリと同じ様にテンションの上がっているスピネルの横をスツと通り過ぎ、静かに機械へ目を通したスフェーンが柔らかい笑顔で二人に言った。

「……………そんな古い機械の何がそんなにいいんだか……………ヒスイ姉さん行こうよ」

男兄弟の様子を見て呆れた様に言ったエメラはヒスイと一緒にさっさと部屋に戻って行った。

「……………よくやったぞスピネルっ！これで目標まで六万ジェニーになった……………これなら何とかかなりそうだ」

周りに三人しか居ない事を確認してからヒューリはスピネルの肩に手を回し嬉しそうに言った。

「うん、本当によくやってくれたねスピネル。これで計画は随分

進んだよ」

スフェーンもスピネルの頭に手を置き、嬉しそうに頭を撫でていく。

「あつ！それとこれ。今まで仕留めた獣の毛皮をドーレさんが売ってくれたんだ。三万五千ジェニーあるよ」

スフェーンの手が頭に置かれた状態のままスピネルはズボンのポケットから折りたたんだ封筒を取り出し、ヒューリに手渡した。

「……さ、三万五千って……」

「……スピネル、毛皮を売ってもらったってどういう事？」

封筒をもって固まっているヒューリと、詳しい事を聞こうとするスフェーンにスピネルは簡単に説明した。

「……なるほど、本職の猟師さんだから下取りの商人と取引がある訳だね。よくお肉を獲ってきてくれるから食費は助かっていると思っていたけど、そのうえお金まで稼いでくれるとは思わなかったよ」

「ああ、本当だぜっ！おかげで残りが二万五千ジェニーだ。発電機も手に入ったし、ここまでくればコンピューターにもうすぐ手が届くぞ」

そのあとスピネルは遅くなった夕飯を食べたのだが、二人の兄達は部屋にはもどらず、スピネルが食べ終わるまで、発電機の話してもらいあがった。

「スピネルーまたお願いできるかしらあゝ、今回はちょっと量が多いんだけどお願いねえ〜」

夕飯を食べ終わりのんびりしていたスピネルの部屋にやって来たサファイアは、両手に抱えた服をドアの前に置くと手をヒラヒラ振り笑顔で部屋を出ていった。

「まだ夜の訓練してないし丁度いいか」

サファイアが置いていった服を自分の前に置き、スピネルは引き出しから自分用の裁縫箱を取り出す。

「んじゃ、やりますか。周っ！」

スピネルは縫い針を右手に持ち一呼吸の置いたあと針に周（シユウ）纏テンの応用技。自分の肉体以外のものをオーラで纏う技術。例えばシャベルに使うと掘る力が強化される）行う。

「よし、問題ないな。んじゃ、次は硬コウを左手に。ハアツ！」

右手に持つ針シユウへ周シユウを行い上手くオーラを針に纏わせた事を確認したあと、続いてスピネルは気合と共に左手の掌に硬（コウ）（纏（練）（絶）（発）（凝）を全て複合した応用技。体中のオーラを全て一カ所に集める技術。集まった箇所は凄まじい攻防力を誇るが、それ以外の攻防力が皆無になるため、そこを攻撃されると致命的なダメージを受ける。物体に全てのオーラを集めるのも「硬」に含まれる）をしたのである。

「さっ、早いとこ終わらせよう」

この一年半ほど前から肌着以外の縫い物やパッチ当てなどの裁縫は全てスピネルの係りとなっている。最初はアマリアやサファイアが繕っていたのだが、山に入り始めた頃からスピネルがはじめたのだ。当初スピネルは山の枝や岩でよく服を破いていた。あまりにも毎日破くので次第に母や姉に申し訳なくなり、自分で繕いはじめたのがきっかけである。そして、この孤児院で子供達が着ている服は基本的にゴミ山で集めた服や端布れを繕って作っていたのである。当然このゴミ山に来るまでには色々な収集車に運ばれ雨風に少なくない期間晒されている。それでも使える状態を維持している服や端布れは非常に丈夫で分厚い生地のものばかりなのだ。その様な布で作られている服はとも肌触りは悪いが丈夫な服で、長持ちするのだが、繕うのにとても手間が掛かるのだ。そして、繕い物を自分で始めたスピネルは丈夫な布へ針を通すのに念を使ってやりはじめ、半年もすると孤児院で一番早く繕い物が出来るようになっていた。そして今では自分用の裁縫セットまで貰い繕い物担当となっていたのだ。

「あつつ、イテテ……… たまに気を抜くと刺さっちゃうんだよな」
プツつと血が出た左手の指先を口に咥え、微かに額に汗が滲みだしたスピネルは気合を入れなおして裁縫作業を続けた。

この作業をする事が何故訓練になっているのかと言えば、やりはじめた当初は分厚い布に針を通すのに苦労した為、針に周を^{シユウ}して縫い物をしていった。ただある時集中力をきらした状態で縫っていて、思いがけずに左手の指に針を刺してしまったのだ。しかも針は相当深くまで刺さってしまい、一週間ほどまともに左手が使えなかったほどである。針に周は^{シユウ}しているが、体にも纏^{マシ}を纏っていたのにも関わらず指を深く傷つけたのだ。その一件でスピネルは纏^{マシ}とその範囲に

ついで考える事になった。同じオーラ量で体には纏テンを纏い、針には同じオーラ量で周シユウを行う、本来なら同じ量のオーラなので針の貫通力と体の防御力は拮抗するはずなのだが結果は指を深く貫通した。そこでスピネルは自分なりに考え、答えをだした。同じオーラ量なら纏う面積の小さい方が強いのだと、薄い紙を広げた物の真ん中と同じ紙の角の先端断面部では明らかに断面部の方が固いのだ。その答えに行き着いたスピネルは次から堅ケンで体を守りつつ裁縫作業をしたのだが、作業しながらの堅ケンではどう頑張っても三十分維持出来ない、その結果硬コウで左ての掌だけをガードして作業する事に落ち着いた。未だに気を抜くと針が指に刺さる事もあったりするのだが…。

「くそっ！今日はまだイタチ一匹だけだ……いざ探そうとするとなかなか見つからない」

翌日もスピネルは昼から山の中を獣の気配をさがして走り回っていた。

「……………ま、こつやって走るのも第二、第三の目標を考えると決して無駄じゃないんだけどさ」

あのヒューリとゴミ山で話した日の夜にスピネルは今後の自分はどうなりたいか、何をしたいのかを真剣に考え、自分が幼少の頃に決めた大きな目的（家族の皆が今よりもう少し裕福で幸せになって欲しい）を叶える為にいくつかの目標を決めたのである。まず第一の目標は言わずと知れた、コンピューターの設置である。これは兄二人の念願でもあるのだが、スピネル自身の第二の目標を調べる為には非常に役にたつ物でもあったのである。

そして発電機を手に入れて一週間ほどたった日、何時もの様に山

の中で獲物を探すスピネルの姿があった。

「ふう……………（今仕留めた白キツネで三万ジエニーには到達したと思うけど……………キツネが白、黒、茶、全部で4匹、イタチが3匹。この前聞いた金額のままなら十分だと思うんだけどな。まだ昼を少し過ぎただけだし、今日はドーレさんの家に毛皮を全部もっていかうか。ヒューリ兄い達に早くお金を渡して喜ばせたいしな）……………よし、こいつをさっさと捌いて行くかな」

スピネルはその足で近くに流れる川に行き、今獲ったキツネを捌き始めた。

「……………よし、終わった。急いで家に帰って用意しようか、ん？」

川辺で血抜きや解体作業をしきちんと部位ごとに袋に入れ立ち上がろうとした時、後ろに生い茂る草むらから何やらガサガサと音が聞こえ黒い大きな物体が3つゆっくりと出てくるのが見えた。

「な、ななっ……………う、ウソ……………オオカミ？こ、こんなに大きいのが？」

物音に驚いて振り返ったスピネルの視線の先に、全長2メートル以上の真っ黒で巨大なオオカミ3頭の姿が確認できた。

「や、ヤバい……………し、静かにこの場を離れないと……………う、うわっ！」

オオカミの巨大さとハンパじゃない威圧感を受け、その場を離れなくてはおオカから目を決して離さずにそっつと後ずさりしはじめた。距離がまだ二十メートルも離れていたためまだ考える余裕があ

ったのだ。しかし、先頭の一匹が鼻をヒク付かせるとしつかりスピネルのほうを向いた。

「くっ、キツネの血の匂いで来たのか……………な、何とかして逃げな、う、うわあっ！」

スピネルは完全にオオカミに見つかってしまい、三頭のうち一番左にいた一頭が何の前触れもなしに一気にその距離を飛び越え牙を剥きだしにして襲い掛かってきた。不意をつかれたスピネルは、何とか横に転がり事なきを得た。

「あ、危なっ……………う、ま、マズい……………逃げ道が……………」

転がる事で何とかオオカミの牙を避けたスピネルは素早く立ち上がり顔を上げたのだが、三頭の巨大なオオカミはスピネルの前方十メートルの辺りで扇方に散らばり、完全にスピネルの逃げ道を塞いでいた。

「あ、ああ……………う、うわっ」

余りに絶望的な状況に陥ってしまったスピネルは、その場で無謀にも立ち尽くしてしまっていた。そしてそんなスピネルの事をオオカミたちが見逃すはずもなく、一番近くに居た一頭が即座に口を大きく開け涎を滴らせながら飛びかかってきた。スピネルはとっさに両手で顔を庇う事しか出来なかった。

「……………（もうダメだ……………左腕が食いちぎられた……………）」

スピネルは左の肘がビショビショに濡れてくるのを感じた。次は首か……………なすすべのないスピネルは今にも自分の首に食らいついて

くるだろうその瞬間をじつと待った。

「……………（まだ嘔み付いてこない……………死ぬ瞬間は一瞬が長く感じるとか言うけど……………それにしても長い気が）……………」

オオカミが未だに息の根を止めにくいので、スピネルは勇気を振り絞り固く閉じていた左目をほんの少しだけ開き様子を見た。

「……………（ヒ、ヒイイツ！）……………」

スピネルが意を決し目を少し開いて見えた景色は、自分の左肘に物凄い形相で食らいついでる巨大なオオカミの顔の超アップだったのだ。

「……………（ひ、左の袖がボロボロだった……………ん？その割には痛みがこないな）……………」

何時までたっても襲ってこない痛みを不思議に思い、恐怖を押し殺しもう一度目を開けてみた。

「……………（……………そういう事か！……………オオカミの牙じゃ俺の纏^{デン}を破れないんだ。どうりで痛みがいつまでたっても来ないワケか。でもこれなら纏^{デン}さえ解かなければ俺は絶対に怪我しないって事だな。それなら何とかかなりそうだ）……………」

状況が理解できたスピネルは落ち着きを取り戻し右手を腰の後ろに回しナイフを手に取り周^{シユウ}を行うと同時に左肘に食らいついてるオオカミの腹をナイフで一閃した。

「……………す、すげえ……………今までナイフに周^{シユウ}をした事なかったけ

どトンでもない切れ味だ……一撃かよ」

左肘に噛み付いていたオオカミは、後ろに飛び退ったその場で腹から血と内臓を垂れ流し殆ど即死に近い状態で倒れた。

それを見た二頭のオオカミは一斉に飛び掛りスピネルの手足に噛み付いたのだが、結局は1頭目と同じ末路を辿る事になった。

「ふうー、服だけですんで本当によかった……本気で死ぬかと思つたよ。三才から念をやつて今日ほど良かったと思つた事はないな。今日はもう疲れた……こいつら捌かないといけないし、ドーレさんそこには明日行こう……」

その日は三頭の巨大なオオカミを何とか解体し、翌日にスピネルはドーレの小屋に急いで向かったのである。

一章 幼少期 5話 8才×訓練（前書き）

中々上手く纏まりません（；；）温かい気持ちで見ただけだと有り難いです。宜しくお願いします。

一章 幼少期 5話 8才×訓練

「よし、これで配線は完了だね。兄さん発電機はどう？」

「ああ、ちゃんと動いてるぞ」

スピネルが8歳の誕生日を迎えて数日経ったある日、孤児院では皆にとって一大イベントが開始された。それは、スピネルが狩った獣の毛皮の代金で念願のコンピューターを購入し、そして待ちに待ったそのコンピューターが孤児院に届いたのだ。朝食のあとスフェーンが配線作業を終わらせ、孤児院の皆がドキドキしながら見守った。

「うん、それじゃー電源を入れるよ」

一度後ろを振り返り全員が一斉に頷く様子を笑顔で確認し、スフェーンは電源のスイッチを押した。

「……………うわっ、ついた。何かすっごいねえ」

「……………ほんとうねえ」とてもキレイねえ」

皆が興味津々で見ているなかコンピューターは無事に起動をはじめ、デモ映像のあと問題なくコンピューターは立ち上がった。後ろで見ていた皆の意見を代表するように、エメラとサフィアが感想を零す。

「問題なさそうだね。それじゃー電腦ネットの通信スクールに繋
「うっ」

スフエーンは慣れた手付きでコンピューターを操作している。町でたまにある小遣い稼ぎのような手伝い作業に小さな店の商品の棚卸や書類の整理等があるのだが、その時にコンピューターを使った簡単な事務作業があったのだ。兄弟のうちでその様な仕事を何度かやってきたスフエーンだけしか今のところはコンピューターを扱えない。

「うん、？がったね。それじゃー登録するよ。」

通信教育を受けるには通信スクールに登録する必要があるが、初等学校の通信教育は殆どの国で無料である。そしてコンピューターを購入する事になった時、孤児院では話し合いが行われた。ヒューリヤスフエーン、サファイアは、年齢的に8才のエメラとスピネルが最初に登録する案を出したのだが、当事者のスピネルが頑なに反対した。そしてスピネルはヒスイとエメラを押し出した。日頃は兄や姉には素直なスピネルが頑として譲らない事に三人ともスピネルに何か考えがあるのだと感じ、途中で折れたのである。その結果登録するのはエメラとヒスイに決まった。

それから数日経ったある日、スピネルはキッチンでヒスイの横に立っていた。

「ねえ、ヒスイ姉え。今だれも使っていないみたいだから、少しコンピューター使ってもいい？」

「ええ、いいんじゃないかしら。何に使うの？」

「欲しい本があるんだよ。電脳ネットで中古本を探したいんだ」

「そう、わかったわ」

ヒスイの了解が取れたスピネルは発電機を動かす為、庭に向かった。皆の話し合いの結果コンピューターの係りはヒスイがする事になったので、スピネルはヒスイの所に行ったのである。

「おっ！あつたあつた、けど……………多すぎだろ……………どれ選べばいいんだ？」

スピネルが今見ているのは中古本販売の専門サイトである。その画面には格闘書一覧と書かれており、画面全体にビッシリと本の題名や、作者、発刊年度などが細かく表示されている。

「うーん、ガイドブックやカタログはいらないな。指南書、入門書で絞ってみよう」

画面の端にある検索機能を使い、膨大な数の本の中から自分が探している本を探そうと色々試してみる。

「ふう……………格闘技の種類だけでもスゴイ数だな。ボクシング、レスリング、軍隊闘技、護身術、サンボ……………さて、どれにするか。やっぱり組み技系より打撃技系だよな」

表示された書籍をさらに検索して絞っていく。

「……………打撃系でもこれだけあるのか。仕方ない、上から順番にみていこう」

画面に表示されている一覧表の上から順番に詳細情報を出し、内容を確認していった。そして二十分くらい画面と格闘していたスピ

ネルの手が不意に止まる。

「この名前は……記憶（前の俺）にあるぞ。確かこの世界の物語によく出ていた名前だ……きっと有効な格闘技だからよく出てるんだろうし、本の種類はどうか……おっ！丁度いいのがあるじゃないか。初めての心源流、初歩心源流ガイド、心源流中級指南三冊で……二千百ジェニーか。よしっ！注文しよっ！即日配達つと。これでいいな」

　　電腦ネットで中古本を無事に注文したスピネルは、自分で貯めたお金の中から本の代金をヒスイに渡し山に向かった。

「まずは「初めての心源流」からだな」

翌日の昼食後、山に入ったスピネルは開けた場所で昨日の夜に届いた本の一冊に目を通しはじめた。

「拳の握り方か……あんまり考えた事なかったなあー。んで、構えから正拳突きか。本当に全くの初心者向けだ。ま、俺は全くの初心者だし大助かりだな」

その日スピネルは簡単に魚を獲ったあと、辺りが暗くなるまで本を見ては練習するといった事を繰り返していた。

・
・
・

「ふう、正拳突き終了。次は全速走りか……」

本を手に入れてから半年近く、スピネルは毎日本に書かれていた内容を参考にした訓練に明け暮れていた。訓練は大きく分けると四つの事に絞って行った。

1つ目……………マキワラ（山の中にある太い木の幹に布を巻きつけた物）に毎日正拳突き、肘撃ち、膝蹴り、手刀撃ち等を行う。

この訓練を最初にはじめたのは本に書かれていた「拳を鍛えないと打撃で怪我を負う」の文章を見て自分のバランスの悪さに気付いたからである。今の自分の怪力で纏^テをせず全力で殴れば大怪我をする。それに元々の肉体を硬く鍛えれば当然纏^テなり硬^{コウ}をした時はより効果が大きいだろうと思ったのだ。半年たった現在では各部位の皮も相当に硬くなり、未だに全力で殴る訳にはいかないが、七割くらいまでは耐える事が出来るようになっていた。

2つ目……………山中の木々の間を全力疾走。

この訓練も本による所の「動体視力を鍛える事は運動能力向上だけに留まらず、攻撃、防御共に役立つ」を受け色々と考えた結果足元が非常に悪い山や木々が覆い茂っている間を全力で走る事で目を鍛え、ついでに速さや瞬発力も鍛えられると考えたからだ。実際にその効果は大きかったのだが、三ヶ月もすると慣れてしまった為四ヶ月目からは木々の上を枝から枝に飛び移る事までやり始めていた。この訓練中は常に纏^テをしているので、木に激突しようが、高い木から落ちようがほとんど痛みが無いので気兼ねなく行っていた。

3つ目……………飛んでいる鳥を仕留める。

この訓練は特に考えず行っていた。単純に投擲技術を身に付けたかと思つたスピネルは最初は石に周^{シユウ}を使って投げていたのだが、二

ヶ月目くらいからは木の枝をナイフで削り簡単な投げ矢っぽい物を作って行つようになり、三ヶ月目くらいにはソコソコ獲れる様になっていた。

4つ目……………山犬やオオカミを狙つて（纏デンを使った素手で）狩る。

この訓練はただの実地訓練と食料調達、お金を稼ぐ目的で行っていた。ただ怪我はしたくないので、纏デンは解かないで行つた。最初の一月ほどは上手く避ける事が出来ず、噛み付かれてから殴つて倒していたのだが、最近では全く触れられる事無く倒す事が出来るようになっていた。

そしてさらに三ヶ月の時間が過ぎた頃からスピネルは今まで訓練していた場所よりさらに山奥に入りだしたので。

「よし、あとはオマエだけだな。助けてやるからさっさと行けよ……………」

スピネルの後ろには動かなくなったオオカミ3頭が横たわっており、目の前には多少の怪我はしているが未だ攻撃の姿勢を崩さない1頭が唸り声を出している。

「オマエじゃ俺には勝てないって、解つてるだろ……………ほら、見逃してやるから行けつてっ！」

少し強い口調で手を振ると観念したのか、オオカミは山の奥へ走り去った。

「ふむ、今日はもう少し奥に行ってみるか」

最近のスピネルは毎回このような事をしている。山犬やオオカミを探し積極的に狩っているのだが、その集団で一番強そうな一匹を必ずにがしているのだ。

「……………そろそろ戻ろうか。帰り道の時間もあるし」

スピネルが来た道を戻り始めた時、横の木々から何か灰色の物が現れた。

「おおっ！熊だっ！……………そう言えばドーレさんには熊も居るって言ってたな。熊も獰猛な肉食か……………ヒューリ兄い達がここまで来る事はないけど、万が一って事もあるから狩って行くか。念のため堅^{ケン}っ！って、うわあっ！」

スピネルがウダウダと余裕をかまして考え、やっと構えた時、当然の事ながら野生の熊が待っていてくれるハズも無く先に猛然と突っこんで体重の軽いスピネルは10メートル近く飛ばされ木にぶつかった。

「び、ビツクリしたっ！怪我は無いな」

服に着いた泥を落としながら立ち上がったスピネルは、今度は油断せずにしつかり構えた。

「さあっ！やるかっ！」

ジリジリと熊へ構えを崩さずに近づくスピネルに、熊は立ち上がり三メートルもありそんな高さから威嚇の雄叫びを挙げ右前足を振り下ろした。

「ふんっ！……うお流石は熊、すつげえ力だな」

振り下ろされた右前足を堅^{ケン}を纏った左腕でしっかりとガードし、ダメージは全く受ける事は無かったが、踏ん張っていたスピネルの足は足首まで地面にめり込んでいた。

「それじゃ、お返しだよっ！うりゃあっ！」

「ゲボアッ！」

左腕でガードした体制から、スピネルは右手で力一杯の正拳突きを熊の下腹部に打ち込んだ。すると、熊は先ほどスピネルが飛ばされた以上の距離を吹っ飛んでいった。

「おおおー、さすがは熊だ。オオカミならあの一撃で倒せるのにつて、んん？ヤツパリ相当きいたみたい？」

倒れていた熊が起き上がる様を見て思わず感心しかけたスピネルだったが、立ち上がった熊はかなりダメージを受けたのかフラついてる。

「おろ？……かすかにスリ傷ができてる。やっぱり熊の爪ともなると威力が半端じゃないな！。纏^{テン}じゃヤバかったかもな。さて、とどめを刺すとするか」

左腕にうつすらと赤い線を見つけ驚いた所でもう一度構え熊に目をやると、口から涎を垂らし低く唸っている。

「んじゃ、行くぞっ！フツ……ハアッ！」

「ゴガアツ…………グボ……………」

熊へ向き構えたスピネルは、ひと息吐くと素早く背後に回り込み軽く飛び上がると首筋に全力の正拳突きを叩き込んだ。

「…………よし、ちゃんと仕留めたな。さっきのオオカミの荷物も有るし肉と毛皮だけにしとくか」

倒れた熊の息がない事を確認したスピネルは、その場で手早く解体し急いで家への帰路についた。

・ ・ ・

「なあ、ヒューリ兄い、スフェーン兄い、たまには一緒に山に行かない？魚でも捕りにさー」

熊を仕留めてから更に一月ほど経った頃、兄達が時間的に余裕がある日を選び声を掛けた。

「んん？そうだなあ、今日はそんなにバタバタしてないから俺は別にいいぞー」

「そうだねえ、僕もかまわないよ。今まで一緒に行った事無かったし、今日はスピネルに魚の獲り方を教わろうかな」

「オーケー。それじゃ、用意してくるよ」

「あ、ちょっと待てスピネル。昼ご飯はどうするんだ？行くなら

食ってからのほうがよくないか？」

兄達の返事を聞き、用意をしようと部屋へ行きかけたところで後ろからヒューリが声をかけた。

「昼ご飯？なら獲った魚を焼いて食べたらいいいんじゃない？」

「そうだね、せっかく山に行くんだしそういうのも良いかもね。昼ご飯三人分減らしてもらう様にヒスイに言って来るよ」

山での食事を気に入っただのか、スピネルの返事に少し嬉しげにスフェーンはキッチンへ歩きだした。

それから三人はゆっくり話しながら歩き、小一時間ほどして水汲み場を越え山に入った。

「ねえ、どうせならキノコや山菜も少し集めない？魚と一緒に焼くよ」

「そりゃいいな。とりたてを焼いて食うのも旨そうだ」

山中を流れる川に向かう道すがら、スピネルの提案によって山菜を探しながら歩いた。

「スピネル、これは食べる事ができるのかい？」

「ああ、スフェーン兄い。それは食べれるよ。ああっ！ヒューリ兄いっ！それは毒キノコだ。食べれないよっ！」

二人は何かを見つけたる度にスピネルへ確認し、それに毎回丁寧に

スピネルは答えていた。そうこうしながら歩いていると、ようやく川に到着した。

「さて、丁度昼時だし魚を獲ろうか。ヒューリ兄い、スフェーン兄い、簡単な魚の獲り方を説明するよ。その大きな石を二人で持つてあそこの川の浅瀬にある、大きな岩に叩きつけて。石が自分達の方に跳ね返らないように角度に気をつけてやってね」

スピネルの説明を黙って聞いていた兄達だが、説明が終わった途端にヒューリが口を開いた。

「要は、岩に石をぶつけるダケだろ？そんなんで魚が獲れるのか？」

「まあまあ、兄さんスピネルの言う通りにやってみようよ。山での事ならスピネルのほうが詳しいんだし」

二人は川辺にあった三十キロはありそうな大きめの石を両方から持ち上げ、浅瀬にある大きな岩の前まで運んだ。スピネルと比べる訳にはいかないが、兄達ふたりも毎日ゴミ山で重たいゴミをどかしでは目的の廃材探しをしているため普通の大人よりよほど力がある。

「よ、よし。スフェーン、せーのでぶつけるぞっ！」

「ええ、わかりました兄いさん」

二人は石を頭上に持ち上げ足を踏ん張り

「せえーのおっ、どりゃっ！」「」

二人が投げつけた石は大きな音を出しながら岩の天辺近くに当たると、二人が立っている反対側に跳ね返り大きな水しぶきを上げて川に沈んでいった。

「ふう、これでいいのか？ん？アイツ何処にいったんだ？」

「あつちにいるよ、兄さん」

ヒューリが振り返ると先ほどいた所にスピネルはおらず、スフェーンが指す下流側の川の中にいた。

「なかなか大きいのが上がったよーっ！」

大きい手で手を上げたスピネルの両手には、長さ40センチ以上もある大きな魚を三匹も掴んでいる。

「おおっ！三匹も獲れたのか？すげえーなっ！でも、何であんなんで魚が取れたんだ？」

スピネルの元へ駆けつけたヒューリは、魚を見て興奮しながら矢継ぎ早に話す。

「そうだね、ちゃんと説明するよ。でも、お腹も空いたし、お昼を食べながらでいいよね」

近くに火を起こしたスピネルは獲った魚のうち一匹を三等分に捌き、行き道に採った山菜も簡単に味付けし焼き始めた。そして今やった「がっちゃん漁法」を食べながら簡単に説明した。

「……………だから魚が気絶して浮んでくるんだよ」

「なるほどなあー、確かにこの方法なら道具もいらぬし簡単だな」

「ええ、これなら僕達にもできるしね」

三人はそんな話しをしながら、お腹一杯にお昼を食べ終えた。

「さてー、お腹も膨れたし魚二匹じゃみんなの分には足りないからもう少し上流であと何匹か魚を取ろうよ」

スピネルの言葉に頷いた兄達は、川にそってさらに山奥に進んだ。

「よしよし、これだけ獲れば十分かな」

「……………石が砕けるって……………相変わらずメチャクチャな力だな……………」

「ま、まあ、一回でこれだけ獲れば効率もいいしね……………」

何時もの様に投げつけた石は砕け散り大きな岩もえぐれた様にキズが付き、川には十匹以上も魚が浮かび上がった。

「あつ！そうだ。二人共そのロープ見て。飛び飛びだけど、かなり先まで張ってあるんだ」

「ん？木に括り付けてあるあのロープか？」

「そう、あのロープ。もし山に入っても絶対にあのロープより奥には行ったらダメだよ。あの奥は山犬やオオカミ、熊とかの獰猛な

肉食動物の縄張りなんだ。人間を見つけたら絶対に襲ってくる。俺が縄張りを確認して張ったからさ」

真面目な表情で言うスピネルに二人は真剣な顔で頷いた。この三ヶ月間、スピネルはここより1キロほど奥で肉食動物を狩り続け、リーダー格だけを逃がしていた。そしてそれを続けつつ、張られるロープより500メートル程奥へ入った場所で自分の臭いの着いた布等を木に括りつけていた。スピネルは人間を襲う動物へ自分の危険性を植え付け、それと同時に自分の臭いを覚えさせ、スピネルの臭いを縄張り線として、それ以上こちらに来ないようにしたのである。

縄張りや、肉食獣の危険度を簡単に説明したあと三人は山を降りはじめた。

「あつ、忘れてた。帰り道のついでに三カ所罨を見に寄ってもいいかなー？」

「ん？帰り道なんだろ？まだ日も高いし別に構わないよな？」

「ええ、僕はいいですよ。せつかくだし、スピネルがどうやって獣を捕ってるかも見てみたいしね」

2人が賛成してくれたのでスピネルは来た道を少しズレて三人で罨を見に向かった。

「おつ！掛かっているみたいだ」

戻り始めて少し歩いたところで太い木に目立つ赤い布が付けられており、その横のヤブの地面に50センチくらいの穴が開いている。

「…………あの穴が罫なのかい？」

ヤブの手前に止まったスピネルにスフェーンは話し掛ける。

「うん、獣道っぽいのを見つけたら穴を掘ってるんだ。そして葉でフタをしてその上に獣を解体した時に出る内臓や血を寄せエサにして置くんだよ。あの木の布は罫を作った場所の記しさ」

2人に説明をしながらも、スピネルはしゃがみ込んで穴を覗いた。

「へっへー、やっぱり掛かってるよ」

一度後ろに下がったスピネルは、2人に見る様に促した。

「おおっ！イタチだろこれっ！」

「へえ〜、見事に落ちてるね」

スピネルは二人が驚きながら見終わったあと、長い木の先をナイフで尖らせ留めをさした。

「いやー、今日は面白かったぜ」

「うん、色々と勉強になったよ。スピネルありがとう」

三人はその後話しをしながら、家に帰って行った。

「さあ、今日からは狩りまくって肉集めないよ」

スピネルが兄達と山へ入ってから二ヶ月経ち丁度9才の誕生日まで後一月を切った頃から、スピネルはいつも以上に獣を狩りその肉で薫製や、干し肉をせっせと作っていた。そして一月後、家族みんなでささやかながらスピネル9才の誕生日を祝った。

「ふあゝあ……今日もいい天気になりそうねえー。ん？何かしらこの手紙は」

朝一番に起きたファイアがテーブルに置いてある手紙を見つけた。そして孤児院の皆はこの数分後スピネルが家の何処にも居ない事に気付くのだった。

二章少年期 6話 9才×旅立ち(前書き)

アチコチに独自設定や、独自解釈がありますが何卒大目をお願いします。

二章少年期 6話 9才×旅立ち

「お母さんっ！スピネルがつ！」

朝一番に起きたサフィアは大慌てで母親の部屋に向かった。

「……………ふう。で、何てかいてあるんだよ」

サフィアが大騒ぎした結果家族全員が部屋に集まり、スピネルが出て行った事が皆に伝えられた。

「ええ、ヒューリ兄さん……………最初に勝手に出て行く事をみんなに謝ってるわ……………そしてあの子はお金を稼ぐつもりみたい……………簡単に言つと、みんなが将来やりたい仕事ができるようになって……………手紙には毛皮を売ったお金が12万ジェニーが入ってるわ。あと、兄さん達には手書きの地図みたいなのが付いてる……………」

「……………そうか…スピネルが出て行ったのは俺のせいかもしれない……………随分前に俺はあいつと将来の事を話したんだ……………きっとそれが原因で……………」

「……………兄さん、その責任は僕にもあるよ。コンピューターの時だって僕と兄さんが何とかしようとしてたのを知って、スピネルが色々頑張ってくれたんだ……………今考えると山に誘ったのも……………」

「スフェーン、山に誘つたつてどういう事？今迄あの子が誰かと山に入った事なかったわよね。スピネルがあなたを誘ったの？」

今まで子供達が話しているのを黙って聞いていたアマリアが、ス

フェーンの言葉に口を開いた。

「うん、結構前の事だけど、スピネルが急に僕と兄さんを山と一緒に行こうって誘ってきたんだよ。その日は二人共忙しくなかったし、スピネルが山でどんな事してるかも気になったから行ったんだ。そこで僕達にスピネルは魚の獲り方や罾の仕掛け方、危険な動物の縄張りなんかを丁寧に説明してくれたんだよ。きつとあの時には出て行く事を考えてたんだ……僕があの時に気付いていれば……」

「……そう、そんな事があったのね……」

「……ねえ、サファイア姉さん……最近あの子すごい沢山のお肉を取ってきては干し肉とか作ってたのも……」

「……そういえば……そうかもしれないわねえ……」

サファイアとヒスイも最近のスピネルの言動に何か思い当たる物があつたのか、お互いにションボリと話している。

「……三年したら戻って……あいつどうやってお金を稼ぐつもりなのよ……簡単に子供なんて誰も雇ってくれないのに……」

ヒスイから受け取った手紙を見て、エメラが目には涙を溜めてつぶやいた。

「……確かに私もそう思うわ……でも、あの子は平気でムチヤな事もするけど、決して考えなしに行動したりはしないわ。それにあなた達の話の聞くかぎり、かなり前から自分が居なくなった後の事も考えてくれてた様だしね。あの子なら大丈夫っ！無事を信じ

て待ちましよう。三年経つてあの子が笑顔で家に帰ってこられるように、私達もがんばりましようっ！」

アマリアが皆に向けて精一杯の笑顔で言うと、子供達も少し表情が明るくなった。

「……………そうねえ、あの子なら大丈夫ね。さあ、朝ごはんの準備をしなきゃー」

サファイアが何時ものノンビリ口調でそう言うと、皆も頷き一斉に動き出した。

そして、その頃スピネル自身はと言うと……………

「……………ふうー、今どの辺りだろ？四分の一くらいはすすんだのかな？」

孤児院の町から既に十キロ以上離れた場所を、北東へかなりのスピードで走っていた。今スピネルが向かっているのは、孤児院の町から一番近い山岳部にある町だ。通常は定期的にバスが走っており、片道3時間ほどの道のりだ。そのお金を使いたくないスピネルは街道を走って向かっていた。

・
・
・

「うへえ、結構疲れたあ……………そりゃ、八時間、百五十キロ近くを走り続けたら疲れるか……………日が高いうちに泊まる場所さがさないと」

孤児院の町を朝の6時に出発したスピネルは昼ご飯休憩一時間以外走りつづけて、目的の町に昼の三時に到着したのである。

何軒かさびれた感じのホテルに値段を聞いて廻ったスピネルは、一番安かった5千ジェニーの古いホテルにチェックインした。

「ふう……取りあえず寝る場所は確保できたか……しかし、よく9才の子供が一人で来て泊まれるもんだ。まだ日も高いし、町を見てまわろうか」

そのあと、辺りが暗くなるまでスピネルは町を見て廻った。今まで孤児院の町しか見たことがなかったスピネルにとって、この町は十分都会に思え非常にワクワクしていた。

「うふう、部屋にお風呂があるなんて、なんて贅沢なんだあー」

背中のリュックに入れて来た携帯食料の干し肉を食ベ夕食を終わらせたスピネルは、部屋に備え付けられている小さいお風呂に入りご満悦でくつろいでいる。今迄孤児院ではお風呂自体が無く、体は寝る前に水で拭くくらいしかできなかったのだ。

「ふううー、お湯に入るって最高だなー……さすが五千ジェニーも取るだけはあるよ。明日も早起きして、出発する前にもう一度お風呂に入ろうー」

翌日何時もどおりに朝の6時には起き基本的な四人行の訓練をしてから朝風呂に入り、朝食の干し肉を食べてから町を出発したのだ。

「…………ふうふうふうーああ〜疲れたあー……………しっかし、すっげえーなーこんな高い建物見たことないや……………」

朝の7時くらいには出発したスピネルだったが、走ることに昼休憩を別にして約12時間。距離にして約二百キロ以上を走りきり、夜の八時を過ぎた頃に目的の町に到着したのである。

「……………もう夜なのに全然暗くない……………この辺りで一番大きい街らしいけど……………って、いつまでも驚いてられないんだっ！早く寝床を探さないっ！」

立ち並ぶ高層ビル群の明かりに目を奪われていたスピネルだったが、我に返ると大慌てで泊まる所を探しに街へ姿を消した。

「いや〜見つかって良かったあ〜、一瞬野宿も覚悟したよ」

慌ててアチコチのホテルを聞いて廻ったスピネルだったが、街の中心部のホテルは何処も値段が高くとてもじゃないが払える金額ではなかったのだ。そうして聞きながら移動し、街外れでようやく安いホテルに辿り着く事が出来たのである。

「……………ああー疲れたあ……………手早く〜ご飯食べて寝よ……………」

結局ホテルに入ったのは夜の十時を過ぎていた為、その日は干し肉を食べ、さっさと就寝した。

そして翌朝何時もと同じ時間に目をさましてしまったスピネルは、訓練をして朝風呂に入り家で用意した最後の干し肉を食べホテルを出たのである。

「……………昨日の夜も驚いたけど、明るくなってから見るとさらに
すげえー景色だな」

スピネルが泊まったホテルは街の外れにあった為、外に出て街の方へ目を向けた先には高層ビルが樹木のように乱立していたのである。

「……………おっ！そうだ。先に 飛行船発着場をさがさない」と

そう呟いたあと、スピネルは街に向かって歩き始めた。

「ようこそいらつしゃいました。飛行船チケットをお求めですか？」

人に聞きながら辿り着いた飛行船発着場はホテルとは反対側の街外れにあった為、二時間も掛ってようやく到着した。

「あ、えーと。予約した スピネルⅡストーン です。あっ！予約
番号が、えーと、あった、あった。1657番です」

不安そうな顔で飛行船のチケットカウンターの前に立ちリュックの中をゴソゴソと探し、ようやく見つけた番号の書かれた紙を見てホッとした顔をし受付の女性に手渡した。

「はい、1657番……………ええ、スピネルⅡストーンさんでご予約承っております。3等船室になりますので六万八千ジェニーになります。よろしいでしょうか」

今から半月程前にスピネルは家のコンピューターで飛行船のルートや金額を調べ、予約をしていたのである。

「はい、間違いなくお預かりいたしました。こちらがチケットになります。この飛行船は6番ゲートからの搭乗になります。搭乗開始は12時30分からです。出発予定時刻は13時30分になっております。くれぐれも時間までには搭乗口にお越しくくださる様にお願いします」

カウンターで無事にチケットを手に入れたスピネルは、一息つこうと待合室の椅子に腰掛けている。

「やれやれ、何とか飛行船には乗れそうだが、良かったあゝ……でもまだ結構時間があるよな」

スピネルが壁に掛った時計に目をやると時間は11時15分を指していた。まだ搭乗開始までには時間があり、当然初めて来た飛行船の発着場に興味をそそられたスピネルは時間まで館内の散策を行った。

そしてスピネルが時間通りに乗った飛行船は、13時30分にゆつくりと上昇を始めたのだ。

「すっげえっ！本当に空に上がってるっ！」

飛行船が動きだすと、スピネルは丸い窓の所に行き上昇する様子に驚きの声をあげた。そして、ひとしきり外を眺めた後に自分の番号が書かれている場所に向かうのだった。

「……………いい、一番安い三等船室だもんな……………仕方ないよな……………」

自分のチケット番号の所に辿り着いたスピネルは、小さなため息をもらしたのだ。目の前には高さ1メートルほどの木の柵で区切られた20メートル四方の場所があり、床には絨毯が貼られ何人かの人はその中で適当にねころんでいる。一番安い三等船室とは決められた区画の中で数人が雑魚寝で過ごす船室の事である。

「ダメだ……………こんな処で寝転んでも余計に空腹感が増えるだけだ……………」

一度は自分の番号の場所で寝転んではみたのだが、昼食を食べてない為じつとしていると余計に意識がお腹に向くので諦めて再び立ち上がった。

「ん〜、何かないかなー、お？インフォメーション？」

フラフラと歩くスピネルの目に船内案内所の看板が写り、近くに寄って見ると船内案内の小冊子が並んでいる。

「へえー、色々なあるんだなあー。無料施設と有料施設か〜」

手に取った施設ガイドには無料施設として、大浴場、食堂、図書室、展望台等があり、有料施設として、喫茶店、美容室、エステサロン、ラウンジ等が載っている。

「夕食までまだだいぶ時間もあるし図書室で暇つぶしでもしようか」

それから四時間近く夕飯のアナウンスが流れるまでスピネルは夢中になって本を読んでいた。

「……………こ、これ全部好きだけ食べていいのか……………な、なんて贅沢なんだ……………」

アナウンスが聞こえ、急いで食堂に駆けつけたスピネルには様々な料理が大皿にタップリ盛られ、それを自分の皿に適当に取っている人の姿が目にはいる。この飛行船は三食付になっており、基本は全てバイキング形式をとっている。

「昼ごはん食べてないし、ハラペコだったんだっ！さあ、食べまくるぞっ！」

列に並び、料理を適当に皿に入れ席に着いたスピネルは気合を入れて食べ始めた。

「モグモグモグ何て美味しいんだ。まだまだ食べれるぞ……………」

食べ初めて一時間経ってもスピネルは食べ続けている。

・
・
・

「ふう〜、もうそろそろ限界かな……………後はデザート食べてシメだな」

食べ始めから二時間以上経ち、ようやくデザートに取り掛かりだすスピネルだった。本人は余り廻りから変に見られたくないので、

皿には普通の量を盛り付けゆっくり食べて何度も足を運んでいた。その甲斐あつて食事に来ていた他の客には特に変には思われなかった様だが、食堂の従業員達には奇異の目で見られていた事に本人は気付いていなかったのである。

そして時間を掛けた食事のあとは何時もの応用技の訓練を行い大浴場でゆっくりお風呂につかり体を癒し、自分の番号の位置でリュックを枕に眠りについた。

「到着予定は明日の朝か〜今日も図書室で本でも読むか〜」

朝何時もの時間に目が覚め、何時もの様に基本四大行の訓練をして軽く風呂で汗を流し朝食（一時間の食事だが……）をすませている。

・ ・ ・

「……………かなり大きい街だなあー、やっと到着か」

翌日の朝食後、窓から外を覗くと眼下には乗船した時の街よりさらに大きいと思われる街並みが広がっていた。

二章少年期 7話 到着×新たな生活(前書き)

中々思い通りに進みません(；；) 温かい目で見て頂けると有り難いです。よろしくお願いします。

二章少年期 7話 到着×新たな生活

「……………ようやくここまで来れた……………そうじゃないな……………ここから頑張らないと来た意味すら無くなるんだ……………知識（前の俺）にあつた場所、この天空闘技場の街に」

スピネルは飛行船で約二日半かけて孤児院と同じ大陸の東端にある天空闘技場の街にやってきたのだ。この街は世界屈指の歓楽街であり、街の中心にそびえ立つ天空闘技場が街のシンボルにもなっている。その天空闘技場とは、格闘のメッカとも呼ばれ251階、高さ991mからなる塔で世界第4位を誇る建物である。初めは一階から闘い50階以上は一勝ごとに10階ずつ上がり、ファイトマネーは階数が増えるごとに高くなって行く。主に199階以下と200階以上で分けられ199階以下は通常の格闘が行われ、上階のフロアの選手ほど個室が用意されるようになったりと、待遇も良くなっていく。そしてこの闘技場を訪れるのは選手だけではない。ここに来る観客は格闘マニアであったり、賭博マニアであったり、マフィアの引き抜きであったりと様々な人種が訪れ、ほとんどの観客が選手の勝敗に多額の金を掛けているのである。

「ま、まさかこの列が天空闘技場まで続いてるんじゃないよな……………」

飛行船を降りて五分も歩かないうちに長蛇の列に行き当たり、その列は見る限りかなり遠くに見える超高層の塔へと続いているのである。

「す、すみません。この列って天空闘技場に行く為に並んでいるのでしょうか？」

一番後ろと思われる場所に並んでいる、格闘着らしき服に身を包んだ中年の男の人に恐る恐るスピネルは尋ねた。

「んん？ああ、そうだぞ。この列は闘技場の受付に向かう列だ。まさか君のような子供が選手登録するつもりではあるまいな」

「あ、えくと、どんな感じか見てみたくて……」

スピネルは苦しいかなっと思いつつも適当に言い訳をする。

「む、なるほど。すぐ傍で見る事で肌を感じる事もあるやもしれんな。いい心がけじゃないか少年。頑張って学ぶのだぞ」

なにかかかってに納得しスピネルの頭を撫で始める中年男に、適当に返事をしながら列の長さを目をやり小さくため息を付いた。

「ようこそ天空闘技場へ、選手登録で宜しいでしょうか」

列に並ぶこと三時間、ようやく受付に到着したのは昼をまわったからのこと。

「あ、はい。お願いします」

「はい、それではこちらの書類を読んでもらいます、了承していただければサインをお願いします。あと、こちらの書類にも項目ごとに記入してください」

二枚の書類を受け取ったスピネルは先に進み、筆記用のカウンタ―にやってきた。

「一枚目が同意書、二枚目は経歴書か……………」

スピネルが手渡された書類の一枚目は同意書である。その内容を簡単に説明すると、この闘技場内での戦闘行為で大怪我、死亡する事があつても闘技場及び、対戦相手には一切の責任を問わない事を誓約する物である。そして二枚目には、自分の名前、年齢、出身地、格闘経験年数、流派、最後に自分が死亡した場合の荷物や資産の送り先を書き込む物である。

「はい、書き終わりました」

スピネルが書き終わった書類を、さらに先に進んだカウンターに居る受付嬢に手渡した。

「……………はい、問題ありませんね。それでは一階闘技場の待合室でお待ち下さい。あなたの番号はこちら、1789番です。アナウンスで番号が呼ばれましたら呼ばれた番号の闘技場が上がってくださいね。それでは頑張ってください」

形だけの激励に一応お礼を述べたスピネルはそのまま進み、一階闘技場に入って行く。

「うひゃー、広いなあー。一体幾つの闘技場があるんだろ？」

スピネルの目前には建物の中とは思えないほどの広さの空間が広がっており、ざっと見て二十メートル四方くらいの闘技場が数十個は並んでいる。

「観客席に座ってる人も選手かな？みんな手に番号書いてる紙持

ってるし……参考になりそうだし、俺もここで見てようかな」

闘技場を覆うように設置された観客席には選手と思われる人がパラパラと座っている。念も使えるし肉体的にも訓練してきたスピネルだが、本当に自分が通用するのか不安でしようがなかった。

・
・
・

「……うん、今まで見た人の動きなら余裕で追えるし、何とかやれそうだ。パツと見た感じ念が使える人も、今の所は居ないみたいだし……ちょっと安心したな」

観客席に座り番号が呼ばれないまま既に一時間近くが経過していた。初めのうちは不安そうな表情で闘技場を見ていたスピネルだったが、次第に顔色も良くなり肩の力が抜けてきたのである。

「1756番と1789番の選手は第H闘技場に起こして下さい。
175……」

スピネルが観客席で他の選手が戦っている様子を見始め、二時間近く経過した頃にやっと番号が呼ばれた。

「もしかして、もう呼ばれないんじゃないかと思った……何か待たされ過ぎて緊張感も無くなったな」

待ちくたびれたのか、重そうに腰を上げたスピネルはゆっくりと階段を降り闘技場に歩き出した。

「ナンバーの書かれた紙を渡してください。はい、両名とも間違
いありませんね、それでは簡単にルールを説明します。試合時間は
3分間。勝敗は負けを認めるか、戦闘不能の状態になった方が負け
となります。それと武器の使用は200階以上のフロアのみ使用可
となっておりまして。そのフロア以外で武器を使用した場合は当然負
けとなりますが、対戦相手が負傷した場合はその慰謝料も支払って
頂く事になっております。それ以外では急所を狙おうが、どの様な
攻撃も認められます。何か質問はありますか？」

観客席から闘技場フロアに降りたスピネルは闘技場の真ん中に大
きく書かれた記号を見ながら歩き、Hを見つけるとその舞台上が
った。スピネルが闘技場になると、対戦相手と思われる金髪でハ
デな柄シャツを来たチンピラの見本のような男が立っており、審判
と思われる人が二人を手招きし説明をしたのである。

「ハッ！面倒臭い話しはいらねえよっ！要はこのガキをぶっ殺し
たらいいだけだろうがっ！さっさとはじめやがれっ！」

審判の問いかけに怒鳴り返す事で返事をしたチンピラ風の男は、
ニヤニヤしながらスピネルの反対側の開始線に下がった。

「……………キミは聞きたい事はないかね？」

「はい、今は特にありません」

勝手に歩きだしたチンピラの男に冷たい視線を向けたあと、まだ
横にいたスピネルにも審判は聞いた。

「両者とも開始線に立って下さい。では戦闘開始っ！」

「ガキがこんな場所に来るのは十年早えーんだよっ！病院のベッドの上で泣くんだなっ！」

審判が開始を宣言したと同時にチンピラ男は何かをわめきながら猛然とスピネルに向かい走り出す。

「……………（アイツ右手を振りかぶり一直線に向かってくるけど本気か？いや、油断は禁物だ……………そう見せかけて違う事するかもしれないし、ギリギリまで見極めないとな）……………」

ドタドタと走り寄る男の動きに真剣な目を向けながら、スピネルは油断無く構えている。

「死ねやあつ、ごらあつ！」

走り込んだチンピラは奇声を上げながら振りかぶった右手の拳を体ごとスピネルの顔めがけて振り下ろした。

「……………（マジか？そのまま殴ってきやがった……………丸見えのわき腹殴ってもいいよな？）……………」

顔面に迫る拳をギリギリまでひきつけ一瞬で右側に避けたスピネルの前には、拳をよけられ体勢を崩したチンピラのわき腹が殴ってくださいと言わんばかりに曝け出されていた。

「ふんっ！」

「ぐぼあああああ……………」

余りにも簡単に隙が出来てしまった状況に返って不安を覚えながらも、スピネルはがら空きになったわき腹に力半分の正拳突きを叩き込んだ。口から何かを撒き散らしながら殴られたチンピラは場外まで吹っ飛び、そのあと起き上がってくる事はなかった。

「……………し、勝者1789番。うむ、キミは50階に進みたまえ。このチケットを50階の受付に提出してくれ。そうすれば今回のフアイトマネーを貰え、次の試合の登録もする事になる。詳しい事はその受付に聞いてくれ」

驚いた顔をした審判は手元の機械を操作すると、一枚の小さな紙を機械から打ち出しスピネルに手渡した。

「……………1階だからか？全然強くなかった……………運が良かっただけかもしれないな。まあ、取り敢えず50階に行かないと」

初めての戦闘に勝ち喜びたいハズのスピネルだが、何か釈然としない表情をしつつも言われたように50階へ行くべくエレベーターに乗りボタンを押した。

「あ、あの、これってここでいいんですか？」

エレベーターを降りた目の前のカウンターに座っている女性に、スピネルは手元の紙を見せている。

「はい、こちらでお預かりします。え〜と、スピネル「ストーン様」ですね。まずフアイトマネー152ジエニーをお渡しします。続いてスピネルさんは本日このフロアでもう一試合行うことになります。試合開始時間は5時〜6時に第2闘技場で行われます。必ず5時には第2闘技場の選手控え室に来てください。それと闘技場の詳しく

い事はこの冊子に書いてありますから読んでおいてください。何かご質問はございますか？」

スピネルはファイトマネーと言われ、受け取った小銭に目を落としている。

「あ、あのファイトマネーってこれだけ？」

スピネルが戸惑いながら言う言葉に受付嬢は苦笑いで答えた。

「ええ、始めて闘技場に来た人にはよく聞かれるんですよ。1階のファイトマネーは勝っても、負けても152ジェニーがもらえます。缶ジュース1本分ですね。1階の戦闘では選手の力量を測るための試合ですから。ただ、10階から上では観客も見に来ますし、当然賭けも行われます。正式なファイトマネーは10階から支払われますが、それを手に入れる事が出来るのは勝者だけになります」

「はあ……………そうですか」

手の中の小銭を見ながら、納得がいったのか頷いて返事する。

「他にご質問はございますか？」

受付嬢が笑顔でさらに質問が無いか聞いてくる。

「え」と、次の試合って5時から6時って言うてましたよね？試合時間が一時間ってこと？」

「いえ、その前に行われる試合によって時間が若干変わりますからその様な形で選手の方には控え室にて待って頂く事になっていま

す。他に何かございますか？」

「……………んー、今のところはいいです。あっ、そうだった！何か食べる所はありますか？」

「ええ、お渡しした冊子にも載っておりますが選手用の食堂もございます。食堂は24時間開いておりますので、どうぞご利用ください」

その後、冊子を見ながら食堂への道を歩くスピネルだった。

小冊子には闘技場内での選手の守るべきルールや、施設説明が細かく書かれていた。選手に課せられたルールはそれほど多いものではない様で、当日試合の予定がある選手は観客席には入れない（イカサマを防ぐ為）選手同士の八百長試合（バレた場合はその試合で闘技場が被った被害を全額負担）闘技場内で選手同士の試合以外の戦闘行為、選手は全ての試合に賭ける事は禁止（試合観戦はOK）等である。そして今スピネルが向かっている食堂等の施設については、選手用の大食堂、大浴場、トレーニングルーム、宿泊施設（100階以下の選手は有料）美容院、各種雑貨店等が揃っているのだった。

「くうう、この金額でこれだけの量が食べれるなんて……………選手用大食堂、なんて太っ腹なんだ……………味もサイコーっ！」

スピネルが狂喜しながら食べているのはランチのセットメニューなのだが、350ジェニーでご飯のお代わりは自由、オカズは何と5種類もあり、肉、魚、野菜とふんだんに用意されている。ちなみに朝の定食は200ジェニー、夜の定食は500ジェニーと非常にリーズナブルなのである。

「はあく美味しかったあー。お腹一杯だあく。あの食堂があれば、ここでの食事は心配いららないなー」

食堂でゆっくりと食事をし大満足でスピネルは控え室に戻っている。

最近のスピネルは食べる事に大きな喜びを感じる様になっていた。数日前まで居た孤児院では調味料をあまり使わない為、基本薄味な物がほとんどであった。しかも、貧乏な上に子供の数が多いのでどうしても一人当たりの食事は少なくなってくる。スピネル自身は特に不満は無かったが、実際には満腹になるまで食べた事がなかったのだ。その反動かは解らないが、食べる事への喜びが人一倍に芽生え出したのだ。

「シー……………（一階で戦ったチンピラより全然速いけど、あれなら行けそうだな）……………大丈夫だな」

選手控え室にある大きなスクリーンには30メートルくらいの四角い舞台上、2人の男が何やら戦っている様子が映し出され、スピネルの周りにも数人男がその画面に目をやっていた。

・
・
・

「チケットお預かりします……………はい、スピネル様ですね。50階での勝利おめでとございます。ファイトマネー5万ジエニーになります、えーと、スピネル様は口座番号をお伺いしていないので現金で宜しいですか？」

選手控え室で他の選手が戦っているのを見ていたスピネルであったが5時を少しまわった頃に名前が呼ばれ、第2闘技場で戦ったのだ。対戦相手は巨漢の男だったが、結果は1階の戦闘と大差がない結果だった。そして審判から受け取ったチケットを持ってエレベーターに乗り込んだ。

「あ、はい。それをお願いします」

「はい、それでは5万ジェニーです。お確かめください……次
の試合予定は明日の朝10時〜10時30分、63階第4闘技場で行われます。9時30分には選手控え室でお待ち下さい。他に何か
ございますか？」

「えーと、選手用の宿泊施設ってあるんですね？どんな感じな
んですか？」

スピネルはかなり使い古されボロボロの財布にお金を入れたあと、
受付の女性に泊まる場所の事を聞いていた。50階で貰った冊子に
は選手用の宿泊施設が有るとは書かれていたのだが、詳しい内容ま
では載っていないのであったのである。

「そうですね、有料宿泊施設は大きく分けると値段で3つに分か
れます。高級、普通、低額となります。高級宿泊施設は一泊の費用
が20万ジェニーからとなっております。部屋は最低でも5つあり、
平均200？以上の広さになってます。こちらは基本的に高層フロ
アの選手が無料提供される部屋を断られ、自費で泊まれる事が多
いです。次に普通宿泊施設は一律一泊4千ジェニーで、室内は20
？の部屋が1つと、トイレに浴室が付いています。部屋には備え付
きでテレビモニターと、冷蔵庫、シングルベットがあります。この
普通宿泊施設は100階以下の選手が使用される事が多い為、一般

のホテル等より低い価格設定になっております。そして最後に低額宿泊施設ですが、こちらは一泊1千ジエニーです。15?の1部屋に二段ベッドが2台入っております、四人の方が使用する相部屋になります。通称ドミトリーと言われる物ですね。以上が闘技場内の宿泊施設になります」

受付女性の丁寧な説明を聞き納得いったのか、スピネルは財布からお金を取り出しカウンターに置いた。

「それじゃー、普通のやつお願いします」

「はい、4千ジエニー確かにお預かりしました。お部屋は……えー、66階の127号室をお使い下さい。こちらがカードキーになります」

スピネルからお金を受け取った女性はカウンターに設置されているコンピューターを操作し、カードキーを手渡した。

「うわあー、普通って言ってたけど十分な広さじゃないか……ベッドも大きいし」

受け取ったカードキーを使い、部屋に入ったスピネルは嬉しそうにアチコチを触りまわっている。

「ふう、寝床も無事確保できたな……最初はどうなるかと不安だったけど、何とかなって良かったあー……ほっと、したらお腹空いたなあ。晩ごはん食べに行こうっ！」

部屋で少し休憩した後、リュックを置いたスピネルは足取りも軽やかに選手用食堂に向かって行った。

二章少年期 8話 闘技場×仕送り(前書き)

段々独自解釈が増えてきそう……大目に見てくださいっ！宜しく
お願いします。

二章少年期 8話 闘技場×仕送り

「クリーンヒットお！ナガス選手、1ポイントっ！」

「くそっ！また引っ掛かったっ！」

今スピネルは83階の第6闘技場で戦っている。

闘技場に着いた初日に50階を勝ち上がり、二日目も60階、70階と順調にクリアーしていた。

そして現在は3日目の83階で行われている試合の最中である。

この二日間に行っていた試合とは違い、今の対戦相手であるボクサースタイルのナガスにスピネルは追い込まれつつあるのだ。

「ハアっ！トリヤっ！（この小僧動きも突きもべらぼうに早いが、フェイントに全く対応できてねえ。攻撃さえくらわなけりゃ10ポイント勝ちだぜ）」

「ヒットおっ！、ナガス選手1ポイントっ！」

二人の試合に立ち会っている審判が続けてポイントコールを行う。

「クッ！……………（くそっ、今ので8ポイントか……………一発でも決めれば俺の勝ちなのに……………こうなったら相打ち覚悟で当ててやるっ！フェイントだろうが何だろうが食らった瞬間に突きを叩き込んでやるっ！……………」

「おらぁっ！」

「セイツー！」

一気に走り寄ったナガスが右ストレートを放つとそれに併せて、スピネルもガードを全くせず右手から正拳突きをくりだしたのだ。

「ぐふう……………」

「スピネル選手クリーンヒット1ポイントっ！……………ん？これは……………ナガス選手は気絶とみなし、勝者スピネル選手」

結果から言うとナガスの右ストレートはスピネルの顔に当たる寸前で止まり、渾身の左フックを放っていたのだが、右ストレートに合わせて放ったスピネルの正拳突きが先に当たりそれをモロに食らったナガスが場外まで吹き飛び気絶し試合終了となったのである。

「はぁ……………何か全然ダメだった……………」

大きなため息をつきながら90階に向かうエレベーターにスピネルは乗り込む。

今の試合でスピネルが相手に攻撃したのは最後の一撃のみであった。スピネルの戦い方は基本的に相手の攻撃をガードしそれと同時に正拳突きや、回し蹴り等を放っている。それが今回の試合で相手の選手はジャブやストレートの中に巧みにフェイントを織り交ぜ、その虚々実々の戦い方にスピネルは見事に振り回されサンドバックに近い状態となっていたのだ。

「チケットをお預かりします……………スピネル「ストン様、80階勝利おめでとございませう。ファイトマネーは……………えー、現金でよろしいのですね？」

90階の受付嬢が少し驚いた顔でカウンターの下から何やらモゾと取り出した。

「えー、こちらがファイトマネー50万ジエニーになります……
…差し出がましいようですが、もし良ければ銀行口座をお作りになられたらいかがでしょうか？これより上の階層になればさらに金額が上がってまいります。お手元に大金を置いておかれるのは何かと無用心ですから」

何やら元気の無い表情をしていたスピネルだったが、受付嬢の言葉に頷いて答えた。

「そりゃそうか。でも身分証明無いけど作れるんですか？」

「はい、可能です。指紋認証と網膜認証で口座を作る事が出来ますので。当闘技場15階に大手銀行8社の受付がございます。そちらに行っていたただけでしたらその場で口座開設して、カードもその場で受け取れますよ」

「そっかぁー、それなら作ろうかなー」

受付嬢の説明に納得がいったスピネルはそういいながら顔を受付嬢に向けると、カウンター背後の壁に備え付けられたモニターに先ほどの自分の試合が流されており、思わず顔をしかめた。

「……………カッコわる……………」

「え？どうかされましたか？」

先ほどまで普通であったスピネルが急に何か呟き不機嫌な顔にな

ったので、慌てて受付嬢が聞き返す。

「あ、いや、何でもないです……………あんなフエイントに引ッ掛かって……………我ながらダサいな……………やられ放題だ……………ん？これって録画してるって事か？）……………あ、あのちよつと聞きたいんだけど、試合って録画してるの？」

スピネルが急に話題を変えた事に一瞬驚いた顔をした受付嬢であったが、さすがにプロらしくすぐに適切に答えだす。

「はい、1階以外の試合は全て録画しております。ご要望があれば有料にはなりますがお渡しする事はできます。ただ、階層が上がるほどその金額も高くなってまいります」

「そうなんだ……………あ、あの、さっきの俺の試合の録画やつ欲しいんだけど」

「あ、ご自身の試合の分ですか。それなら無料でお渡し出来ます。後ほどスピネル様の部屋のモニターに転送しておきます」

「ええ、お願いします。んじゃ、口座作りに行こうかな」

スピネルが受付嬢に挨拶して歩き出そうとした時、呼び止められた。

「あ、スピネル様、口座開設の時、携帯電話からの支払いも出来る様にされた方がいいと思います。後々に携帯電話を持たれる可能性があるのですから、携帯電話で支払いや残高確認もできますから」

「なるほどね、解りましたあ。ありがとうございます」

スピネルは礼を言うと15階に向かってエレベーターを降りるのだった。

15階におりたスピネルは銀行の1つに入り色々な説明を受けた後口座を無事に開設し、部屋に戻ってモニターを何度も見直していた。

「……………そうか、俺が反応するのが早すぎるから簡単に裏をかかれるんだ……………」

スピネルが今日の試合を何度も見直し、ようやくフェイントに騙された理由の1つを見つける事が出来た。スピネルが気付いたのはガードをするのが早すぎて、相手に早い段階でバレてしまい裏をかかれていたのである。相手が右ストレートを構えた瞬間にスピネルは左腕を上げ構える。相手にすればパンチを放つ前に受けられる事に気がつけば当然違う手を打つのは当たり前である。これはスピネルが山で散々鍛えた、優れた動体視力と素早い反射速度が裏目に出た形となってしまったのである。

「……………むむむ、ガードについてはギリギリまで見極めるようにして構えれば対応できそうだけど……………（それだけじゃまだまだダメなんだろうなあー、今日みたいに攻撃を受ける覚悟で倒しても全然意味無いし……………ここにはお金を稼ぐ事もあるけど、次の目標に行く為の訓練でもあるんだから。もし、自分と同じ念能力者が相手だったら簡単に攻撃を受けるなんて自殺行為だ。今は負けてもいいからきちんと学ばないと……………それに今日の事で俺には経験が圧倒的に足りない事も解ったし……………明日から他の人の試合もしっかり見て頑張ろう……………」

翌日朝から行った90階層の試合は相手がパワーファイターだった為問題なく勝ち上がり、昼からの100階層の試合でスピネルは初めての敗北となったのだ。試合相手はシュートボクシングのような格闘技で戦い、前日の反省を踏まえて戦ったスピネルだったが善戦むなしく10ポイントを取られ敗れたのである。

その日以降スピネルは夜にはその日の試合を見て反省し、昼間の空いた時間は他の選手の試合を真剣に見入っていた。

「うわっ！、ここも破れてる………繕い用の布は持って来なかったんだよね、明日買いに行くか」

初めて敗北を味わった日から既に六日経っており、ガードする事を前提とした戦いをするスピネルの服の袖やズボンはかなり激しく痛み、アチコチと破れはじめている。

「ふう〜、今日は負けたから試合はもう無いな」

一応受付に行き、今日の昼から試合が無い事を確認した。

この闘技場での試合スケジュールは基本的に一日1試合なのだが、試合で全くダメージを受けなかった場合等はもう1試合組まれる場合がある。当然負けた場合はダメージにもよるが、早くても翌日しか試合は組まれないのだ。

「……………オイオイ……………見た事ない数字が並んでるぞ……………」

天空闘技場から出る前にお金を降ろそうと思い15階の銀行に来たのだが、その端末に出てきた残高の金額にスピネルの頬は引き攣っている。

「……………ろ、650万ジェニーって……………お、多いに越した事はないよな……………アハハハ……………家に色々買って送れるけど、たった10日でどうやってお金を稼いだのかかえって心配されそうだ……………手紙も書いて……………」

一度部屋に戻ったスピネルは家の皆に宛てて短い手紙を書いた。手紙には体は元気だとか色々と書いたが、一番言いたかったのは送る物や、お金は決して悪事や不正な事で稼いだ訳ではない。仕事内容は言わないが、胸を張って使える事をきっちり書いた。

「……………そう言えばここに来て始めて外にでるんだなあー」

天空闘技場から外へ出たスピネルは僅か10日ほど闘技場内にいただけなのだが、何故か感慨深く外を眺めていた。

「さて、始めに服を買わないと……………こんなボロボロだと目だつてしょうがないし。その後、携帯電話買いに行こうか、家に送る物も見に行きたいしな」

スピネルは色々と考えながら買い物をするべく、街に向かい歩き始めた。

・ ・ ・

「いらっしやいませっ！お坊ちゃん、どのような電話をお探しですか？」

まず最初は服を買いに向かったのだが、世界屈指の歓楽街だけあり超高級ブランドから普通の服まで何百件もの店があり、試合用の空手着の様な物と普段着用の服、その他下着や靴下と揃えるのに一時間以上も掛ってしまった。そして携帯電話の店も何十と並んでおり、いい加減疲れたスピネルは適当な店に入ったのだ。

「ん〜、探してる物っては何に無いけど、お勧めの電話ってます？」

スピネルが店中に展示されている様々な電話に目をやりながら言う、中年男性の店員は笑顔で頷いている。

「ええ、ええ、ございますよ。そうですねー、これなどいかがですか？最新型カードタイプです。超薄型の最軽量でして電話機能、メール機能、振込み支払い機能の標準機能も完備……………」

その店員さすがにプロらしく笑顔を絶やさず、十分以上掛けお勧め8種類の電話の機能や値段を説明していた。

「むむむ、どれも便利そうだなー。4番目に説明してくれた虫みたいなやつも一回見せてくれませんか？」

「ええ、こちらですね、ビートル07型。携帯電話としては少し重くなりますが、標準機能（電話、メール、振込み支払い機能）の他、全世界対応で屋外での圏外がなく、200種類の民族言語の翻訳機能、テレビも見れますし、録画機能も付いています。今お買い

上げ頂ければ、定価20万ジェニーとなりますが18万ジェニーにてお売りいたしますよ」

店員の説明を真面目な顔で聞きながら、スピネルは虫の形（カブトムシ型）をした携帯電話を触っていた。

「そうだなー見かけは頑丈そうだし、性能も良さそうだ。これ買うよ」

電話を選んだあと、手続きや登録を行い二十分ほどして外に出た。

「ふうー、買い物もなかなか疲れるな。ハラも減ってきたし先に昼飯にするか」

時間は昼を既に回っておりファーストフードで簡単に食事をした後、身の回りの日用品を軽く買い、家に送る物を買いにデパートに入った。

「まずは車椅子だな。ヒスイ姉えの車椅子、古くて車輪がギシギシいってたからなー」

スピネルはデパート5階にある、杖や車椅子が売っている介護用品の売り場に向かった。

「すみませーん、車椅子のカタログってありますか？」

スピネルが売り場をウロウロ見ていると、棚の商品を整理している年配の女性店員が目に入った。

「あ、はい。車椅子のカタログですね、ございますよ。それでは

こちらのテーブルにおこし下さい」

売り場の真ん中に設置されている応接用のテーブルに案内されたスピネルは、テーブルの真ん中からせり上がって来た小型モニターに写されている車椅子の説明を聞きながら画像を見た。

「……………でございます。続いては電動車椅子になります。こちら……………」

「あ、電動のはいいです。買いたいののは手動のやつなんで」

手動タイプの説明が終わり、続いて電動タイプの説明が始まるうとした処でスピネルが説明を遮った。

「そうですね、今ご説明させて頂いた商品が当店で取り扱っております手動タイプの車椅子になります。何か気になった物はございますか？」

「そうだなあー、二番目に説明してくれた車椅子をもう一度見せてもらえますか？」

「はい、こちらです。もう一度簡単に説明しますね。この車椅子は最新型でして、今発売されている車椅子では最軽量になっております。機能として、座椅子部と背もたれ部に特殊な低反発マットが入っており疲れにくくなっております。そして右の肘置きには携帯電話がセットされており、緊急時にもすぐに電話ができるようになってます。あと、段差などでの衝撃が吸収できるように車軸には特殊なバネが内蔵されています。こちらは16万ジェニーとなっております」

「うーん、使うのが俺じゃないから実際はよく解らないけど、最初の説明で今一番売れてるって言ってたし……これにします。ただここで買い物するつもりなんで、買った商品まとめて配達してもらってできますか？」

「はい。当デパートでのお買い上げ品ならまとめて発送する事はできますよ」

「そつかぁー、んじゃ、これ下さい」

介護用品の売り場を後にしたスピネルは家に送る物を色々と買い、辺りが暗くなりだした頃やっと闘技場の自分の部屋に帰ってきた。

「ふう〜、お腹も膨れたし今日は慣れない買い物で疲れたな……」

…早く夜の訓練（念の応用技の訓練）終わらせて休もう」

その日スピネルは何時もより早めにベッドに潜り込んだのである。

二章少年期 9話 ある日の孤児院×闘技場の日常（前書き）

小説情報を修正しました。原作乖離 ほぼ原作無関係 原作に沿った物をお好きな方は避けてくださった方が良くもなりません。宜しくお願いします。

二章少年期 9話 ある日の孤児院×闘技場の日常

朝の食事時間が終わろうかというタイミングで玄関を叩く音が響いてきた。

「はいはい、今開けますからあ」

キッチンから大きな声で返事をしながらサフィアが玄関の扉をあける。

「はあ、い、どちらさま？」

「すみませーん、配達物をお届けにまいりました」

扉のむこうには配達会社の制服に身を包んだ男性が居り、その後ろにも二人の男が立っていた。

「配達？うちですか？」

「はい、後ろのトラックの荷物全部こちらへのお届物です」

少し驚いた顔で男の後ろに止まっている軽トラックに目をやると、その荷台には綺麗に包装された物が満載されている。

「ええっ！あ、あの荷物全部ですかあ？………一体誰から？」

「えーと、送り主は………あ、あった。えと、スピネルⅡスタンスンからですね」

「す、スピネルからっ！お、おかあさんっ！ち、ちょっと来てえー」

配達員が言った名前を聞いて数秒間固まっていたサファイアだったが、慌てて振り返り大きな声で部屋にむかい叫んだ。

「なによ、サファイア。朝から大きな声をだして」

「何かあったの、姉さん」

サファイアの声聞いたアマリアやヒスイが奥から玄関にやって来て、何事かとその後ろに他の子供達も集まってきた。

「す、スピネルが送ってきたって……………」

「す、スピネルっ！あ、あの子がどうしたの？何かあったの？」

スピネルの名前が出て驚いたアマリアも、慌ててサファイアの傍に駆け寄った。

「す、スピネルがね、スピネルが……………」

「落ち着いてよ、姉さんも母さんも。で何があったの？スピネルに何かあったの？」

後ろにいるヒューリ達も気になっているようだが、ヒスイが二人を落ち着かせ話しをうながしている。

そこへ

「えーと、あの配達物を運び込みたいんですが……………」

玄関で戸惑っている配達員がおずおずと声を掛けてきた。

「あ、そうだったあ。あのね、この配達物はスピネルが送ってくれたみたいなのー」

やっと落ち着いたサフィアが事情をヒスイに話した。

「配達物？そう……………あの子に何か有ったのかと驚いちゃったわ。で、あの子が送ってくれた物ってどれなのかしら？」

同じく落ち着きを取り戻したアマリアも配達員に聞き返す。

「あ、はい。あのトラックの品物全部です」

配達員が再度後ろに止まっているトラックを指差した。

「おいおい、あれ全部って……………アイツは何を送ってきたんだよ」

トラックを見たヒューリが全員を代弁するかの様に呆れた口調で呟いた。

「あ、明細はこちらにありますから、内容と商品を確認したらサインをお願いします。それと手紙もお預かりしてますからお渡しますね。では先に運び込ませて頂きますね」

そのセリフを言い終わると配達員は手元の書類を目の前に居るサフィアに渡して荷物の運びいれを開始した。

「母さん、何て書いてあるの？」

広間に移動したアマリアはファイアから受け取った手紙に目を通し、その周りには子供達全員が固唾を飲んで待っている。

「ええ、まずは勝手に出て行つた事を謝つてるわ……………それと自分は健康で元気だつて、あとこの手紙に同封してるお金とあの荷物を買ったお金は自分が働いて稼いだお金だつて。決して犯罪行為や、後ろめたい物では無いから安心して使つて欲しいと書いてあるわ」

「か、母さんっ！封筒に50万ジェニーも入ってるよ」

母から預かつた封筒の中身を確認していたエメラが驚きの声をあげ、その金額を聞いた全員が固まっている。

「……………あ、アイツ一体何やって稼いだんだ？アイツが出て行つてからまだ20日程しか経つてないんだぞ……………」

ヒューリの言葉は全員が思い浮かべている事だろう。

「わざわざ手紙を書いたのも、それを伝えたかつたからなんでしょうね。この短い期間でそんな大金を送ってきたんだから。それに送り先の住所も書いてないから、きっと心配させたくは無いでしょよね」

周りと違い一人冷静にスピネルの考えを予想し口にはしているヒスイだが、内心は心穏やかではなかったりする。

「……………そうね。あの子は無茶はするけど、間違つても犯罪や人を騙すような事をする子じゃないわ。あの子が苦勞して送ってくれ

たお金だもの、大事に使いましょう。荷物も見てからサインしないとね」

少ししんみりとなったのだが、全員は急いで荷物を運んでもらっている部屋に向かった。

「あ、今梱包解いています。解き終わった商品から部屋の端に並べていますから明細書と確認お願いします」

部屋に運び込まれた商品に半分が既に包みを解かれ並べられている。

「おおっ！米じゃねーか。1、2、3……50キロもあるぞ」

「こつちには木炭ですよ、兄さん。30キロあります」

「うそっ！コンピューターが二台もあるよっ！すごっ！電腦コードも二台分ちゃんと有るよ」

並んでいる商品に驚きの声を上げながらも大喜びで一同は商品を触っていた。

「すみませーん、こちらは何処においたらいいでしょう？大きな物ですのぞ」

配達員の一人が梱包を解き終わった物の置く場所をサファイアに尋ねて来ている。

「あ、はい、えーと……それは……ヒスイっ！こつちに来てー」

「なに姉さん、ってそれは……………」

部屋は荷物と商品で一杯だった為、車椅子に乗っているヒスイは外の廊下から様子を見ていたのだ。サファイアに呼ばれ入り口に来たヒスイはサファイアの目にある物に目を奪われた。

「ええ、車椅子ね。スピネルはあなたの車椅子が随分古くなってると言って、よく油を挿していたから新しいのを送ってくれたのよ。優しい弟ねえ。せっかくだし乗ってみたらどう？」

「そうだよ、ヒスイ。肩かしなよ」

様子を見ていたスフェーンがヒスイに肩をかして新しい車椅子に座ってみる。

「あ、こちらが商品説明書になります」

配達員から受け取った説明書をパラパラと流し読みしたヒスイは思わずため息を付いた。

「どうしたの？何か気に入らない事でもありそう？」

横で見ていたアマリアが心配そうに声を掛ける。

「ううん、違うの母さん。あの子車椅子の事解らないから、きつと一番最新の高いやつ選んだんじゃないかと思って……………この車椅子携帯電話まで付いてるのよ……………通話料の支払いもあの子に行きみたいだし。見てよこの説明書、すごい性能よこれ……………」

半ば呆れ気味に苦笑いで説明書をアマリアに手渡した。

「……………本当。すごいわね、この車椅子。でもあの子があなたの為にわざわざ送ってくれたんだから大事に使ってあげなさいな」

「ええ、もちろん。大事に使わせてもらうわ、母さん」

その後も商品に確認と開梱作業が続き、運び入れから二時間以上掛り無事に配達員は帰っていった。

結局先に確認した以外に、アマリア宛の手あれ用塗り薬や全員の上下の服3セット、男性用下着や靴下、各種調味料セット、布が何種類かロールで送られていたのだ。

その日は全員が大喜びで新しい服を着てみたり、コンピューターをセットしたりと孤児院からは夜遅くまで賑やかな笑い声が響いていた。

・ ・ ・

そして買い物をしてから10日くらい経った頃のスピネルといえ
ば……………

「ふうー、朝の訓練（念の基本四五行）も終わったし、ひと風呂浴びて朝ごはんにしようか」

闘技場に来てからも毎朝6時に起き、朝の訓練をして7時過ぎに朝ご飯に向かうのがスピネルの日課となっている。

「おっ！今日も元気そうだなスピ坊」

「あつ、おはようございます、バリイさん。バリイさんも今から朝ご飯？」

「ああ、そうだ。んじゃ、一緒に行くか」

スピネルが玄関を出た所で隣からも同時に出てきた巨漢の男がスピネルを見つけると、親しげに話し掛けてきたのだ。

この男は名をバリイと言い、巨漢に空手着を着込んだ年の頃40代と思われる170階層の選手である。この男とスピネルが知り合ったのは一週間ほど前の事だ。今スピネルは115階の部屋に住んでいるのだが、スピネルが今戦っている階層は100階〜120階の辺りをウロウロしているという状態なのである。日用品など以前より少し荷物が増えた為、毎回移るのが面倒になったスピネルは闘技場に了解を取りこの場所に落ち着いたのである。そして隣に住んでいたのがバリイであり、彼もまたそこに定住していた。朝や昼のうちに食堂やトレーニングルームで顔を合わすうちに何かと会話をする様になり仲良くなったのである。

「おはようございます。バリイさん、おはようスピネル君」

「おはよーっす」

二人が食堂に入ると、奥のテーブルに座っている二人の男たちが声を掛けてきた。

「おつ、おはようさん」

「おはよう、コーフルさん、サライダさん」

バリイとスピネルは声を掛けてきた二人と同じテーブルに腰掛けた。

このコーフルと言う男は黒色長髪細身で俗に言う拳法着のような物を着用しており、柔らかい物腰で挨拶しているが150階層のれっきとした選手である。

そしてもう一人はテーブルに伏したまま手を上げて挨拶してきた男で名をサライダと言い、こちらも140階層の選手である。この男は茶色の短髪に上半身は裸で下半身は短パンのみ、足の膝から下にはテーピングの様な物を巻いている。

「サライダさん、相変わらず朝は弱そうだね」

「ええ、彼が中々上に上がれないのは朝の試合に滅法弱いのが原因だからね。超が付く低血圧なんだ」

サライダに目を向けて苦笑いしながら言ったスピネルに、同じ様な表情でコーフルが答える。

この二人は元々バリイと親しくしていた様で、バリイと知り合ってからスピネルはこの二人と何かと話す機会が増えたのである。

「お前達二人は何時からなんだ？」

食事をしながらバリイはコーフルとサライダへ顔を向ける。

「あ、オレは10時からっす」

「私は9時半からですね。スピネル君は？」

「オレも10時からです」

「うむ、ワシも10時からだ。全員無事に勝って昼飯で集合したもんだな」

バリーの言葉に三人は頷きそれぞれの階層に向かう。

その後バリーとスピネル、コーフルは無事に勝ち昼からも試合に臨んだのだが、サライダはやはり朝の試合は何時も通りの動きが来ず敗北した。

「……………やっぱり上手い人のフェイントは巧みだな。もっと全体をみないとダメか……………」

自分の試合の合間や、空いた時間はなるべくスピネルは他の選手の試合を観戦し参考にしていった。

この日は二試合をこなし、三人とワイワイしながら夕飯を食べ、夜の訓練（念の応用技の訓練）をしてお風呂に入り眠りについた。

天空闘技場でのスピネルが過ごす日常の風景だった。

二章少年期 10話 夏×闘技場のイベント(前書き)

更新速度が遅いです……すみません。

二章少年期 10話 夏×闘技場のイベント

「スピ坊も140階層か、もしかしたらサライダと当たるかもしれないな」

「うえっ！スピネルとはやりたくねえな……そのちいせえ拳にあのバカ力は反則だぜ」

「ひどっ！サライダさん、それは言いすぎだあ」

スピネルが天空闘技場に来て早や二ヶ月が経っており、バリイの言葉でも解る様にスピネルは140階層に上がっていた。

「ハハ、サライダ君が言うのもあながち間違っちゃいなと思うよ。スピネル君の小さな拳にあのパワーだからねえ。まともに喰らうと一撃で病院送りなんだから」

サライダのセリフに文句を言うスピネルだが、柔らかい物腰でコッフルが追い討ちをかけてくる。

「まあ、言ってる事は間違っちゃいな。スピ坊もそう不満そうな顔をするな。格闘家としては誉められているんだからな」

何気に追加でスピネルに言うバリイだが、一応話をまとめるべくフォローらしき言葉を口にする。

「ハハ、その通りですね。あ、そう言えば明日くらいにサマーバケーションのイベントプログラムが配られるらしいですよ？」

「おおっ！もうそんな季節かー。来週から街も騒がしくなりそう
だ」

「サマーバケーション？イベント？何ですかそれは？」

話に出てきた単語がよく解らないスピネルは、バリイに聞き返す。

「サマーバケーションって言うのは7月1日から半月程世界中で夏休みの時期に入るんだ。元々この街は世界有数の歓楽街だから普段から観光客が沢山いるけど、このサマーバケーションの時期には世界中から人が集まるんだよ。ここから東に行くと有名な海水浴のビーチやマリンスポーツ専用の港や施設が沢山あるし、この街は歓楽街にしては物凄く治安がいいから金持ちや、特権階級が家族連れで休暇を過ごしに良く来るんだ。それに一般の旅行会社でもこの時期にツアーを組んでるから余計にね」

スピネルに質問されたバリイが目でコーフルに説明をうながすと、苦笑いで頷いたコーフルが丁寧に説明を始めた。

「そして、そのサマーバケーションの時期に天空闘技場でも様々なイベントが企画されるんだ」

「企画？この闘技場で？」

「ああ、そうだよ。この闘技場だっていわゆる客商売の1つだからねえ、客のニーズに合わせて色々な事やってるよ」

「この闘技場の中は特殊な世界ってイメージを持ってたけど、案外俗世っぽいな……………」

いきなり現実を目にした気分で微妙な表情をしているスピネルに、コーフルも苦笑しつつ話しを続けている。

「そう言われると、そうかもしれないね。それに夏のイベントの特徴はこの闘技場に来る客も試合に参加出来る事かな」

「ええ？一般の人が試合にでるの？」

さすがに驚いて大きな声を上げてしまったスピネルに、他の席の選手の数人が何事かと目を向けている。

「ハハ、さすがに一般人には無理だよ。この場合は世界中の金持ちや、国の権力者連中が自慢の護衛や部下を出場させるのさ。あの程度出場する人の実力を闘技場主催者側が確認してから、どの階層の選手と戦わせるか判断するんだよ」

コーフルの説明によろやく納得したスピネルは新たに浮かんできた疑問を口にする。

「んじゃ、何時もみたいに対戦は勝手に決められるって事？」

「いや、たぶん明日朝に配られると思うけど、参加は選手の自由意志なんだよ。そのかわり試合に勝てばファイトマネーは通常より高いし、商品も出るからね。参加する選手は結構多いんだ」

「まあ、そういうことだ。どんな事するかは明日には解るだろう、楽しみにしとくんだな」

その後軽い雑談をし、四人は食事を済ませ席を立った。

「おはようございます、バリイさん。受付でプログラム貰ってきましたよ」

翌日朝食の席でコーフルが三人にイベントプログラムを手渡している。

「どうやら今年はタッグマッチも有るみたいですね。これなら個人対戦とタッグマッチと二試合申し込みできますね」

三人（サライダは半分寝てる）がプログラムに目を通してる間に、コーフルが簡単に説明している。

「ふむ、そうだな。だが、試合数が限られているから申し込んだ選手全員は無理だろ。たぶん闘技場の方で選手を選んだらうがな」

プログラムから目を離さずにバリイが言うと隣に座っているコーフルも頷いている。

「ええ、そうですね。ま、運みたいなものですし申し込みだけでもしょうよ」

「そうだな。それならスピ坊、タッグマッチはワシと申し込まんか？おまえさんのスタイルは防御主体、ワシは攻撃主体だから相性は良いハズだ。コーフルも防御型、サライダは攻撃型だ。お前ら二人も相性は良いしなの」

「あ、はい。オレは全然かまいませんよ。バリイさんの足引つ張るかもしれないけど」

あまり深く考えず、笑いながらスピネルは頷いた。

「そうですね、では私はサライダ君と申し込みしましょうか。では全員個人戦とタッグマッチの二試合に申し込みという事ですね。申し込み受付は今日中なのでちゃんと出してくださいよ」

夕方までにスピネルとバリイ、コーフルは受付に提出を済ませていたが、朝に弱いサライダが提出しておらずコーフルに引つ張っていかれ書類を書かされていたのである。

・ ・ ・

「さああっ！今年もやってまいりました夏の祭典んっ！今日から一週間んっ、何時もよりさらに熱く激しい戦いが繰り広げられますっ！皆様心ゆくまでお楽しみくださいいっ！ではサマーズイベント1試合目を開始しましょおおっ！まず……………」

申し込みをしてからの六日間は普段通りの闘技場内ではあったのだが、場内の雰囲気は浮き足立っており瞬く間に時間は過ぎていった。

「……………相変わらずすごい人の数ですねえ、今年も夕方からの試合はこの街限定でテレビ放送するらしいですよ」

コーフルがトレーニングルームのモニターを見ながら軽く呆れて

いるようだ。

「ちえっ、結局イベントの試合にでれねえのはオレだけじゃねえかよ。賞品には期待してたのによぉー」

脚力強化のマシーンでトレーニングをしているサライダが不満を口にする。

「それは仕方ないじゃないか、決めたのは闘技場の運営サイドだからね」

ブーブーいつているサライダをコーフルが苦笑いでなだめている。

「でもスピネルはズリィーよなぁー。コーフルさんは個人戦だけ、バリーの旦那はタッグマッチだけ、両方出れるのスピネルだけだからなーいいよなぁー」

ランニングマシンで走っているスピネルは困った様に笑って頷いている。

「私は明日の17:00、二人のタッグマッチも明日の18:00、スピネル君の個人戦は最終日前日の19:00でしたね……:もしかして、テレビ放送の視聴率が上がりそうな選手を選んだのかもしれませんねえー」

マットの上で柔軟運動をしていたコーフルが手を止め顎に手をやってからつぶやいた。

「オイオイ、なんだよそれはあっ！俺の試合じゃ、視聴率が取れねえっていいいたいのかよっ！」

コーフルの言葉を聞き、流石にサライダもムツとしたのか大声でコーフルに食ってかかる。

「そんな事は言っていないでしょう、サライダ君。相変わらず短気ですわー」

マットに座り軽く顔ふりながら、コーフルは大きな仕草でため息を付けてみせる。

「これはあくまで私の予想ですけど、スピネル君みたいに小さい子は闘技場ではあまり見かけませんよね？しかも100階以上となると彼以外には居ないでしょう。9才の子供が140階層で対戦するなんて、一般の人からしたらどんな子供か気になってテレビを見る人が増えるでしょう？そうになるとスポンサーも沢山着いて闘技場側にも利益がでますからねえー。十分ありえる話したとおもいませんか？」

話を聞くにつれ、サライダも何とも言えない表情を浮かべている。

「その確率はかなり高いかもしれないな。イベントの試合は各試合事にスポンサーが着く。視聴率が取れそうな試合なら多くの企業がスポンサーに着く、その分闘技場も収益が上がるからな」

「くそおー、俺もスピネルと組めばよかった……………」

恨めしそうにバリイに視線を送るサライダにコーフルは再度呆れた仕草をしている。

「でも勝たないとファイトマネーも賞品も貰えないんでしょう？
そう喜んでばかりもいられないよ」

「確かにその通りだね。さすがはスピネル君、何処かの誰かと違
い、しっかりしてるね」

その後も四人はウダウダと話しをしつつ、トレーニングに精を出
したのである。

・
・
・

「やったじゃねえかあつ！さすがコーフルさんだぜえ」

イベント二日目に行われたコーフルの個人戦は、三十分の戦いの
末コーフルが相手を気絶させ勝利した。相手は某警備会社の主任警
備員で元警官だったのだが、実力及ばず敗退した。

「ええ、何とか勝てましたよ。ありがとうサライダ君」

多少の疲労は見取れたコーフルだったが、大した怪我も無く小
脇に抱えた箱を置き控え室の椅子に腰掛けた。

「クラーツ鋼で作られた手甲かよっ！なかなか良い賞品を選んだ
なあ」

コーフルが置いた箱を羨ましそうにサライダは眺めている。

「ハハ、それは運が良かったんだ。四つの中から選んだダケだし

ね

「そうだけど、これ作ってもらおうと思ったたら100万ジエニーじゃきかないぜ？他の箱の中身も気になる所だけど、十分当たりだろう？あと、スポンサーからの賞品エール酒一年分っていいよなあ」

「私はお酒はそれ程飲まないし、キミにあげるよ。今回試合に出れなかった事だしね」

「マジで？それじゃー遠慮なく頂くぞ？コーフルさんサンキュー」

「ええ、構いませんよ。それより、バリイさん達の試合はまだですよね？」

「おっ！そういや、もう始まる時間だな。それじゃ見に行こうぜえ」

さつと着替えたコーフルとサライダの二人は控え室を出て、試合観戦に向かった。

「さあっ！本日のイベントマッチ第四弾っ！フリータッグバトルですうっ！まず始めに選手の紹介をさせて頂きましょうっ！闘技場サイド選手入場おっ！」

かなりハイテンションなアナウンスにうながされ選手控え室の入場扉からバリイとスピネルが姿をあらわすと、会場内から大きな歓声が沸きあがった。

「す、すごい人ですね……………観客に押し潰されそうだ」

スピネルはスリバチ状になっている観客席を見上げ顔色をなくしているが、バリイは何処吹く風で何時もどおり平気な顔で笑っている。

「ふん、きにする事はない。しょせん戦う相手はたったの二人だ。何時もの試合とさして変わらんさ」

バリイの言葉にほんの少しだけ重圧が減った気がしたスピネルだったが、未だに冷静にはほど遠い状態の様だ。

「さあっ、今入場して来る二人が闘技場サイドの選手。前を歩いているのが170階層の選手、バリイ〓ロクモンです。この選手は空手家で、あの大きい体から繰り出す重厚な攻撃には定評があります。そしてその後ろを隠れる様に入場しているのが150階層の選手、スピネル〓ストーンです。この闘技場の100階以上では唯一人の一桁代、なんと現在9才と半年というお子様な選手ですが、彼の戦闘スタイルは回避、防御から相手の一瞬のスキを突いて繰り出される強烈な突き、非常に玄人好みの戦い方で人気の選手です」

「ほう、人気があるそうだぞ？」

「よく言いうよっ！そんな事初めて聞いたよ！」

アナウンスに適当にケチをつけながら歩いているうちに、二人は闘技場に辿り着いた。

「さあっ！続きましての入場はラカエル商会所属、サムタリ〓ウライ選手とマエル〓ウライ選手の双子の入場ですっ！」

「へッ！ラカエル商会つていやあ、ただの地上げ屋じゃねえか。何かツコ着けた名前乗ってやがる」

相手選手の会社名を聞いた途端、観客席に居たサライダが文句をこぼす。

「こちらの手元に届いているウライ選手達の情報によりますと、何か特殊な拳法の使い手としか記述されていません。果たしてどのような戦いを見せてくれるのでしょうかあっ！」

紹介された双子の選手は軽く手を挙げ、観客席に答えながら闘技場が上がって来た。

「さあ、両選手出揃いました。それでは簡単にルール説明を致します。この試合はフリータッグバトルです。四人には同時に闘技場で戦っていただきます。勝敗はどちらか一方のチーム二人が戦闘不能状態になるか、負けを認めるかの二点のみです。この試合にポイント制はございません。武器使用禁止以外には特に禁止事項もございません。両チームともここまででは宜しいですか？」

場内アナウンスが両方に呼び掛けると、四人共無言で頷いた。

「はい、それでは引き続き賞金、賞品についてご説明します。賞金、賞品共に、勝利チームにしか権利はございません。この試合にはスポンサーとして、4社の企業が参加してくださいさってます。会場の皆さん闘技場の周りに目を向けていただけますか？」

アナウンスがその言葉を口にしたと同時に、闘技場をとり囲んでいる観客席と闘技場の段差部分の壁のモニターに大きく会社名らしき物がハデに映し出される。

「皆さん、拝見していただいでるでしょうか。右のモニターからあー、

世界的に有名な自転車メーカー、アルペイドマウンテン社からは勝利チームに最新型モーターサイクルWGエグザを各1台ずつ送られます。

続いて、貴金属を手がけて50年ハイグレードコーポレーションからは、プラチナダイヤモンドリング5カラットと、同じくダイヤモンドネックレスをセットで勝利チーム各々に送られます。

続いて手作り高級化粧品を世に送り続けるマックスケア社からは、この夏発売予定の最新作レミシルシリーズの最高級香水を男性用女性用セットでこちらも勝利チーム各々に送られます。

最後に、世界中で飲まれているヨルビアンボトラーズからは生絞りメロンジュース一年分を、勝利チーム各々に送られます!!」

アナウンスがスポンサーからの賞品を読み上げる度に、場内の熱気が上がっていく。

「そして闘技場から勝利チームには、4つのボックスからひとつ賞品を選ぶ権利と、賞金として各自に、な、なんとっー!!1千500万ジュエニーもの大金が送られますっー!!」

「……………すげえーな……………スポンサー4社って今回のイベントで初めてじゃね?」

「ええ、やっぱリスピネル君なら視聴率稼げると踏んでの事だし

「ようねえー」

サライダとコーフルが観客席で感心しながら話している時、闘技場では両チームが睨みあっている。

「……………兄上、ここは」

「ああ、解ってる。開始直後にガキを仕留める。どうせ奴ら開始早々は様子見だろうからな」

双子のウライ兄弟はスピネルとバリイを睨みつけながらコソコソと何かを話している。

「ふん、奴らオマエさんに狙いを絞ってくるぞ？どうする？」

「ううん、そうですねえー……………取り敢えず受けてみようかな？今回はポイント関係ないし」

「ハハハ、確かにオマエさんは頑丈だからなー。あんな奴らの攻撃ではダメージは受けんってか？ハハハ……………」

何処が笑いのポイントかスピネルにはサツパリ解らないが、一人で爆笑しながらバリイはスピネルの肩をバシバシ叩く。

「いや、ちゃんと痛いし……………そこまでは言い切りませんけどね……………まあ、そんな感じで（まあ、実際は纏テのお陰だけなんだけどね）」

二人でバカみたいな会話をしているうちにいつのまにかスピネルも緊張が解け、何時もの様子に戻っていた。

「以上で試合前の説明を終わります。皆様あつ！大変っつ、お待ちたせいたしましたあつ！それでは熱く激しいバトルをお楽しみくださいっつ！試合開始っ！！」

アナウンスが試合開始を宣言した瞬間に双子の兄弟はスピネル目掛け、一気に走りこむ。

「……………（やっぱり俺を先に潰しにきたか……………弱そうな方を先に倒す。まあ、セオリー通りだな）……………」

前後に重なりながら走り寄る双子のスピードは一般人から見れば十分に速いのだが、今迄鍛えたスピネルの目にはそれほど早くは写っており、落ち着いて考えを巡らせるだけの余裕が来ている。

「ハアツ！」

「目前に迫った双子の先頭を走っている男が両手で手刀を突き出すと、後ろに隠れる様になっていた方もほぼ同じタイミングで右側面に飛び出し右回し蹴りを叩き込んでくる。

「ふっ！」

正面から来た突きをしゃがみ込んで回避しつつ、左手で回し蹴りを受け流し足払いを仕掛ける。

「クツ！」

正面で突きを放った双子の片割れは、避けられ体が前方に流れた勢いを利用し膝蹴りを繰り出そうとした所で足元に来た攻撃に顔を

歪め斜めに飛びギリギリでかわす。

「兄上っ！」

「チツ、あのガキ思ったよりやりやがる……………だが予定通り先にあのガキを潰す。行くぞっ！」

足払いを飛んで避けた兄の背後に蹴りをガードされた弟は即座に移動し、二言三言交わすと再びスピネルに迫る。

「ふっ、はあっ！（……………威力も早さもさほどでも無いな。一人だと精々100階クラスか）……………」

前後に重なった双子の連打を上手く避けつつ、スピネルは防御に徹しバリイに視線をやる。

「せいやっ！」

スピネルの視線にニヤリと笑い頷いたバリイは、双子が必死にスピネルへ攻撃し自分から意識が離れた瞬間双子からは死角になっている左後背に走り込み正拳突きを放つ。「ぐふっ！」

スピネルに夢中で攻撃していた双子の弟はバリイの正拳突きをモロに受け、10メートル近く飛び闘技場の端に倒れこんだ。

「なっ！ま、マエルっ！」

吹き飛ばされていく弟の姿を見た双子に兄は咄嗟に攻撃の手を止め走り出そうとするが、その前をスピネルが立ちはだかる。

「悪いけど、行かせないよ。あんた達は二人の連携が真髓の拳法みたいだしね」

「クツ！生意気なガキがつ！」

目を血走らせ怒涛の如く双子の兄は攻撃を繰り出すのだが、殆んどは避けらるかガードされている。

「クツ！喰らいやがれえっ！」

必死の攻撃も虚しく避けられムキになった双子の兄は、スピネルの喉を狙い全力で右手の手刀を振り下ろす。

「……………（冷静さを無くしたらダメだな……………其処まで突っ込んで攻撃して失敗したら避けられないだろうに……………）ハッ！ウラッ！」

喉に当たる寸前まで引き込んだ手刀を、スピネルは左手で弾くと同時に右の拳を男に腹部に叩き込んだ。

「ゲフ……………」

双子の兄の体はくの字に曲がり、拳を戻し闘技場の端にスピネルが視線と移すと兄の体は倒れこんだ。

「完勝だな」

「まあね、バリイさんのが随分早かったみたいだけどさー」

「ハハ、ワシは最初の一撃を不意打ちで決めたからの。あれであの男はマトモには動けなんだ。勝負ありだ」

「き、決まったあーっ！二人掛りの攻撃を受け切り、最後はそれぞれ各個撃破だあーっ！まさに玄人好みの戦いを見せてくれましたあっ！勝者はバリイ、スピネルチームですっ！」

アナウンスの興奮が会場全体に広がり、大歓声が埋め尽くしている。

「勝者の二人に皆様惜しみない拍手をお願いします。それでは勝ちました二人にはこれから勝者として賞品を選んで頂きます」

アナウンスが闘技場の真ん中に二人を先導すると、闘技場の入場ゲート近くに大きな箱を載せた4つのテーブルが運ばれて来た。

「さあ、勝利チームのお二人にはこの4つの箱から賞品を選んで頂きます。さあ、どれになさいますか？」

アナウンスが二人に問いかけると、場内の大型モニターに賞品が並べられているテーブルが大きく映し出される。

「スピ坊、オマエさんが選んでくれ。ワシはどうもこうというのは運が無くてな」

「ええっ！……別に選んでもいいけど、良いのじゃ無くても怒らないでよバリイさん」

「ハハ、解つとるわい。気にせんで適当にやってくれ」

「さあ、お二人で話し合いは済んだでしょうか？それでは選んで頂きましょう。何番にされますか？」

アナウンスに聞かれたスピネルは箱を眺め一瞬考えた後口を開いた。

「うーん、じゃ3番」

4つ並んでいる箱の右から2つ目を指し、スピネルは答えた。

「はい、3番ですね？本当にそれで良いですね？それでは3番をオープンっ！」

アナウンスの合図に合わせ、側に控えていた係員が3番の箱を開いて見せる。

「何あれ？」

「むう、ワシにも解らんのもう」

モニターに大きく映し出された箱の中には茶色い塊が二つ並んでいる。

「おおっとお！これが出ましたかつ！これはアセメイド鋼のインゴットです。ご存知無い方も居られるでしょうから簡単にご説明させて頂きます。アセメイド鋼は現在確認されている金属の中では世界で二番目に硬いとされており、重さはなんと鉄の三分の一。世界で最も硬いと言われているニフリン鋼はアイジエン大陸で500グラムが見つかって以降まったく発見されておりません。今現在手に入る金属ではアセメイド鋼が世界で最も硬い物となっております。しかもこの金属もかなり希少な物となっております。一度入ると生きて出る事は出来ないと言われている天空魔境、マゾシスの秘境

でしか見つかっておりません。このアセメイド鋼のインゴットは5キロ分あります。そして世界でもアセメイド鋼加工技術はトップクラスののヨルビアン大陸ウメラク社での好きな武器、防具への加工も賞品に含まれております。補足ですが、この試合の賞品の中で金額的には2番目、入手難易度では1番の賞品を選ばれました。おめでとうございますっ！皆様惜しみない拍手をお願いしますっ！」

「いやぁー勝てて何よりだったなぁー、後で何か奢ってくれー」

「お二人共おめでとうございます。お疲れ様でしたね」

二人が選手控え室に戻ると、サライダとコーフルが二人を労う。

「いや、ワシは大して疲れておらんよ。殆んどはスピ坊がやってくれたからの。ワシは数発殴っただけだからな」

「ハハ、確かにバリイの旦那は楽しんでたな」

「ん〜、でもオレもそんなに疲れてはいないかな……今回の相手は実力的には100階〜120階くらいだろうしね」

「確かに見ていると二人の相手をするには、力不足って感じではありましたね」

「ま、イベントはお祭りみたいなもんだからなぁー、いいんじゃない？何か良さそうな賞品ももらったみてえーだしさ」

サライダの言葉に三人も苦笑いで答えている。

「ま、その通りだが賞品についてはよくわからんな」

「そうそう。結局武器か防具で好きな物作れって事でしょう?」

スピネルとバリイの二人も先ほど説明された賞品については今一つピンと来てない様子である。

「ハハ……二人共かなり良い賞品だと思いますよ?あの金属は基本的に一般ルートには出ませんからね。殆んどが軍関係しか流れませんよ。金額以上にレア度と有用性が高いと思います」

「むう、そうなのか……しかしワシは武器を使わんし、防具といても空手着しか着んからな」

「オレだって武器なんかマトモに使えないし、防具っていつでもな」

二人共微妙に困った表情で考えている。

「まあまあ、二人共そんなに考えなくてもいいんじゃないですか?今すぐ注文する事も無いですし、必要になる事もあるかもしれないから今は置いとけばいいんじゃないですか?」

コーフルの提案を聞き、二人共賞品の事は一度棚上げする事に決めた控え室を後にした。

・
・
・

「結局今回のイベントが一番オイシイ思いしたのはスピネルだっ

たなあー。今日の夕飯奢れよな」

サライダは選手控え室でスピネルにブーブーと文句を言って絡んでいる。

「こら、サライダ君止めなさい。あなたは仮にも29才でしょう、9才の子供にタカってどうするんですか」

今バリイも含めた四人は今140階の選手控え室にいる。フリータッグバトルが終わり、今日はイベント最終日の前日である。

「まあサライダがゴネル気持ちも解らんでもないがな。今日のスピ坊の相手は決して弱くはなかったが、如何せん相性が悪すぎたのう」

「そうですね、たぶん相手は元軍人でしょう。戦闘スタイルが関節技を含めたグラウンドスタイル。スピネル君にとっては最も楽なタイプですからね」

先ほどまでスピネルはイベントの個人戦を戦っており、話しの内容通り結果はスピネルの勝利である。試合内容はコマンドサンボを納めた元軍人の選手がスピネルを転ばす為に立った体勢から果敢に腕に飛びつき関節技を仕掛けたのだが、元軍人の予想に反しスピネルは右腕1本で元軍人の体重を支えきり空いた左拳で後頭部を殴りつけ一撃で試合は終了したのだ。

「コイツあの一撃で1千600万ジェニー稼いだんだぜ？おまけにスポンサー5社って何だよそれって感じだろ？しかも極めつけは賞品がベンスナイフって出来すぎだろお？ナイフマニアのオレだって一度も触った事ないのに……そりゃ、絡みたくもなるぜえ」

サライダが未だにブツブツと文句を続けているのを横目にスピネルは苦笑いで返す。

「まあ、相手には恵まれたと思うし、スポンサーからの賞品は有り難く実家（孤児院）に送らせてもらうけどさ。でもオレ別にナイフとか好きじゃないからあのナイフの何処が良いのかサツパリわからない」

「なつ、なつ、何を言っただオマエはあつ！ベンスナイフだぞっ、ベンスナイフっ！」

口から唾を飛び散らせながら興奮して言うサライダに、顔に唾を受けたスピネルは一発殴ってやるうかと思いついた頃ようやくコーフルが会話に入ってきた。

「ちよつと落ち着きなさいサライダ君。いい加減にしないと叩かれますよ。それにしてもスピネル君はベンスナイフの事自体知らないようですね？」

コーフルが苦笑しながら言う事に、素直にスピネルは頷いている。

「簡単に説明しますとベンスナイフは犯罪者が作成した物なんですよ。本名はベニーードロン。約100年前に居た刀鍛冶であり、大量殺人犯です。この男が作ったナイフは288本、殺した数も288人。全てのナイフにシリアル番号が刻印され、人を殺した時に受けるイメージを元にナイフを作成したって話です。そのベニーが作ったナイフ、ベンスナイフは犯罪者が作成した故に正等に評価はされていませんが非常に優れた物らしいです。しかも最低でも1本500万ジェニーはすると言われていますが、288本しか無い

上に多くの愛好家が居る為殆んど市場に出る事は無いそうですよ」

コーフルの丁寧な説明を聞き終わり、一応納得顔でスピネルは頷き答えた。

「なるほど、珍しいって事は解ったよ。ありがとうコーフルさん」

「なるほどって・・・それだけ？、おっ、オマエはっ！ベンズナイ、ブハアッ！」

説明を聞いても反応の薄いスピネルに詰め寄り唾を撒き散らし始めたサライダの顔を、とうとう額に少し血管を浮き出させたスピネルの拳が貫いた。

控え室の壁際に吹っ飛ばされたサライダをバリイとコーフルの二人は笑いながら見ており、ハンカチを取り出したスピネルはプンプンしながら顔を拭きはじめる。そんなこんなで騒がしく夏のイベントは幕をとじたのだ。

二章少年期 11話 悩み×発(前書き)

む、難しい……宜しくお願いします。

二章 少年期 11話 悩み×発

「母さん、またスピネルが何か送ってくれたみたい」

玄関から戻って来たエメラがキッチンに来てアマリアに報告している。

「あらそうなの？ 今月は月初めに一度送ってくれてるのにねー。どうしたのかしら？」

エプロンで濡れた手を拭きながらアマリアは玄関に向かった。

闘技場で行われたサマーマーイイベントが終了してから三日後の朝食後に孤児院へスピネルからの荷物が届いたのだ。

「ハイハイ、お待たせしましたね」

「いえ、今日のお届け物もかなりの量なんですよ。前と同じ部屋に運ばせてもらって宜しいですか？」

孤児院はかなり田舎にある為配送業者が限られており毎回同じ会社、同じ顔ぶれでやって来るのでそろそろ顔なじみになってきているのだ。

「ええ、お手数ですが宜しくお願いします」

アマリアの了解が出ると、配送業者の男性三人が一斉に数十個はありそうなダンボールを部屋に運び込み出す。

「何だあ？この箱3つ全部栄養ドリンクしか入ってないぞ？」

「兄さん、こっちの箱は4つともジュースしか入ってないよ」

食事が終わり丁度出かける前だったのが、兄弟全員で片付けようと箱を開け中身の確認を始める。

「あの子何でこんな送ってくれたのかしら？」

ヒスイは配送票を見ながら困惑気味に呟いている。

「ヒスイ姉さん私もチラツとは見たけど、スピネルはどれだけ送ってきたの？」

エメラの問いかけにヒスイは書類を読み上げ始めた。

「モーターサイクル1台、ダイヤの指輪とネックレス、プリンター1台、腕時計男女ペア1セット、香水男女用各1個、冷凍牛肉1頭分、メロンジュース365本、食パン一斤が183本、栄養ドリンク365本……たぶんこれ全部最新のやつみたい……」

ヒスイが読み上げた品物を聞いた一同は皆複雑な表情をしている。

「あいつ何を考えて送ってきたんだろ……」

「確かに一貫性が無いと言うか……意図が全くわかりませんねえー」

ヒューリの言葉にスフェーンも不思議そうに答える。

「あらあ？箱の底に手紙が入ってたわよお」

皆が話していた横で箱をボーッと眺めていたサファイアが手紙を見
つけ、ヒューリに手渡した。

「なになに……………」「ちよつとした偶然で色々貰ったけどオレには
使い道が無いから送るね。よろしく。スピネル」だつてさ。全部貰
い物らしいわ」

手紙を読み終わったヒューリが部屋中に置いてある品物に目をや
ると、兄弟達も視線を移した。

「貰い物ねえ……………」ジューズ365本、栄養ドリンクも365
本、それ以外も最新の物つぽいし……………」もしかしてスピネルって何
かの大会にでも出て勝ったとかじゃない？365本ってよく言う一
年分ってやつでしょう？」

エメラがかなり事実に近い事を言い、その言葉に兄弟達がそれぞ
れの予想で盛り上がり出した頃のスピネルは……………」

「ハア……………」

昼食後トレーニングルームで50キロのベンチプレス用のバーベ
ルを片手に持ち、ダンベルの如く筋トレをしている。周りの選手か
らは呆れた様な視線を送られているのだが、本人は何故かため息ば
かり吐いているのである。

「相変わらずすごい力だね、170階層勝ち抜けおめでとう！
って言おうと思ってたけど……………」そんな感じでもなさそうだね。何
かあったのかい？」

トレーニングルームに入って来たコーフルはスピネルに話しかけた。

「……………いえ」

側に来てベンチプレスに腰を掛けたコーフルに一瞬何か言いかけたのだが、結局言葉を閉じた。

「……………何か悩み事かい？私で良ければ話を聞くくらいなら出来ると思うよ？」

スピネルの態度に何かを感じ取ったのか、コーフルは柔らかい笑顔を浮かべる。

「……………ふう……………この闘技場で200階を必死に目指してる人が聞いたら怒るかもしれませんよ？」

スピネルが話す気になったのを受け、二人は奥の自動販売機が置いてある休憩場所に移動した。

「で、何を悩んでいたんだい？」

「……………実はオレがこの天空闘技場に来た目的って簡単に言うとお金を稼ぐのと自分を鍛える為なんです。普通の選手は200階に行って自分で流派を起こしたり名声を得るのが目的みたいですけど、オレ自身は200階とか全く興味が無いんですよね」

「なるほど、ようは自分を鍛える為って事だよね？全く問題無いと思うけど……………それじゃ、私の事も少しはなそうか。私の実

家はある拳法の本家でね、私はその家の長男……いわゆる跡取りなんだよ。私も別に200階に行きたいと思った事は無いよ？父親から看板を継ぐ時に多少の自信は持ちたいと思ってここに来たからね。この闘技場に来る目的は様々だけど、自分を鍛えるって人も沢山居るからね」

コーフルが自分の事を交え話す言葉に気が楽になってきたのか、スピネルの表情も少し明るくなっている。

「そつか……コーフルさんもそうなんだ……」

「ええ、そうですよ。ところで、スピネル君の悩み事はその事だったのかい？」

「ああ……いえ、違いますよ。さつきコーフルさんが言ったけど、朝の試合でオレ勝ったから明日は180階層での試合でしょ？1つ目の目的だった天空闘技場での大金稼ぎと自分を鍛える事は持続中だけど、次の目的に向かうには今の力じゃ全然届かないって感じなんですよ。でもこのまま行けば200階層まで時期に上がってしまいそうだし……200階じゃファイトマネー出ないから気乗りしないけど（正直なところ、まだ念の戦いはしたく無いんだよね）。発も作れてないし……今は体を鍛えるのと、戦闘経験を積んで基本的な強さを鍛える事に集中したいんだよね）だけど、手を抜いて戦っても自分を鍛える事もできないし……」

目を瞑り考える素振りを見せたコーフルだが、すぐにスピネルに視線を向け口を開く。

「ふむふむ、なるほどね……お金も必要だし、まだまだ強さに納得がいかないかぁー……しかしスピネル君の年齢から考えて今

のキミの戦闘力って大概とんでもないレベルだと思っただけだね。まあ、次の目的ってのが何かは聞かないけど相当な事みたいだね……そうだね……1つ思いついた方法があるよ。普通の選手にはお勧め出来ないけど、スピネル君なら大丈夫かな」

「方法って……200階に行かなくて済む方法って事？」

「ハハ、違うよ。スピネル君の手足に重りを付けて戦っただ、いわゆるパワーリフトやパワーアングルってやつだね」

「それはダメだよコーフルさん……その事はオレも考えなかつたわけじゃないけどさ。あんな目立つ物付けて闘技場に登ったら審判にすぐバレるし、鉄が入ってるから防具や武器とみなされるよ」

内心コーフルの案にかなり期待を抱いていたスピネルは、ガツクリと肩を落としながら言う。

「いやいや、普通に市販されている器具を使うと絶対見つかるって事は当然解ってるよ。実は以前100クラスの選手でそれを実行した人が居てね、実力はそれほど無かった様で重りを付け試合に出て大怪我をしたんだ」

「ありゃー、それでその人はどうなりました？」

「怪我が酷かったらしくて、数日後には闘技場からいなくなつたそうだよ。私が普通なら進めない理由はそれなんだよ。闘技場での試合はリアルファイトだからね、当然勝つ為に本気で攻撃するだろ？ 殆どどの試合は5ポイントも取られれば気絶ないし、マトモに試合できないくらいダメージを受けてるからね。そんな試合で重りを付けて戦うなんて自殺行為だよ、普通ならね。ただ、スピネル君

は力も桁違いだけど、頑丈さも折り紙突きだ。この闘技場1000以上の選手で負けの9割が10ポイント負けつてのはキミくらいだ。サライダも言つてたけど、一体どんな鍛え方したのか教えて欲しいよ」

「ハハハ……（ただの纏^{マシ}だけど……言うのまズいしな……）た、体質かな、アハハハ……と、ところで何でその人は審判に見つからなかったんです？」

「フツ、まあ、いいんだけどね。見つからなかった理由はね、そのパワーリストが特殊な物だったからなんだよ。スピネル君はミサングアッて知っているかい？」

「えーと、サライダさんが太ももに巻いてる糸みたいなのやっ？」

「あれはキック系格闘技の選手がよく着けてるパークラチアツトつて言うんだけど、まあ似たような物だね。あれとソックリに作られたパワーリストやパワーアングルを売ってる店があるんだよ。体を鍛えてる事を人に知られたくない一般の人なんかによく売れるらしいよ？普通の市販品なら1セット2千〜5千ジェニーで十分買えるけど、それは特殊な鋼線と繊維で編みこんであるらしく1セット8万ジェニーくらいするって話なんだ」

「へえーそんな物があるんだ？確かにそれなら試合中に着けてても違和感ないかも……コーフルさん、それって何処で売ってます？買いにいききたいんだけど」

「ああ、ここから買いに行けるような場所じゃないみたいだけど、パソコンでも販売してるみたいだから調べてみるといいよ」

「…………… 電腦ネットかあ、コンピューターを先に買う必要があるかあー」

顎に手をやりそう呟いたスピネルの言葉を聞き、コーフルが驚いた顔をしている。

「ええっ！スピネル君コンピューター持って無かったのかい？随分稼いでるから当然持つてると思ってたよ……………」

「い、いやあ、特に必要になる事がなかったから…………… そんなに驚かれるとは思わなかったな。ハハハ…………… でもそのパワーリスト是非欲しいし、今から買いに行つてこよう！ありがとうコーフルさんっ！何かイメージが湧いてきたよっ！」

嬉しそうにコーフルへ頭を下げたスピネルは急いで椅子から立ち上がり、出口のドアに向かい走り出した。

「おおっ！どうしたんだスピ坊？そんなに慌てて」

「あ、バレイさん。オレタ飯遅くなるかもしれないからねー」

バレイに手を振りながらも、止まることなく廊下を走り抜けて行く。

「何をあんなに急いどるんだスピ坊は」

不思議そうに後姿を見送つたバレイは先ほどまでスピネルが座つていた椅子に腰を降ろした。

「ええ、実は……………」

コーフルは先ほどのスピネルとのやり取りを簡単に説明したのだ。

「……………なるほどな。スピ坊が何を目的にしているかわシも知らんが、強くなる為ってのは見えていても確かに解る。本来のスピ坊の戦闘スタイルは持ち前のスピードとあのパワーを生かした超攻撃型の方が合つとるだろうからな」

「ええ、私もそう思います。あの小さく軽い体での防御主体の戦いは正直キツイと思いますからね。実際は彼の人並み外れた力が有るからガードしても崩されずにすんでいますが能力だけで考えると防御型のスタイルが有効とは思えません」

バリーの意見に同意し、真面目な顔でコーフルも頷く。

「まあ、本人もそんな事は百も承知している、ワザワザ自分の苦手な所を徹底して鍛えているんだろう。スピ坊が自分の能力を最大限使って戦っていればとくに200階に行ってるだろうしな」

「ええ、その通りですね。しかし9才であれですか……………何を目的にしているか知りませんが先が怖いような、楽しみなような……………複雑な気分ですよ」

「ああ、確かにな」

二人は先ほどスピネルが走り去った出口に目をやった。

・
・
・

「毎度有難うございましたあつ！またのお越しをおねがいします
うっ！」

闘技場を出て走り続けること30分後にスピネルは、以前家にする為のコンピューターを買いに来た店で携帯用の小型コンピューターと電脳ネットアクセス用のナンバーコードを買い満足気で店を出たところである。

「よしっ、全部買ったし早く帰って接続しなくちゃ」

先ほどまでの悩みがウソのそうにスピネルは上機嫌で闘技場への足を進めている。

「あつ、そこのボク古物市に寄ってかないかい？」

闘技場への帰り道で丁度飛行船降り場の前にある大きな広場の横を通っていると、手に沢山のチラシを持ち配っている人にチラシを手渡された。

「へえ、古物市かあ、なにに、毎月第一、第三土曜日に天空広場で開催か……そろそろ4ヶ月近くになるのに全然知らなかった」

「そうだよ月二回やってるからねっ！是非見て行ってよ。広場の中に500ブースも店が出てるし、ボクのお小遣いでも買える物も沢山あるからねっ！」

チラシを配っていた人の耳にスピネルの呟きが聞えた様で、振り返りながら笑顔で教えてくれていた。

「まだ二時半か……時間に余裕もあるし、少し見ていこうかな」

機嫌が良かったからか、スピネルは軽い足取りで広場に入ってしまった。

「へえ、結構大きな規模でやってんだなあ」

広場に入ると多くの出店が並び、狭い通路に沢山の人があしめいている。

「……何かすごい光景だ……台所のガラクタばかり置いてる店の横にはアクセサリーやアンティーク金貨なんかを置いてる店があるし……」

人の流れに乗りながらも色々な店を覗き、驚きつつも楽しんでいく。

「うわっ！出店で短刀や古そうな銃まで売ってるけど、いいのかわ……ん？ああっ！そういうえば確か知識（前の俺の記憶）で「念でぼろ儲け大作戦」ってのがあったよ……確か凝（キョウ）でオーラを纏（キョウ）つてる商品を探すのが……あの方法が有効なら十分儲かるよな……試してみるか」

一度入り口に戻ったスピネルは凝（キョウ）を行うと、急ぎ足で各店に並んでいる商品を流し見しながら進んでいった。

「一応全部見たと思うけど、結局3つしか見つからなかったな」

スピネルが急ぎ足で全ての店を見て回るのに二時間近くかかり、手に3個の箱を持ち入り口に戻ってきた。

「時間は……五時前か。街の案内所でアンティークショップの場所聞いて、取り敢えず鑑定してもらうかなあ？正直ちょっと楽しみだ、早く行こうつと」

広場から案内所に行き、一番近くの店を教えてもらったスピネルは走り店に入ったのだ。

「ねえ、ボクこれは家から持ってきたのかい？」

店のカウンターには十センチくらいの鉄製と思われるフォトスタンドと、高さ三十センチほどで綺麗に色が付いてるペガサスの置物、その横には高さ二十センチほどのガラスの蝋燭立てが並んでいる。

「あ、うん、そうだよ。それでオジサン、どんな感じ？売れる？」

かなり期待をしているのか、年相応にキラキラした目で年配の店員の顔を見ている。

「そうだねえー、この銅のフォトスタンドには価値が無いね。あと、陶器のオーメント（置物）。こっちは結構細かく作りこまれているね、これなら15万ジェニーでなら買い取れるよ。こっちのガラスのキャンドルライトは悪いけど買い取れないね、形も良くない

し売り物にはならないから。まあ、私の専門は絵画だから確実な事は言えないけど、フォトフレームとキャンドルライトは何処に行っても無理だと思うよ？どうする？売るかい？」

「ええ？マジで（全部ちゃんとオーラを纏ってたのに……………）……………その置物以外は全く価値無し？ほんとに？」

店員の言葉が信じられないのか、信じたくないのか、スピネルはショックを受けた後不信感もあらわに聞き返す。

「まあ、気持ちは解るんだけどね……………だいたい鑑定に持つてくる人つてのは、持ってきた物にすごい期待してるからね。納得いかないなら売らない方が良いと思うよ？後で後悔する事にもなりかねないしね」

結局納得いかずにスピネルは売る事を諦め、スゴスゴと店を後にした。

「ハア、何か精神的にも肉体的にも疲れたあ……………（何か納得がいかないと言うか……………騙されてるかもしれないって疑心暗鬼になつてたんだろうな……………）」

肩を落とし部屋に戻ったスピネルは何時もより遅くなった夕飯を取り、少し長めのお風呂から出て大きくため息を付いている。

「確か写真立てが千、置物が八千、蠟燭立てが八百ジエニーか。置物が15万で売れても十分な利益だし、そのくらいの金額なら目くじら立てるつもりはないけど……………（でも良く考えたら作品にオーラを込めるだけの才能が有る人が作つたんだろうけど、才能有り≡売れる作家とは限らないよなあ〜）それに凝^{キョウ}だけで大儲けできる

なら念能力者全員やってるか……あゝああ、いきなり4つ目の目的達成かと思つたのに……仕方ないか、カンニングペーパー持つてる訳じゃないしな。うああゝ」

椅子の背もたれに体を預け、背伸びしながら両手を後ろに伸ばす。

「ああゝつ、ああつ！ち、ちょっと待て……作ればいいんじゃないのか？い、いや、まずは確認しないと……も、もし少しかやってなかったら作る意味ないし……」

伸びの途中で何か気付いたのか、慌てて飛び起きると今日買ってきたコンピュターを急いでつなぎ出した。

それから三十分近く悪戦苦闘しコンピュターを設置したスピネルは、即座に電脳ネットへと接続し何かを調べ始めたのだ。

「……めちゃくちや沢山あるじゃないか……この大陸とヨルピアン大陸だけでも一年間で300日以上開催してる。こ、これなら作る価値あるかもしれない……やってみるか……最悪失敗しても被害が少ない様に考えて……」

時間は深夜12時を過ぎており、いつもならベットに入っている時間になってもスピネルはテーブルの上で紙に何かを書き続けた。

・
・
・

「で、出来た？幻じゃなく？完成？完成か……で、できたあー」

っ！」

スピネルが古物市に行った日から実に12日後、朝起き出した途端にフロアー全体に響き渡るのではと思うほどの大声で喜びを表現している。

「ハアハアハア、喉痛くなってきた……………ま、まずはベンスナイフを見てみるかって……………埋まつてるよ……………」

声が少しかすれ気味になりながらスピエルがベンスナイフや古物市で買った物を置いている部屋の隅に目をやると、部屋全体が何かを落書きした大量の紙に埋め尽くされていた。

「クツ、先にこれ片付けないとダメだな……………」

普段ならこの時間は朝の訓練（念の四五行）をしているのだが、この12日間試合と食事、睡眠以外の時間は全て紙に何かをひたすら描き続けていた為膨大な量の紙を片付けるのに30分以上の時間を要した。

「ふう、やっと床が見えてきた。きちんとした掃除は後にして……………さ、先に試さない」と

ある程度紙を片付けやっと目に入った箱を空け、葉っぱの葉脈の様な形で長さ15センチほどのナイフを取り出したスピネルは緊張のあまり喉を大きくならしながら顔の前に持ってくる。

「い、いくぞっ！……………イージーマニュアルっ！（俺だけの簡単取扱い説明書）……………や、やった……………出来てる……………間違いなく完成だあっ！」

スピネルはナイフを持ったまま両手を掲げ、もう一度力一杯に叫んだ。

「ハアハアハア……ヤバい喉壊しそう……取り敢えず落ち着こう……ふうふう、よし落ち着いたぞ。おっ！そう言えば、まだ内容確認してなかったな……製作者ベンニーって知ってるよ、制作が109年前か、シリアルナンバーが211だもんな。俗に言う後期型ってやつね。性能は……ほうほう、柄の後ろに仕込んだ薬液が刃先から出るって、要は毒ナイフかぁ？で今の相場が青色表示で900万ジェニーか。バツチリ成功だな」

スピネルがこの12日間必死でやっていたのは、初めて挑戦となる発ハツの開発だったのである。その能力は……

能力名 イージーマニユアル（俺だけの簡単取扱い説明書）

系統 具現化系

能力 視界に入った物（生物は例外）の名前、製作者（制作会社）制作年度、物の簡単な能力や用途、その物の現在の相場価格を表示する。ただし、金額は色分けされ表示される。 黒〓100億以上 金〓10億〜100億 銀〓1億〜10億 赤〓1千万〜1億 青〓1百万〜1千万 緑〓10万〜1百万 黄色10万以下

特徴1 発動時のみオーラを使用し、一度発動させると消すまで使用可能。

特徴2 スピネルの網膜にのみ写る為、他人には全く見えない（オーラの使用量を少しでも少なくする為、紙を具現化せずに見え

るだけにしたのだ)

「何とか無事に完成したな……この二週間キツかったからなあ
ー。ああっ！今日の試合時間早かったんだあっ！は、早くご飯食べ
ないと」

慌てて着替えたスピネルは玄関を飛び出して行った。

二章少年期 12話 オークション×オークシン・シティ（前書き）

いつも以上に時間が掛かってしまった…… 宜しく願います…

……

二章少年期 12話 オークション×オークション・シティ

「おう、スピ坊！やっと150階にまで戻れた様だな」

古物市に行つてから1月ほど経つた日の昼、朝の140階層の試合に勝ち昼食を食べに食堂へやってきたスピネルに先に来ていたバリーが声を掛けた。

「ハハ、ありがとうバリーさん。たかが20キロ、されど20キロって感じかな。どうしても動き出しが遅くなっちゃうんだよね」

「そりゃ、当たり前だ。刹那の一瞬で動かないといけないタイミングでの20キロなど、どう考えたって致命的だな」

コンピューターを買って帰った日、発^{ハッ}の事で遅くまで色々悩んでいたスピネルだったが、当初の目的を忘れたわけでは無かったのだ。その日の深夜に電脳ネットで注文したミサガ型のパワーリストとパワーアングルは2日後には無事スピネルの手元に届いていたのだ。

「ハハ………確かに簡単に考え過ぎてたかな………1つ5キロを両手、両足に着けて20キロ。このくらい何でも無さそうって思ったけど、結局は100階まで落ちちゃったしね。でも思ったより、良い訓練にはなってるよ」

「そりゃ、そうでしょう。この闘技場では、普通絶対にしませんからねえー」

二人が座るテーブルに後ろからやってきたコーフルが、話しに入

りながら席に着く。

「それは言いすぎだよ、コーフルさん。その様子だと、勝ち上がり？」

席に着いたコーフルに、苦笑いを浮かべながらスピネルは非難を口にする。

「ええ、何とか勝てましたよ。ところでスピネル君、明日から二週間くらい休暇を申請したとか？」

「あ、うん、そうなんです。ちょっと用事でヨークシン・シティにね」

「ヨークシン……あつ！世界最大のオークションですねっ！そう言えばここ最近、古物市に隔週行ってるようですよ」

その話を聞き少し考えそこに行き着いたコーフルに、スピネルは笑顔で頷く。

「へへ、その通り。ちゃんと、三人分のお土産も買って帰って来ますよ」

三人は和気あいあいと昼食を取り、それぞれ自分の部屋に戻って行った。

「あつ！荷物の整理を先にしとくか」

部屋の前まで戻ってきたスピネルだが、何かを思いついたのかノブを握った手を止めるとバリエとは反対側の隣のドアの前に立ち、

おもむろにカードキーを取り出しカギを開け部屋へ足を踏み入れた。

「ヨークシンから帰ってきたら荷物増えそうだし、一旦整理しとかないとなあー」

今スピネルが居るのは普段生活する部屋として借りてる部屋の隣である。あの発はつを開発した日に古物市で買った三点を調べた結果、アンティークショップの店員が言った通りペガサスの置物以外は本当にガラクタであった。そしてそれ以降古物市は今日まで2回開催されており、二回共朝から市に訪れたスピネルは自身が開発した念能力を駆使し15点も掘り出し物の骨董品を見つけ出し買い取ったのだ。だが、その品々は生活する部屋には置き切れず、たまたま空いていた隣の部屋を借りて倉庫代わりに使っているのである。

「ふう……………荷物整理も完了だな。部屋に戻って明日の用意もしない」と

カギを掛けた事を確認し隣の生活用の部屋に戻ったスピネルは、夕食までに色々トリユックの荷造りを始めた。

・
・
・

「ああ、ふう、やっと着いたあ。今回は一人部屋だったから寛げたださ」

荷物整理を終えた翌日の朝、飛行船に乗り込んだスピネルは5日後の昼を少し過ぎた頃に無事ヨークシン・シティに到着した。

「……………先に荷物を置いてから見て廻るか」

スピネルは飛行船乗り場で携帯電話の地図機能を使い、前もって予約してある繁華街のホテルに向かい足を進める。

「いらっしやいませ。ご予約のお客様でしょうか？」

「はい、スピネルⅡストーンです」

コンピューターで予約をした時に、プリントアウトした予約票をホテルの受付に手渡す。

「えー、はい。確認できました。スピネルⅡストーン様。本日8月31日から9月10日迄のご利用で間違いございませんか？」

「ええ、そうです」

「それでは、こちらが部屋のカードキーになります。12階の8号室です。あと、今年のオークション案内をお渡ししますね。各オークション会場の位置や簡単な説明も載っておりますので」

「ああ、どうも」

受け取ったカードキーとオークション案内を手に持ち、エレベーターに乗り込む。

「ムムム、値札競売市と業者市って結構遠いな……………まあ、業者市は参加用の鑑札持ってないから入れないけど……………」

スピネルは手元の1995年ヨークシン・シティ、ドリームオー

クシヨン案内と書かれた冊子を見ながら部屋に入った。

・ ・ ・

「値札競売市は朝9時からか……ホテルからこの広場までなら歩いて20分くらいか」

スピネルはホテルに着替えが入ったりリュックを置き、下見を兼ねて値札競売市の広場へやって来たのである。

「しかし、スゴイ数だな……明日は客も来るからさらに混雑しそうだ」

スピネルが広場に目をやると、広場中で屋台を組み立てていたり、箱を運び込んでいる人が大勢忙しそうに走り回っている。

「大まかに位置は把握したし……メシにしよ、メシにつ！ワザワザ本まで用意してきたんだしなっ！」

スキップしそなくらい軽やかに町へ走り行くスピネルの手には、ヨークシン・グルメガイドと大きく書かれ付箋が沢山貼られた本が握りしめられている。

「ふう〜、お腹一杯に朝飯も食べた事だし……さあ、気合入れて行くか」

翌日の朝はいつもの様に軽く訓練し、ホテルの朝食バイキングでお腹を膨らせた。

「ここに泊まってる人も、ほとんどがオークションを見に来たんだろうなあー」

席を立ち周りをグルッと見渡してみると、かなり広いレストランなのだが席は全て埋まっており背広を着た人や家族ずれなど様々な人で溢れている。

食事を終えて着替えを済ませたスピネルは、少し時間は早かったがさつそく値札競売市に向かった。

「おおっ！もう始まってる？な、何か、めちやくちゃテンション上がって来たあっ！」

広場には値札競売市開始の20分前に到着したのだが広場は人で溢れかえり、至るところから大声での呼び込みや交渉の声が聞こえさながら祭りの様に盛り上がっている。

周りの熱気に当てられたのか、早く行かなければ良い物は買われてしまうといった競売独特の雰囲気にはスピネルもウキウキしつつ急いで広場に入って行った。

「おおっ！さつそく緑色発見っ！って、ええ？テーブルクロス？……約100年前のヨルビアンクロスシュレースって、ただのテーブルクロスが85万ジェニー？……相変わらずアンティークってよく解らんよな。まあ、いいや。おじさんっ！そのテーブルクロス売ってよおおっ！」

両サイドに店が軒を連ねており、その真ん中を通路として大勢の客が左右に目を向けながら流れに乗って歩いている。その人ごみを必死で掻き分け、スピネルは年配の男がシートの上に家から持ってきたであろう小物を並べてる店の前に辿り着く。

「んん？これか？欲しけりゃその値札に値段を書き入れな。昼の12時までには誰も書かなきゃボウズに売ってやるよ」

品物に糸で結びつけてある紙をオヤジは指差す。

値札競売市とは品物に白紙の値札が着いており、その値札にその商品を買いたいと思っただ客が好きな金額を書き入れる。そして決められた時間に一番高い金額を書いた人が購入できるので。オークション・シティのドリームオークションは世界最大のオークションと言われるが、この町で10日間行われるのは値札競売市のような庶民的な物から世界一格式の高いと言われるサザンピースオークション、盗品のみを扱う地下オークション等様々な物が開催される。

「ええ〜こんなに大勢人が居たら絶対戻って来れないってえー、せっかく来たんだし売ってよオジサン〜」

スピネルは年相応の子供の口調でシートに座ってるオヤジにせがんでみる。

「んん〜、確かに初日だし、こんだけ人が居たら戻るのも一苦勞だな。仕方ないか、ボウズ1000ジエニーで売ってやるよ」

「マジでっ！！サンキューおじさんっ！！」

店のオヤジから受け取ったテーブルクロスを丁寧にたたみ、持参した紙袋に入れリュックに仕舞い込む。

その後も店を見て回り午前中はテーブルクロスを入れて5点、昼からは3点の品物を手に入れた。

「ふう……初日には上出来ってところかなー。まだ四時過ぎだけどいつかぁー」

買い集めた荷物をホテルに置くと、昨日と同じ様にグルメガイドを片手に足取り軽く町明かりに消えて行った。

・
・
・

「うえっ赤色っ！あんなボロっちい木刀があ？」

ヨークシン・シティのオークションが始まり4日目の昼過ぎ、ここ数日でも色々と驚く様な珍品や理解出来ない金額のアンティークの品々を幾つかは見てきたスピネルだったが、今日にしてる物はその中で最たる物である。

「……………に、2千5百万ジェニーってマジか？……………ま、まず内容確認してみよ……………鋼刀木の木刀、約150年前にジャポンの刀鍛冶センベイにより作成。念能力者が持つだけで自動的に周が発現する……………自動って……………ま、全く意味が解らない……………と、取り合えず買ってみよ」

「おっちゃん、その汚い木刀いくら？」

スピネルは屋台の棚に並べられた商品の端に立掛けられている、黒く煤けた木刀を指差した。

「うん？ あー、これかい？ そうだなあー、どうせ誰も買わないし、ボウヤに買ってもらうかな。これなら500ジェニーでどうだい？」

「オーケー、それで買うよ」

店の人は適当な紙袋に入れてスピネルに差し出す。

「さてさて、確認したいけど、ここではマズいかな」

値札競売市から一度抜け出したスピネルは、人気が無い場所まで移動した。

「ここなら大丈夫だな。んじゃ、試してみるか」

紙袋から汚れて黒く変色した木刀を取り出し一応両手に持ち構えてみる。

「おおっ！ マジで周が勝手に出来てるっ！ すっげえな、この木刀っ！」

スピネルは驚い顔で握った木刀に目をやっているが、それも当然と言えた。本来周とは念の応用技であり、自分の肉体以外の物をオラで纏う事によりその物の能力を格段に強くする念の技術である。スピネル自身は小さい頃から訓練をしている為当然会得しているが、意図せずに行う事は普通では不可能なのだ。

「特に意識せずに出来てるし、特別にオーラを消費してる訳でもない……………何でこんな事が出来るんだ？……………ん？」

スピネルが木刀を片手に持ち替え不思議そうに眺めていると、柄の所に巻いてある滑り止めの変色した布が古くなり外れかけているのが目に入った。

「……………汚なっ！売るにしろ、使うにしろ見た目的にもアレだし新品に巻き直すべきだろうっ！」

本来は白色で有ったであろう黄ばんだ布をスピネルは汚そうに指先で剥がし始める。

「……………お、おおーっ！な、なるほどねえ、神字の事は予想がつかなかったわー」

変色した布を剥がしていくと、木刀の柄の部分になにやら記号のような物がビツシリと刻まれていたのである。

神字とは、念を補助する役割を持つ模様のこと。この模様を長時間かけて念を込めながら描いたり、彫ったりすることで、物体や特定の範囲に様々な効果を持たせることができる。

「……………始めて見たけど、何書いてあるかサツパリ解らないや。でも、自動で周^{シユウ}が出来る原因はハッキリしたな。珍しい物だろうし大事に持っとこ」

疑問が無事に解消し、スッキリしたのか上機嫌で値札競売市にスピネルは戻って行った。

「今日も良い感じで色々見つかったな」

オークション開始7日目の夕方、その日も何点か掘り出し物を買う事ができたのか鼻歌を口ずさみながら広場の出口に向かっている。

「その少年。ちょっと、いいか？」

広場を出た処で、黒の短髪に背が高い20代後半くらいと思われ
る切れ長の目をした男の人がスピネルの前に現れた。

「ううん？オレ？」

いきなり話し掛けられたスピネルは驚いた為、警戒する事も無く
聞き返していた。

「ああ、急に話し掛けて悪いな少年。実はちょっと話しが聞きた
いんだが、少しだけ付き合ってもらえないか？あ、ああっ！悪い、
悪い、いきなりそんな事言われりゃー警戒するよな。俺はこうい
うモンだ」

話しの途中でかなり怪しんだ視線をスピネルが男に向けると、男
は慌ててズボンから出した手帳から名刺を差し出した。

「……………へえ、情報屋かあ。で、その情報屋のパウロさんがオ
レに一体何の用？」

受け取った名詞を一瞥し、顔を上げスピネルはパウロへ向き直った。

「ハハ、そう構えないでくれよ？この写真の銃について聞きたいだけなんだ。見覚えあるだろ？」

未だに疑いの目を止めないスピネルに苦笑いでパウロはポケットから取り出した一枚の写真を見せる。

「ああ、知ってるけど？」

出された写真に写っているのは二日前に値札競売市で買ったばかりの、かなり昔に作られたと思われる真ん中から折れ曲がってる銃であった。

「実はさる大金持ちからの依頼で、古式銃の情報集めを請け負っている。当然今回のオークションでも数点出品されて業者市や地下オークションでのぶんは確認済みなんだが、馴染みの古美術商が値札競売市でそれらしき物を見たって連絡が入った。それでようやく店を見つけ、本物かどうかの確認に鑑定人を連れてきてみりゃ売れちまっただけ。今度は誰が買ったか情報を集め、やっとこさ少年にたどり着いたって訳さ」

オーバーに両手を挙げて、パウロは演技じみた説明をしている。

「ハハ、そりゃご苦労様。で、オレに何をして欲しいの？」

「別に何かをしてもらい訳じゃない。俺は情報屋だから、ただその銃についての話を聞かせて欲しいだけさ。売り買いの話は俺

の仕事じゃないしな。話しを聞かせてくれるなら、情報料はちゃんと払うぜ?」

パウロの顔を見てスピネルは少し考え込んでいる。

「……………(情報屋か……………少し怪しい気もするけど……………まあ、今のオレなら逃げるくらいは出来るだろう。今断って今後もしつこく付き纏われてもかなわないしな……………)話しただけなら別にいいけど?何処で話すの?」

「そうだなあー、おっ、あそこの喫茶店でいいよな」

パウロの返事に頷いたスピネルは、目の前にある喫茶店に入って行った。

「さあ、好きな物頼んでくれ。ここは俺持ちだ。それじゃ、もう一度自己紹介するか。俺は情報屋のパウロ。犯罪に関わる事や、企業スパイ的な事以外は何でも取り扱う情報屋さ。少年の名前は何て言うんだ?何時までも少年って呼ぶのもアレだしな」

「名前はスピネル。年は9歳」

淡泊に答えるスピネルに、再びパウロは苦笑いを浮かべている。

「ハハ、もう少しフレンドリーにしてくれると有り難いんだがなあ、まあ、いいや。スピネル君か、ところで親御さんは何処にいるの?ホテルで待ってるのか?お前さんの持つてる銃が本物なら、俺の依頼主は親御さんの元に交渉に向かう事になるだろうしな」

「んん?親?オレは孤児だから居ないよ」

「え？……そ、そうか………すまん。何か悪い事聞いてしまったな………」

パウロは先ほどまでとは違い、少し申し訳無さそうに頭を掻いている。

「………（………見かけと違い、案外悪い人でもないかも………）いや、生まれた時には孤児院だったし。今更気にもしないよ」

「そ、そうか。で、保護者代わりの人は？その人と来てるんだろ？」

「………いや、保護者も特にいないから………（まあ、オレの年なら普通は誰か大人と一緒にだとは思っような………）ヨークシン・シテイには一人で来たんだよ」

スピネルの言葉にパウロは戸惑った様子で、少しの間固まっていた。

「………ひ、一人って、たった一人でか？………か、金は？泊るところは一体どうしてるんだ？」

「金は自分で稼いでるし、ちゃんとホテルに泊ってるよ。言っとくけど、犯罪行為じゃないからね。オレは天空闘技場で闘士をやってるんだ」

「で、天空？と、闘士？」

スピネルの話しに理解が追いつかないのか、パウロは素っ頓狂な

声で単語を繰り返している。

「ちょ、ちょっと待ってくれっ！」

パウロはテーブルに置いてあるグラスを手にとると水を一気に飲み干した。

「……………ふう……………よ、ようするにお前さんはその年で既に自立してるって事か……………しかし、驚いたぜ……………その小さいなりに、よりにもよって天空闘技場とはな……………」

頬を引き攣らせ、額に浮かんだ汗を拭きながらパウロは啞然とした顔でそう呟いた。

「へえー、闘技場の事知ってるんだあ」

「ああ、何度か調べた事があるんだ。金持ちが新しい護衛を雇う時の身辺調査の依頼でな、その経歴の中に天空闘技場つてのがチョコチョコあったんだよ……………しかし……………やっと違和感の理由が解ったぜ……………」

「違和感？オレの？」

「いや、お前さんって訳じゃないけどな。お前さんと話しててずーっと何か引つかかってたんだ。9歳にしてはシツカリしてるけど何かシツクリこないってな。ようやくそれが解ったんだよ」

「ふーん、で、何が解ったの？」

「ふん、それだよ、その態度だ。普通9才の子供なら知らない男

が話しかけた時点で怯えるか、親を探すもんだ。お前さんは警戒はしていたが、不安そうな素振りも見せず俺についてきた。普通の子供と明らかに違う、お前さんがあまりに普通に話すから気付かなかったんだよ、その違和感に。その根底にはその年で自立しているって事と、多少の荒事ならどうにか出来るって自信が有ったからなんだろうな……………まあ、その年であるの「野蛮人の聖地」で闘士をやってたんだ。そりゃ、普通じゃないわなあ」

「何か酷い言われ様な気がするけど……………まあ、逃げるくらいは出来るつもりだったけどね」

呆れながらも何処か感心しているパウロに対し、ジト目でスピネルは睨んでいる。

「ハハ……………別に悪く言ってるつもりはねえーよ。素直に感心してんだよ。話が随分それちまったから戻させてもらうけど、お前さんはあの銃の事ある程度解って買ったんだよな？」

「ん？ある程度って、あれが古式銃で値打ち物って事？そりゃ当然知ってるよ。今は闘士してるけど、将来は骨董で食べて行くつもりで掘り出し物探してるんだしね」

スピネルの言葉に納得がいたつのか、パウロは深く頷いた。

「そうか、んじゃ、話しは十分聞いた。たぶん、数日後にもう一度会ってもらう事になるかもしれんがその時は宜しく頼むぜ」

「それは買取の交渉って事？」

「ああ、たぶん依頼人の代理の古美術商と一緒に来る事になると

思うがな」

「ふうくん……まあ、適正価格でなら売ってもいいけど、オレが子供って解つたら力づくって有りえるんじゃない？」

多少は警戒した方が良くかとも思いつつ、スピネルは目を細めてパウロに視線を向ける。

「ハハ、そりゃ警戒するのは当然だな。まあ、今回の依頼人についてはその心配は無用だ。ある国の大地主で、生まれた時から大金持ちだ。争い事なんて全く無縁な人達さ、何せ必要な事が有つたら全て金で解決できるだけの財力があるからな」

半分呆れたように手を挙げながら、心配無用と言い切ってきた。

「ふーん、それなら良いけどね。一応言っとくけど、オレは11日にはここを発つからね。もし交渉するなら早い方がいいと思うよ。用件はそれだけだね、じゃ、ご馳走様」

「ああ、つき合わせて悪かったな。情報料の5万ジュニーだ。また明日か明後日に顔を出すよ、それじゃーな」

スピネルは返事をして店を後にした。

翌日も朝から夕方まで値札競売市で掘り出し物を探し、夕飯はガイドブックに載ってる店を巡っていた。

「よおっ！今日の探し物は終わったのかい？スピネル」ストン君」

その翌日、オークション開催9日目の夕方広場から出た処でスピネルはまたもやパウロに声を掛けられた。

「あ、ども。今終わった処だけど……もうオレの事調べたんだ」

急に声を掛けられ少し驚いたスピネルだったが、直ぐに返事を返す。

「まあな。一応仕事として、お前さんの事も報告しなきゃいけないかったしな。しっかし驚いたぜ……天空闘技場の闘士ってのはたぶん本当の事だろうとは思ってたが、150〜180階層の常連闘士、完璧にトップクラスじゃねえーかよ……確か逃げる事ぐらいなら出来るとか言ってたよな？その辺のチンピラなんざ20人いたって歯が立たないだろうに、よく言ってくれたもんだぜ」

前回とは反対に、腕を組んだパウロがジト目でスピネルを見下ろしている。

「ハハ、別に争う気はなかったから。いざって時は、逃げればいかって思ってただけなんだけどね」

「ま、それならそれで別にいいんだけどよ。で、これから一時間後にお前さんの泊っているホテルのロビーで交渉したいらしいけどいいかい？」

「例の代理の人が？」

「ああ、古美術商のオヤジとオレも一応同伴だ。いいか？」

「……………まあ、別にいいけど、なるべく早く終わらせて欲しいんだ。今日と明日でこのガイドブックに載ってるB級グルメ完全制覇したいから」

真面目な顔で本を目の前に突き出すスピネルに、少し疲れた顔のパウロが口を開く。

「……………B級って……………お前さんの稼ぎなら超高級レストランを梯子したって全く問題無いだろうに……………もの好きな……………」

「お金の問題じゃないんだっ！この町で美味しいって言うB級グルメを全部食べ終わってから帰りたいんだよっ！それに一言でB級って言うけど、それには……………」

パウロは何かよく解らない処で熱弁を振るい続けるスピネルに軽い眩暈を覚えつつ、何時終わるか解らない話しを中段させる。

「わ、わかった、わかった……………出来るだけ早く進める様にするからよぉ……………と、取り合えず一時間後に例の銃を持ってロビーに来てくれ。俺達もそこで待ってるからさ」

「むう、解ったよ。んじゃ、後でね」

まだ何か語り足りない様子のスピネルであったが、時間も無駄にしたりは無かった為その場を後にした。

「初めまして、私はここ、ヨークシン・シティで骨董店を営んでおりますマセルと申します。今回は依頼を受けて代理で交渉に当たらせていただきますので、よろしくお願いします」

キツカリ一時間後に1F降りたスピネルは、先にロビーに居たパウロと隣に居た品の良さそうな高齢の男性と1Fにある喫茶店に入った。

「あ、えーと、スピネルです。よろしく」

双方で簡単な挨拶の後、すぐに本題に入ってしまった。

「それでは例の銃を見せていただけませんか？」

「あ、はい。これですよね？」

スピネルは木箱の蓋を開け中身を見せてから、マセルに手渡す。

「ええ、間違いありません。では、少し確認させてもらいます」

受け取ったマセルは真剣に銃の品定めを行い、その間10分ほどパウロとスピネルは無言でただ待つしか無かった。

「ふう、ありがとうございます。こちらはお返しいたします。で、あなたはこれがどの様な物かお分かりですかね？」

スピネルの手にある木箱に目をやり、マセル老人は尋ねてきた。

「ええ、解ってますよ。中折れ式の古式銃。今はもう無くなっています。銃器制作会社のエンフィールド社が約150年前に作った

物で、シリアルアンバーも刻印されてます」

スピネルが話しを進める内にマセル老人の目は大きく見開かれ、最後には驚きの表情に変わっていく。

「……………これは驚きましたな……………まさか君のような年端も行かない少年がそこまで知っていると……………いや、本当に驚きました。あなたが言うように、確かにこれはエンフィールドの古式銃に間違いありません。では、いか程で譲ってもらおう事ができますかな？」

真剣な顔でマセル老人はスピネルの顔を伺っており、横に座っているパウロも息を呑んで見守っている。

「そうですね……………（……………そんなに驚かれてもな……………オレの場合は単にそういう念能力ってダケだし……………表示されてる金額でいいよな）……………450万ジュエニーでならお譲りしますよ」

「なっ！……………よ、450万だつてえ？」

驚いたのか、予想以上の金額だったせいなのか、パウロの声が裏返っていた。

「お、おいスピネル君よ……………い、いくら何でもそれは……………」

「ふむ、見事ですな。その金額で買い取らせてもらいましょう」

呆れた顔で止めに入ろうとしたパウロが口を開きかけたと同時に、マセル老人は大きく頷いき了承の旨を伝える。

「ええっ！いいんですかい？450万ですよお？」

「ええ、問題ありません。いや、それどころか有り難いくらいに
正当な金額ですな」

尚も慌てているパウロに、マセル老人は頷きつつ答えている。

「……………お、俺が調べた限りじゃ、普通の古式銃って精々2百万
までだったハズ……………」

「ええ、普通の古式銃ではその当りが相場ですな。ただこのエン
フィールド製の物は、別格なんですよ。一つ一つ丁寧に手作りされ、
他の古式銃とくらべ数も非常に少ないんです。これだけの美品だと
オークションでは600万まで行く可能性もありますな」

マセル老人の説明を聞き、目が点になってしまったパウロを余所
にスピネルとのやり取りは進んで行った。

「では、振込み確認できましたかな？」

「ええ、間違いなく貰いました。んじゃ、これは渡しますね」

携帯電話で振込み確認ができた為、スピネルはマセルに木箱を手
渡した。

「今後、この様な古式銃を手に入れられたら、是非私に声を掛け
てください」

マセル老人は名詞をスピネルに手渡し、握手してその場を去って
行った。

「……………す、すげえーなお前さんは……………今回は本当に良い勉強させてもらったぜ……………なあ、もし良ければ携帯電話の番号交換しないか？今後鑑定が必要になった時は是非頼みたいし、その時はちゃんと鑑定料は払うからさ。その代わりお前さんも、何か調べたい事ができたら遠慮なく言ってくれ。格安で引き受けるからな」

その後二人はお互いの番号を交換し、再開の約束をしてその場は別れた。

・
・
・

「ハア〜、楽しかったなあ〜。また来年も来たらいいなあ〜」

スピネルは飛行船のテラスで小さくなっていくヨークシン・シテイの町並みを見ながら余韻にひたっている。

9月11日の朝出発の便で天空闘技場へ向かい、出発をしたのだ。交渉が終わった翌日も値札競売市で色々と買った後、闘技場で約束した三人分のお土産も買いガイドブックに載っていたB級グルメも全て廻りきったスピネルはご機嫌で帰路に着いたのである。

一 章 少年期 13 話 新たな能力×試験準備（前書き）

……更新遅くてすみません……宜しく願います。

二章少年期 13話 新たな能力×試験準備

「おおっ！とっ！カウンター決まりましたあっ！ダ、ダウンですっ！……………どうやら戦闘不可能な様子です。これでスピネル選手3連勝ですっ。おめでとunggざいますっ！」

ヨークシン・シティから帰ってきて20日程経ち、現在のスピネルは150階に戻っている。そう、戻って来たという表現が適切であろう。何故なら、当初着けていた重りは体全体で20キロであったのだ。しかし、今スピネルの体には80キロもの重量が付加されているのだ。闘技場へ帰って来た早々、20キロの重さに慣れを感じたのか両手両足に5キロ追加し合計40キロに増量したのだ。そして一時は120階まで落ちたのだが一週間で再び170階へ到達した。その後も増量、転落、戻るを繰り返し現在は80キロにまで増えてきたのである。

「……………思ってたより重さに対する慣れが早いな……………それに、そろそろ此処で鍛えるのも限界かもしれないな」

当初から200階より上での試合を行う気が全くなかったスピネルとしては、それ以下の階層で訓練を行い190階を余裕を持って勝ち上がれるくらいの实力をつける事を天空闘技場での目標に設定していたのだ。

「……………ここに来て約7ヶ月、予定より一年も早いよなあ。でも、思ってたよりメチャクチャ早いペースで試合してるし……………むうう、二年後に受けるつもりだったけど、来年にするのもありか……………」

元々スピネルの立てた予定では、天空闘技場で最低一年半は訓練と実戦経験に時間を費やすつもりだったのだ。しかし実際に来てみると勝った時は一日で2試合する場合や、負けても一日空き次の日には試合が組まれており、わずか7ヶ月の間に既に150試合以上戦っているのである。これにはスピネルが念能力者である事が原因になっている。普通の選手なら勝ち上がった後もそれなりに怪我やダメージを受けている為、次の日に万全という訳にはいかず運営サイドも数日空けて試合を組むのが通常であった。だが、スピネルの場合纏テをおこなっている為負けてもポイント負けのみであり、殆んどダメージも受けていないのだ。運営サイドは念の事は知らないのだが、単純にスピネルが普通じゃ無いほど頑丈なのだと言え勝手に理解しその様な結果になったのである。

「来年かぁ……………本当なら戦闘用の発ハッが出来てからが良かったんだけど……………あと2ヶ月じゃなぁ……………」

何時までも選手控え室のベンチに座ってる訳にもいかず、ウンウンと考え事をしながらも部屋に帰って行った。

「……………ダメだ。全く思いつかない……………」

夕食も終わり風呂から上がったあと、テーブルに座りボーっとテレビに目を向けながらも頭は先ほどの事で一杯の様である。

「ふう、オレの系統は具現と操作……………って言っても突拍子も無く便利な物なんか考え付かないし、武器はナイフ以外持った事すら無いのに浮ぶ訳ないよなぁ」

頭を抱え大きなため息をついた後、しびしびといった表情で試合で破れた道着とソーイングセットを持ち出し繕いを始めた。

チクチクと二十分ほど無言で針と格闘し、何故か満足気な表情で縫い痕の確認を行っている。

「へへへ、完璧なこの縫目……我ながらホレボレする出来栄だな……少し気分は紛れたけど、どうするかなあー。この針みたいに馴染んだ物ほど具現にしても操作にしても、より性能が良かったはずだけど……針を操作してもチクツとするだけで攻撃力ゼロだしなあー」

道着を綺麗にたたみ手にした針を眺めながら、またもや大きなため息がこぼれている。

「仮に具現化したとして、何か特殊な能力つけたらどうだろう……刺されると絶対に死ぬ……いやいや、ムチャな制約つけたって無理だろ……あと思い浮かぶ物は、刺されると麻痺、刺されると毒、刺されると眠る……トホホ、これじゃ普通に薬塗った針刺せば済む話だよな……ウガァーっ！どう考えても無理っ！」

髪の毛を掻きながら、スピネルはテーブルに突っ伏してしまっただ。

「ハハ、いくら考えたってたかが針一本じゃ無理があるよな。はああ……」

椅子の背もたれに身を預け、諦めたようにテレビに目をむける。テレビでは何処かの幼稚園で大勢の子供達の日常を取材している様子が映っていた。

「……すっごい数だなあ、何か館に集るアリみたい……保母

さんも一度にあれだけの子供達に殺到されるとどうにもならないよなあー」

数分間その様子を見ていたがすぐに飽きてきたのか、リモコンを片手に持ちチャンネルをかえようと身を乗り出そうとして急にスピネルは動きを止めた。

「……………そ、そうか……………1本でダメなら増やせばいいんだ……………む、でも増やすって言っても……………いや、待てよ……………ブツブツ……………」

そのあとスピネルはノートと鉛筆を取り出すと、何やら考えてはメモを取るといった事をやり始めた。

・ ・ ・

そんな事をして二日後、夕方試合がおわってから天空闘技場の街外れにある一軒の漢方薬の店にスピネルは訪れていた。

「おっ、いらっしやいませ。お薬をお求めですか？」

年の頃50代と思われる小太りの男が、会心の笑みで揉み手をしながらカウンター越しで迎えている。

「あ、いえ。えーと……………マさんですよ？パウロさんに紹介してもらったスピネルというんですけど」

スピネルがそう言った途端にマと呼ばれた男は顔中に浮かべてい

た笑顔をスツと消し去り、鋭い目突きでカウンターから出てきた。

「ああ、聞いてるよ……………子供とは聞いていたが、まあいい。奥で話を聞こうか」

玄関のノブに掛っている看板を準備中に裏向け、奥の小部屋に案内された。

「で、どんな薬が欲しいんだ？」

板の間に小さいテーブルを挟んで座った途端にマは聞いて来た。

「あ、ええ。このナイフに入れる用の痺れ薬が欲しいんです。出来ればカスっただけでも直ぐに動けなくなるような」

そう言いながらスピネルは、箱から以前イベントで手に入れたベソズナイフを取り出しテーブルに置いた。

「ほう……………中々よく出来た仕込ナイフだな。少し待っててくれ」

ナイフを手にとると柄の部分を外したりとナイフをひとしきり確認した後一度席を立ち、数分後様々なビンが入った箱と水が入ったバケツを手を持ち戻って来た。

「少しナイフを借りるぞ」

マは再びナイフの柄を外し中を見た後、コップに水を移し計量器で粉を測ると水に入れ混ぜだした。

「……………粘度2じゃ無理か……………」

粉を混ぜた水をナイフの柄に入れて様子を見て、再び粉を混ぜてはナイフに入れるといった作業を二十分ほど繰り返しようやくマは手を止めた。

「……………フム、こんなもんだな。スピネルと言ったな、少しこのナイフを振ってみる」

「え、ええ……………フンっ！……………あれ？……………」

言われた通りにスピネルは受け取ったナイフを持ち、適当に上から下に力一杯振ってみた。するとナイフの刃先から数滴半透明の液体が飛び出したのだ。

「ふむ、粘度4でもユルいか……………」

そう言うともう一度水と粉を混ぜる作業に掛かり、そんな事を数回くりかえした。

「ふむ。まあ、こんなもんだな」

マが頷いて差し出したナイフはスピネルが何度振っても液体は飛び出す事も無く、しかし刃先に触れるとシットリと半透明な液体が微かに指を塗らした。

「問題なさそうだが、粘度は7か。後は入れる毒だが、極少量で全体を痺れさせる麻痺毒。しかも超即効的な物が……………少し高くつく方がいいのか？」

顎に手をやり何やら考えを巡らせたマは目を開くとスピネルに確

認した。

「あ、ええ。どのくらいかかります？」

「前金で20万、受け渡しで30万だ。麻痺毒ではかなり効果が高い物になるからな」

「50万ですね、わかりました。それとは別に用意してもらいたいんですが……………」

その後も30分ほどマと話しをしてスピネルは店を出たのであった。

「……………まだ構想しか練れてないけどイメージは固まった……………後は発^{ハッ}の開発が間に合うかどうかだな……………どうなるにしろ、準備だけは進めないと……………」

薬の依頼をしてから天空闘技場で夕飯をすませたスピネルは部屋に戻った後、何やら色々書かれたノートに目を通している。

「決めたからには行動するか……………まずは受付に行って休暇届けを出さなくちゃな」

ノートをテーブルに置き、スピネルは部屋を出て行った。

・
・

「あの、すみません」

「はい、ウメラク社へようこそ。何かご用ですか？」

スピネルの身長ではカウンターから首から上だけしか出ない為背伸びをして声を掛けると、受付嬢と思われる女性が何やら可愛い物を見る様な目で笑いながら答えてくれた。

「はい、6日前に電話で連絡したスピネル」ストーンなんですけど」

スピネルは天空闘技場の街で薬屋を訪れた日の三日後に飛行船で出発し、5日掛けヨルビアン大陸のウメラク社へきていたのである。

「スピネル」ストーンさんですねえ、会社見学か何かかなあ」

カウンターに備え付けられているコンピューターにスピネルの名前を打込みつつも、受付嬢はスピネルに笑顔を向ける。

「あ、ありました。スピネルさん、え、ええっ！あ、アセメイド鋼？て、天空闘技場っ！ええ？い、一体……………」

コンピューターの画面に出ている情報に軽いパニックに陥りながら、何度も画面とスピネルの顔を見比べている。

「……………えーと……………その内容で合ってますよ。これ……………」

受付嬢の様子に苦笑いを浮かべながら、スピネルはリュックの中から

らイベントの時に受け取った書類をカウンターに置いた。

「あ、で、では見せていただきます………た、確かに間違いありません………大変失礼いたしました。それでは18階に案内いたします」

驚きつつも書類の内容を確認した後、冷静さを取り戻した受付嬢はエレベーターで18階の待合室までスピネルを案内した。

「大変お待たせしました。私は開発課主任のセリオウと申します。宜しく願います」

待合室で飲み物を出され5分程待つと、白衣を着た30前後とおぼしき長身でひよろりとしたイメージを受ける男性がやってきた。

「あ、ども。スピネルです」

スピネルはセリオウに挨拶をしつつも恒例の様に差し出された名刺を受け取りつつ、自身も挨拶を返す。

「闘技場から受け取った資料は見ていましたが………いや、想像していたよりお若くて驚きましたよ」

「ハハハ、オレの年じゃ、若いじゃなくて幼いって言うんじゃないんです?」

「いや、まあ、確かにそうですね。ハハ、これは失礼しました」

セリオウが言った若いと言う表現に、思わずスピネルは苦笑いしながらも突っ込んでしまっていた。

「では、話をお伺い致しましょう。アセメイド鋼で何をお作りしましょうかな？」

そう言うとセリオウは背筋を伸ばし、真面目な顔つきで身を乗り出した。

「はい。実はこの金属でこれを作ってほしいんですよ」

スピネルはリュックからイベントで手に入れたアセメイド鋼のインゴットと、小さい木箱から縫い針を取り出しテーブルに置いた。

「こ、これは針ですか？」

セリオウは驚いた顔で、テーブルの上に置いてある針を手にとっている。

「ええ、縫い針です」

「……………縫い針ですか……………私も開発課に来て十年近く経ちますが、アセメイド鋼の加工でこの様な物の依頼は初めてです。殆どのは武器や防具又は軍用品ですからね。差し障りが無ければ何故針を選ばれたのかお伺いしてもよろしいですか？」

セリオウの質問にどう答えようか少しの間考え、スピネルは口を開いた。

「まあ、あまり詳しくは言えないけど……………針って使い方によっては結構強力な武器になると思うんだけどな。例えばニードルガンって知ってますか？」

「あ、ええ、存じてます。確かにニードルガン自体は非常に殺傷力が高い武器ですが、運用コストも非常に高くつきます。一回で発射される針は数百発、しかも全て使い捨てですからね。弾となる針のコストを考えると、とてもじゃないですが実用的な武器とは言えませんね」

流石は開発課だけありセリオウの説明は理に適っており、その話しにスピネルも頷いていた。

「オレもその考えには賛成ですけど、もし、もし、弾となる針が使い捨てじゃなければどうですか？その方法をオレが持つてるとしたら？」

「ムムム………そうですね。針自体が非常に硬度が高いアセメイド鋼、その様な方法をお持ちなら確かに十分強力な武器となります」

腕組み、真剣な顔でセリオウは答えている。

「まあ、その方法は言えませんが、この塊全部針に加工してもらったらどの位出来ます？出来れば1セット1000本で」

「そうですねー、少しお待ちいただけますか？確認してきますので」

そう言つとセリオウはスピネルが出した針を手に持ち部屋を出て行った。

「お待たせしました。計算上は15セットになりますが、実際

のロス率を考えますと11セットぐらいになりますな。余りの端数は数百本出るとは思いますがね」

セリオウは何やら計算式が書かれている書類を数枚手に持ち、数分で戻って来た。

「それだけ有れば十分かな？んじゃ、それでお願いします」

セリオウの言葉を聞きスピネルは数秒目を瞑っていたが、直ぐに了承の旨を伝えた。

「承りました。一週間もあれば加工は完了します。完成しだい送らせていただいてよろしいですか？」

「ええ、お願いします。で、今の話しとは別に後2点お願いしたい事があるんですよ、料金は別で支払いますから……………」

その後もスピネルは二時間ほどセリオウと相談し、会社を後にした。

・ ・ ・

「ふう、この辺りまで来れば人の気配は無さそうだ」

針の加工を注文してから約一月ほど経った頃スピネルは朝一番の試合終了後、天空闘技場の街からスピネルの足で走って一時間くらい離れた山中に来ていた。

「……………一月以上必死で訓練した新しい発^{ハッ}がやつと出来たからな。試験までに少しでも使う練習しないと」

腰のベルトに取り付けてある車載用のカップホルダーの様な形状の物を軽く叩くと、直径7センチほどのホルダーの中にある大量の針が僅かに光りだす。

「……………まだ満杯まで注入できてないか……………セットして3日だし仕方がないよな。それより練習だっ！……………いけえっ！バンク・オブ・ニードルっ！」

腰のホルダーで微かに光を放っていた1000本の針は、スピネルの気合と共に空中に浮きスピネルの頭上で50センチほどの輪状に展開している。

「……………イメージより動き出しが遅いな……………まあ、初めてだしこんなもんか。さて、色々試してみるか。んじゃ、最初はその木だな。切断っ！」

スピネルの前方に密集している木の中で、幹の太さが5メートルくらいの大木に指を刺した。すると頭上で円を描いていた黒い塊が5メートルほどに横並びの形状になりながら、物凄い速さで一斉に木に向かい飛んで行った。

「……………な、中々の威力だな……………ハハ」

スピネルが指した大木の幹へライン形状になっていた針は殺到し、ほとんど音も無く針の群れは幹を通過した。そして数秒後低い轟音が辺りに響くと、大木は地上1メートルから上が綺麗に切断され倒れてしまった。

「…………お、驚いていても仕方ないな。ワザワザ人気が無い場所まで来たんだ、少しでも練習しないとな」

その後、スピネルは廻りの大木や大きな岩などで2時間くらい練習を続けていた。

「…………お、思いの他凶悪な発^{ハッ}になった気がする…………これは使う時はよく考えないとエライ事になりそうだ……………」

倒れた木の幹に腰掛けてスピネルがまわりを見ると、倒れた大木が数本、太い幹に10センチくらいの穴が開いた木も数本、それ以外にも穴が空いた大きな岩や、上半分が切断された岩、グスグスに小さく砕かれた岩などが散乱しておりあたかも戦争でも行われた後のようになっている。

「まだ3日しかオーラを注入していない針での通常の周^{シユウ}だけでこの威力か…………元々は、満杯までオーラを注入して針先にオーラを集めた硬^{コウ}で使うつもりだったんだけどな…………まあ、予定より強力なのは良い意味での想定外だしヨシでしょう。今の問題は針の操作が大雑把にしか出来ない事か…………理想的には1本1本を自由に動かせる様になる事と、自分もある程度戦いながらも針の操作が出来る様にならないとな。要は練習つてとこか」

休憩しながら色々と考察をしていたスピネルだったが、立ち上がると日が傾くまで練習と休憩を繰り返すのだった。

能力名

バンク・オブ・ニードル（貯め置き出来る針）

能力 具現化したニードル・ホルダーに入れた針を操作する。具現化されたニードル・ホルダーは具現化中は常にスピネルのオーラを吸収し、ホルダー内の針へ注入され続ける。吸収するオーラはニードル・ホルダーに付随しているダイヤルで調整できる様になつており、90%〜100%の範囲で調整可能。ホルダー内の針は限界までオーラを吸収すると金色に変色し、（アセメイド鋼の場合には50%で2週間掛る。針の材質により時間は変わる）限界まで吸収した針はそれ以上放置すると砕けてしまう。ホルダーから取り出した針は少しづつオーラを発散し、約一月で元の状態に戻つてしまう。

特徴1 戦闘する時針を操作するのに若干のオーラは使用するが、針自体を強化する為のオーラは必要としないので自身の強化等にほぼ全てのオーラを使用できる。

特徴2 この能力は針を周で強化する事により針自体の強度を上げている。そしてスピネルの場合は幼少の頃から針を念能力で強化し日々の生活で使用し続けていた為、針に纏つているオーラの攻防力移動まで可能となり針先端部のみ硬で超強化が出来る様である。

特徴3 ニードル・ホルダーを具現化し常に肉体からオーラを強制的に90%〜100%奪われる事により副産物的効果として肉体に重りを着けて付加を与えているのと同じ様な効果が発生している。その結果ニードル・ホルダーを具現化している間中オーラに付加をかけ続ける為、オーラの総量を増やす訓練となつている。

二章少年期 14話 試験開始×一次試験(前書き)

今回も更新に時間が掛かってしまいました：： 今回は少しだけ原作に触れる事となり、ほんの少しお約束を入れてみました。宜しく
お願いします。

二章少年期 14話 試験開始×一次試験

「……………どうみてもゴーストタウンだよなあ……………ハア、もしかしてオレが間違ってるって事は無いよな……………」

スピネルが不安そうに見上げた看板には大きな文字で「サマミッシュ市・トレインステーション」と書かれている。

「……………やっぱりここであってるハズなんだけどな……………」

スピネルは再び大きな溜息をつき、携帯電話で時計を確認している。

1月7日の午前8：35分。いまスピネルはヨルビアン大陸のほぼ中央にある小さな田舎町、サマミッシュ市トレインステーションを出たところに居る。何故スピネルがこんな場所で途方に暮れているかと言えば……………

新しく開発した能力の訓練を行いながらも闘技場での試合の日々を過ごしていたのだが、本格的な冬を迎え少し経った頃一枚の葉書がスピネルの手元に届いたのである。その葉書はハンター協会から送られてきた物で、ハンター試験の場所や日時が簡単に書かれていたのだ。その葉書が届き、仲の良かった三人に3ヶ月ほど実家に帰る事を伝え天空闘技場を出て来たのである。

「……………もう30分は過ぎて……………今年の試験は無理かもしれないな……………」

そろそろ本気でスピネルが諦めかけた時、ステーションビルの前

の道で爆音をたてながら一台の大型バイクが走りぬけビルを少し越えたところで急ブレーキで停まったのだ。

「少し待たせたかねえ、アンタがスピネルってガキかい？」

バイクのエンジンを切りもせず、大柄な運転手はヘルメットを脱ぎながらスピネルの前にやってきた。

「あ、え？………は、はい。オレがスピネルⅡストーンですが………」

驚きながらも見上げた先には、身長180センチ以上の大きな体に長い黒髪を背中に流した女性がサングラスを外しこちらを見下ろしていた。

「………ハンター試験を受けるガキってので間違いないね？」

「ええ、あなたがパウロさんから紹介してもらったナビゲーターのウォレンスさんですね」

スピネルがそう言うと、ウォレンスはニヤリと笑い頷いた。

「ああ、それじゃーさっそくだけど案内料3千万頂こうかねえ」

「ええ、わかりました」

二人はお互いに携帯電話を取り出すと、お金の受け渡しを始めた。

「ああ、確かに受け取った。それじゃ、一旦後ろに乗りな。私しや、まだ朝飯も食べてないからね。試験会場に向かう途中で適当な

店に寄るつもりだから。さあ、さっさと乗りなっ！」

ウオレンスに急かされ大型バイクの後ろにスピネルが乗った途端、再び爆音を立てながら二人が乗ったバイクは猛スピードで走りだした。

「さあ、ここで休憩だ。アンタも腹が減ってるなら何か食べて行きな。試験会場の高層都市アンゼルへは昼前には着くよ」

二人を乗せたバイクが走り初めて約一時間半後、ハイウェイ沿いの古びたお店の前でバイクは停止した。

「……………いえ、食欲ありません……………」

「ハハ、ハンターを志そうってもんがこれ位で酔ってたら話にならないよっ！まあ、私が飯を食ってる間にしっかり水分取って休憩してな」

物凄いスピードで疾走するバイクの揺れに吐く程では無いにしろ、かなり気分が悪くなりゲンナリした顔のスピネルの背中を豪快に叩きながらウオレンスは先に店へ入って行く。

店に入ったスピネルはやはり食欲が無いのか冷たい紅茶を注文し、ウオレンスといえば豪快にステーキ定食を注文していた。

「……………すごい食欲ですね……………」

注文してから10分ほどで運ばれてきた目の前にあるぶ厚い肉に

カブリついてるウオレンスに、呆れた顔でスピネルは呟いた。

「そうかい？私みたいな流れ者は食べれる時にシツカリ食っとかないと体が持たないからねえ〜」

「流れ者ですか。そういえばウオレンスさんは毎年ナビゲーターをやってるんですか？」

「いや、毎年って訳でもないねえー、私はバイクで旅を続けるのがメインだからさ。でも何だかんだ大体の年はやってるよ。ハンター協会も人手不足みたいだからね」

ウオレンスは器用に肉とパンを齧りながらも、ちゃんと会話には答えている。

「そうなんだ。でもオレみたいに案内料払って連れて行ってもらうのって本来ならダメなんですよ？」

「ああ、金で試験会場を教えるって事かい？特に問題は無いね。元々私達ナビゲーターを探す為には自分に有力なツテがあるか、かなり広い人脈を持つてるか、アンタの様に優秀な情報屋を知ってるかくらいしか方法がないからね。それにハンター試験にナビゲーターが存在する事自体殆んど人は知らないよ。知っているとするれば何度か受験し、しかも試験場まで辿り着いた事があるヤツだけだろうしね。でも、アンタみたいに初受験で案内するのは始めてだよ。何処で知ったか知らないけど、よく調べたもんだよ」

「ハハハ……………（まさか本当の事は言えないしな……………）」

ただ誤魔化す様に笑っているスピネルに、ウオレンスは苦笑いを

見せた。

「別に何処で知ったっていいさ。ただハンターになって何らかの依頼を受けたら当然下調べもするだろうし、その情報を得る為に金銭のやり取りだって生まれるさ。私がハンター協会から言われたのは、お金を受け取る、受け取らないはそれぞれのナビゲーターの好きにしていってことさ。それより試験を受けるに当たって、前もって調べて準備する。それもハンターの資質って事らしいからね。だからお金を貰って案内しても決して問題にはならないよ」

その後も雑談をしながら休憩をし、小一時間ほどで店を後にした。

・
・
・

「さて、無事に到着したね。ここが高層都市アンゼルだ。そして今年の試験会場があの高層モノレールのターミナルビル地下150階よ」

スピネルを乗せたバイクは途中休憩を挟みながらも、目的地であるアンゼルへ11時頃には到着したのである。

「……………地下150階ですか」

「ああ、ただし普通に行っても地下150階に行くエレベーターには乗れないよ。裏口から入って管理事務所の部屋に行くんだ。そして地下150階のメンテナンスに来ましたよって言うんだよ。それが試験会場へ行く合言葉になってるからね」

「……………地下150階のメンテナンスに来ました」ですね……………
…解りました」

少し緊張した面持ちでビルを見たまま、確認する様にスピネルは答えた。

「それじゃー、頑張ってきたっ！ただし無理はするんじゃないよ。試験は来年も再来年もあるんだからね」

「はいっ！ありがとうございますっ！」

「ああ、しつかりやんなっ！」

肩を軽く叩き、ウオレンスは再びバイクを発進させた。

「たしか、協会から来てたハガキじゃ集合時間は12時半か……………
…少し時間もあるし軽く何か食べるところかな。朝から何も食べてなかったし」

走り去るバイクの背中を見送ったあと、スピネルは目的のビルの傍にある喫茶店で軽くサンドイッチを食べつつ試験用に持ってきたリュックの中身を確認した。

「……………す、すみません」

「んん？はい。何か御用ですか？」

ビルの裏側のドアを開けると直ぐに管理事務所とネームが入った部屋があり、スピネルが声を掛けると年配の男の人が出てきた。

「はい……………」地下150階のメンテナンスに来ました」

その言葉を聞いた男はスピネルを見て驚いた様に目を見開いたあと、直ぐに平静を装った。

「……………そうですか。では、業務用エレベーターに案内しましょう」

部屋から関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を抜けさらに迷路の様な通路を進み、大きな業務用のエレベーターの前で足を止めた。

「150階へはこのエレベーターからしか降りられません。どうぞ」

初老の男の案内に従い大きなエレベーターに4、5分ほど乗っていると、到着音と思われる音がしたと同時にエレベーターの扉が開いた。

「……………」

「ハンター試験受験者の方ですね。お名前を教えてくださいませんか？」

エレベーターの扉が開いた瞬間ホールの様な場所にひしめいていた大勢の目がスピネルに向けられ、その探るような目線に思わず立ち竦んでいたスピネルの前にスピネルより背が低く髪が全く無いツ

ルツルの顔をした男が話しかけて来た。

「あ、……………はい。スピネルストーンです」

呆然としていたスピネルだったが声を掛けられ我に返ると、慌ててエレベーターから降りて答えた。

「え、スピネルさんですね、はい。ではこのプレートを胸に着けていてくださいね」

試験の関係者らしき人に395番と書かれたプレートを渡された頃には廻りの人々は興味を無くしたかの様にその視線はスピネルから外れていた。

係りの人が離れていき、ようやく少し落ち着いてきたスピネルは壁際に移動し廻りに目をむける。

「……………何か緊張感と言うか、敵愾心と言うか……………すごい雰囲気だな……………」

廻りのむせ返る様な空気感にゴクリと唾を飲み込み、顔を引き攣らせていると横から声を掛けられた。

「なあ、なあ、オマエさんは初受験者だろ？」

「え？ああ……………ち、ちょっと待ってください……………はあ、ふうう、はあ、ふうう。ええ、そうですね？」

「……………(チツ、もう落ち着きやがった……………ガキのクセに生意気な。あのままこの雰囲気にもまれていれば楽に潰せたのに……………)」

いや、なにハンター試験ベテランの俺が色々教えてやるのかと思っ
てな。俺はトンパってんだ」

トンパが真横に来るまで気付く事が出来なかった事で、スピネル
は自分が冷静ではない事に改めて気付き深く深呼吸を繰り返したの
である。

「トンパさんねえ〜）……………とうとう物語の登場人物が出てきた
か……………これで完全に類似の世界じゃなく、本当に物語の世界って
確信が持てた訳だけど……………）で、何を教えてくれるんですか？」

胡散臭げな目でトンパをみながらスピネルは答える。

「そうだなあー、注意しなきゃいけない受験生とか色々だな。ま
ず、お近づきのしるしに乾杯といこうじゃないか？オマエさん名前
は何て言うんだい？」

ニコニコと屈託の無い笑顔を浮かべながら、トンパは鞆から缶ジ
ュースらしき物を取り出し出してきた。

「……………物語のまんまかよ……………これを毎年やってるな
んで、ある意味スゲエよな。少しは手口を変えればいいのに……………
バカだな）いや、遠慮しときます。お腹壊したくないから」

ジト〜とした視線を送りながらスピネルが断ると、何かを察し
たのか額に汗を浮かべ適当な事を言い慌ててトンパは去って行った。

駆け足で立ち去るトンパの後姿を目で追いながら、スピネルは少
し思考に耽りはじめた。

「……………（物語の知識つて大雑把な事しか無いんだよな。詳しい年代も解らないし、話しは途中までしか記憶に無いみたいだし………まあ、あんまり気にしても仕方がないか。登場人物が居たからといって、物語りと全てが同じとは限らないしな。まあ、オレはオレ自身の目標に向かって動く事に変わりはないか……………」

一旦スピネルが考えを纏め終わろうとした時スピーカーから大きな声が聞こえた。

「え、時間となりました。それでは第284回ハンター試験を開始します」

試験開始の音が聞こえ始めるとそれまでざわ付いていたエレベーター前のホールはシンと静まり返り、スピーカーからの声だけがいやに大きく聞えていた。

「それじゃーみなさんご存知かとは思いますが、最後にもう一度確認致します。このハンター試験では試験中に大怪我を負ったり五体満足ではなくなる、また最悪の場合は死亡する事もあります。それでも受験される覚悟の有る方以外はここから退出してください。試験が始まってしまうと、もう後戻りはできませんので」

ホールに集まっている受験生の視線を追うと、丁度中ほどの壇上で正にトレジャーハンターだと言わんばかりの格好をした体格の良い男がマイクを片手に立っている。

「……………ふむ、退場者はゼロつと。俺は一次試験を担当するラデオだ。では一次試験を開始する」

誰一人ホールから出る者がいないのを確認したラデオが一次試験

開始の宣言をすると、ホール奥の壁にあった巨大なシャッターが上がり始めた。

「では、一次試験は俺に付いて来る事。それじゃー、スタート」

それ以上の説明はする気が無いのか、ラデオは壇上から飛び降りかなりのスピードでシャッターの先にある大きな螺旋階段を駆け上がりはじめる。

「うおっ！い、急げっ！」

何処かの受験生がそう言うやいなや、ホールに居た受験生全員が一斉に螺旋階段に殺到しはじめた。

「……………うわっ！危なっ！もみくちやになってるじゃないか……………
……………少しだけ待つか……………」

トンパのお陰か、普段の冷静さを取り戻していたスピネルは少し様子を伺っている。

螺旋階段自体は巾が10メートル以上はある大きな物なのだが、ホールにいた400人前後の受験生が一斉に集まった為、かなり危険な状態になっていた。

「……………そろそろ行けそうだな」

その場で5分ほど様子を見ていたスピネルだったが、ようやく階段の混雑が幾分かマシになったのを見て軽く走って階段を上がり始める。

「ふう、随分バラけて来たな……先頭とあんまり差がひらいて失格つてのも困るしペースを上げるか」

階段を走って昇り始めて20分くらい経過するとバテてペースダウンする者や途中で休憩する者も出始め、最初と比べるとかなり空間が空きスピネルもペースを上げ普通の人が全力で走るくらいの速さで昇りだした。

「い、一体何処まで続いているんだこの階段は……」

「ち、ちよつと休憩しないと……あ、足が……」 さらに十分くらいすると、廻りには階段に腰掛け俯いている受験生がチラホラ目に付き始める。

「……ふう。途中までは数えてたけど、地下150階から上がり初めて今はたぶん100階くらいか……あとのくらいあるか解らないけどもう少し急いだ方がいいかもしれないな」

そこから更にペースを上げたスピネルだったが途中ドンドン受験生を抜かし、10分くらいしてようやく先頭集団が見え始めた。

「おおっ！ やつと先頭に追いついた。これに着いてけば大丈夫だろっ」

20メートル先くらいに試験官らしきトレジャー姿を確認したスピネルは、廻りのペースに合わせて着いていく事にした。

「よし、屋上到着だ………おおーい、俺が到着後、5分で出口のシャッターは閉鎖するぞっー！下の奴等は急げよっー！」

試験官のラデオは屋上に到着するや、ハンドスピーカーを口に当て、階段の下に向かい大声を出していた。

「ふうう〜、無事に到着つと。はあ〜結構疲れたな」

試験官に遅れる事30秒ほどで屋上に着いたスピネルは息切れこそしていないものの、顔には汗が流れていた。

「……………流石はハンター試験を受けに来てる人達だな。オレも頑張らないと」

スピネルが屋上の端に移動しリュックから水筒を取り出して飲みつつ廻りに目を向けると、先頭集団にいた受験生の半分以上は汗を流しているが息切れまではしていない人がほとんどだった。

「5、4、3、2、1、0。はい終了〜」

「試験官のラデオが時計を見てカウントを終えると同時に屋上へ続くシャッターが閉められた。

二章少年期 15話 二次試験×三次試験（前書き）

中々思い通りに進みません。トホホ…… 宜しくお願いします。

二章少年期 15話 二次試験×三次試験

「さて、続いて二次試験を開始する。今居るのは高層モノレールのターミナルビル屋上だ。180階建ての屋上、高さにして約750メートルだ。そして二次試験は目の前に見えるモノレールのワイヤーを伝いその先にある目的地に到着する事だ」

屋上へのシャッターが閉まり、数分後に試験官のラデオが落下防止の手摺りに飛び乗り説明を始める。

「まあ、見て解ると思うがこのワイヤーはこの高層都市のビル群を繋ぐ交通の要だ。そして今回試験で使用するのとは一番右端にある赤く塗られているワイヤーだ」

ラデオの説明を聞いていた受験生は、目の前を縦横に走っている太さ10センチはあろうかという極太ワイヤー数十本の端にある赤いワイヤーに目を向けた。

「本来なら一々説明はしないんだが、今回は説明しておく。このワイヤーの先、目的地まで短くみても50キロ以上はある。その間ワイヤー支持用の柱は5キロ毎にあるが、その間は何もない。しかもこれだけの高さになるとひっきりなしに強風が吹くし、突風もあるだろう。このワイヤーから落ちれば確実にあの世行きだな」

ラデオは受験者の顔を見渡すと、明らかに動揺しだす者や顔色を無くす者もいる。

「ハッキリ言うが自信の無いヤツは此处で諦める……………一次試験通過者は124人。どうあがいても無事に辿り着けるのは50人前

後が良いところだろうな。今の時点で息切れしてる様なヤツや、恐怖を感じたヤツじゃ絶対に死ぬぞ。まあ、後は自分の事は自分で考えてくれ。それじゃー、二次試験開始だ」

二次試験開始を宣言したラデオは、一次試験の時と同様に軽やかな身のこなしで手摺りからワイヤーに飛び移ると数秒で見えなくなつた。

「む、無理だ……………」

「……………ワ、ワイヤーの上を50キロなんて……………」

手摺りから身を乗り出し下を眺めて座り込む者や、階段を辛うじて上りきり全身から汗が噴出している者等十数人が放心した様に座り込んだ。

「ハッ！その程度でよくハンター試験を受ける気になつたもんだ。二度と来るんじゃないぞ。クズがっ！」

「へっ！本当だぜ。バカがっ！」

完全に戦意を失つたであろう集団に罵声を浴びせながら何人かはワイヤーに飛び乗り走り出した。そしてそれに見ていた受験生もそれに続きだす。

「……………（あんまり前と引っ付くのは揺れが大きくなって危なそうだな……………少し待ってから行こう）」

最初の受験者が走り始めて10分ほど経ち、ワイヤー上を走る者が減り始めてからスピネルはワイヤーに昇り走り始めた。

「案外安定してるな。孤児院の森で枝を走ったり飛んだりしてたのと大差ない、行けそうだな……………でも念のためロープは出しとこう……………」

スピネルは数分間走り様子を見た後、リュックからカギ爪の付いたロープを取り出し腰にぶら下げた。

今回のハンター試験を受けるに当り、スピネルは役に立ちそうと思つた物を色々とリュックに入れ試験に持ち込んでいる。それ以外にも右側の腰には以前手に入れた神字が彫られた木刀と具巢化しているニードルホルダー（オーラ充電中の針千本）左側の腰には刃渡り20センチほどのアーミーナイフ。背中側にはベルトに隠す様にベズナイフが固定してある。それ以外にも足の側部には投げナイフが数本、試験会場到着以降は暑くなり脱いでリュックに仕舞つてしまつたが防刃繊維で作られたコート等試験対策の用の物を色々と用意していたのである。

「……………さすがに何人かはリタイヤし始めてるな……………」

ワイヤーを走り初め約一時間、距離にして15キロくらい走り続けるとチラホラと支持柱の梯子で降りだす受験生が現れ始める。

「……………ふう……………走り続ける疲れより、急に吹く突風やワイヤーを踏み外さない様に注意する集中力を維持するのがキツイよな。まあ、このペースならオレは何とかなりそうだけど……………孤児院の森でやつた訓練がこんな所で役立つとは思わなかつた」

そこから更に一時間程走り、スピネルの前後50メートルくらいには受験生は見受けられなくなつていた。

「おっ？また、前に追いついたかな？」

それなりに早いペースで走るスピネルは何回か前を走る受験生に追いつくと、支持柱の所で抜き去り走り続けていた。

「はあはあはあ……………しまっ、うわああっ！」

「あっ！ヤバ、せやあっ！」

スピネルの前方5メートルくらいをフラフラと走っていた受験生が不意に足を踏み外し、ワイヤーから落下した。真後ろでみていたスピネルは咄嗟に腰のロープに手を伸ばし、落ち始めた受験生に向かい投げつけた。

「うわあああー……………ガッっ！え？なにが？」

「う、動かないでください。直ぐに引き上げるから」

スピネルが投げたカギ爪は、ギリギリで落下した受験生の右足首に巻きついたのである。

「ハアハアハア……………た、助かった……………」

年の頃20代前半くらいであろうその男は、真っ青な顔で全身から冷汗を垂れ流しながら震える手でワイヤーを掴んでいる。

「……………（死ぬ様な思いをしたんだし、この人もう無理だろうっかな……………まあ、オレも落ちたら同じ様になるだろうな）……………もう見えてるけど、あと500メートルくらいで柱に辿り着くから……………」

…そこまで行けそうですか？」

気を使うように話しかけたスピネルへ男は真っ青で引き攣った顔をゆっくり向ける。

「……………あ、ああ……………本当に助かった……………あそこ迄なら何とか行けそうだ。本当にありがとう」

弱々しい男の言葉にスピネルは静かに頷き、柱のところまで先に走るとそこで様子を見てみた。

ワイヤーに縋り付いていた男はスピネルが先に進むと、ゆっくりとだがワイヤーを握り締め四つん這いで進み始めた。

「……………よし、あれなら少し時間は掛るけど此処までなら来れそうだな」

男が進み始めて5分くらいは心配そうに様子を見ていたスピネルだったが、残り200メートルを切り大丈夫と思ったのか先に向かいワイヤーを走り始めた。

「今ので少し時間掛ってしまったし、そろそろ急いだほうが良さそうだ」

スピネルはその後かなりペースを上げ、先に向かってひた走った。

「おおっ？ やつと終点か？」

男を助けて以降も何人か支持柱でリタイヤしている受験生を尻目に走り続け、ビルを出て3時間半ほどで巨大な岩棚状の山が見えて

きた。

「ふう〜、見え始めてからでも随分走ったな。距離感がおかしくなりそうだ」

巨大な岩棚のような大地が見えだしてから30分は走り続け、ようやくモノレールの降り口が見えたのだ。

「おう、無事二次試験通過オメデトー。タイムリミットまであと30分くらいだな。向こうで少し待ってろ」

スピネルがワイヤーの終点で飛び降りると、試験官のラデオが近づき先に着いていた受験生の居る辺りを指差しそう告げた。

「へっ！ガキが良くここまで来れたもんだな」

スピネルは言われた通り50人ほど受験生が居る場所の端の方へ向かっていくと、途中で腰や背中に様々な武器を背負ったモヒカンカットの男が声を掛けて来たが気にせず離れた場所に座った。

「チツ、可愛げの無えガキだぜ」

先ほどの男がまだ何か言っていた様だが、特に気にもせずスピネルはリュックから水筒と携帯食料を取り出し食べ始めた。

「よしっ！時間だな、二次試験終了〜。二次試験通過者は56人だ。次の三次試験の場所に向かうから着いて来るように。では出発」

スピネルが到着して30分ほどし、ラデオは岩棚の外周部に沿っ

て歩き始めた。

「よっし、到着。俺はここまで、デリバンさん後は宜しく〜」

歩き始めて一時間くらい経ち空が赤くなり始めた頃、少し開けた場所に飛行船があった。その前に到着した一行を、上下共毛皮の服に身を包んだ大柄な男が待っていた。

「ああ、承った。諸君二次試験通過おめでとう。これから行う三次試験を担当するデリバンだ。短い間だが、宜しく頼む」

今迄担当していた軽いノリのラデオと違い、三次試験担当のデリバンは受験生を見渡し挨拶した。

「それでは三次試験の説明をする。この試験はここへ天空魔境マゾシスでのビーストハントだ」

「……………ここ、ここが天空魔境マゾシスっ？マジかよ……………」

「て、天空魔境マゾシスでのハントだっ！き、危険過ぎるだろ……………」

今居る場所の名前を聞いた受験生の間からは、動揺の声がアチコチで上がっている。

天空魔境マゾシス。それは世界七代魔境といわれている場所の一つであり、多くの魔獣や危険な獣が存在する場所である。このマゾシスと言われる場所は、大昔の地盤隆起で発生したテーブルマウンテンで高さ900mの断崖絶壁の孤立した世界である。全体では700km²もの広さがあり、未だに全ての場所は把握されていない

と言われている。

「これはハンター試験だぞ、危険があるのは当然だ。今回のハン
ト対象は5種類用意されている。ここに用意してある紙にハント対
象の写真と簡単な説明は書かれている。期限は5日目の日が沈むま
でだ。ただし注意して欲しいのは、対象は生きてそのまま捕まえて来い。
対象が死んでいる場合や、四肢に欠損がある場合は認めない。以上、
質問は受け付けない。それでは開始っ！」

試験開始を宣言された受験生は急いで箱の中に入っている紙を取
り始めた。

「……………オイオイ……………シルバーバックウルフだと……………本気が
っ?」

「……………ポ、ポイズンオオクモワシって……………」

「こ、これに載っているヤツ全て最低でも第3級危険指定動物じ
やねえーか……………」

紙に書かれているハント対象をみて、多くの受験生は額に汗を浮
かべている。

「ど、どうする今から行くのか?」

「い、いや、もう夕暮れだ……………この魔境に夜入るのは危険過ぎ
るだろ……………」

目の前の森に入らず野宿の準備に入りだす受験生がほとんどだが、
何人かは黙って森に入って行く。

「む、どうしようか……………（何でも狩れば良いって事なら、孤児院でやってた様にするけど……………指定されると遣り辛いよな。そもそも見つける事自体結構大変じゃないのか？孤児院でも高く売れる獣を探しても早々は見つからなかったからな……………案外この試験、捕まえるのも大変だけどそれ以前に見つける方が難しいんじゃないか？）……………少しでも時間がある方が良いか……………仕方ない、行くか……………」

気が進まないのかスピネルは溜息をつく、肩を落として森に入ってしまった。

「……………（絶^{ゼツ}で気配を消すと余計に解る……………人の手が入ってないからか、ここには生物がメチャクチャ多いんだ。この中から決められた獣を探すって、本当に大変だぞこれは……………）……………」

足音は出さないように注意しつつ辺りを探りながら進むスピネルは、三次試験の難しさに頭を悩ませている。

「……………（なになに、シルバーバックウルフ。グレイバックウルフの群れのリーダー、基本的に森を住処としている。平均5メートルほどの大きさになり、群れを統率しだすと背中が銀色に変化する。非常に凶暴な上、群れで行動する為一度獲物として狙われるとほぼ助からない……………群れて時点が無理だな。次は、ポイズンオオクモワシ。クモワシの一種。崖に巣を作り卵を守る。普通のクモワシの二倍近い大きさと爪には強力な神経毒があり、普通の人間ならかすり傷でも即死亡する……………崖って時点でコイツも無理じゃん）……………」

廻りに獣の有無を確認し、一度木傍に座り手の書類に真面目な顔

で目を向ける。

「……………（残り三種類の内、一頭は熊の一種、もう一頭はワニの一種、もう一つは魚か……………熊は岩場、ワニと魚は水場……………水中じゃ見つけるのも大変そうだし、不意を付かれると危険かもな。熊を狙うか……………フムフム、ホワイトロングベアー。単体で行動し、基本的に岩場に巣を作っている。性格は獰猛で雑食であり、人でも獣でも何でも襲う。平均身長は4メートルにまでなり、強靱な爪とキバで獲物を捕食する。特徴として体中が白く長い体毛に覆われその体毛自体が非常にしなやかで強い、通常の銃や刃物ではほとんどキズ付ける事が出来ない……………周シユウを使ったら何とかなるか……………）よし、熊にするか」

スピネルは森の先にある大きな岩山を見ると、軽く水筒に口をつけ立ち上がると静かに歩き出した。

・ ・ ・

「ふう……………やっと着いた」

真っ暗な森の中を数時間歩き、深夜になってようやくスピネルは岩山の麓に辿り着いた。

「朝から探す方が効率がいいか……………」

近くの岩に腰を降ろし少し考えると、リュックから携帯食料と水

筒を取りだし食べ始めた。本当なら少しでも標的を探す時間に当てるべき所なのだが、熊という動物は基本的に夜行性の為昼間の寝ている時に見つける方が楽だと考えた様だ。実際には、それ以外の理由もあるようだが……

「……………四時間くらいは休めるかな」

携帯電話で時間を確認したスピネルは、いきなり腰にある刃渡り20センチほどのアーミーナイフを抜きナイフの刃に周シユウを行つと岩山の壁に向かい穴を掘り始めた。

「……………これくらい有れば十分だな」

硬そうな岩をナイフで掘り始め大人が座つて辛うじて入れる位の空間が出来上がると、近くに有つた大きな岩を引きずつて来た。

「……………何だかんだで疲れたな……………少しでも寝よ」

持ってきた岩を引きずりながら背中から穴に入り、そのまま岩で蓋をしてしまったのだ。

岩山の壁に少しずつ日が当り始めた頃、蓋に使われていた岩が低い音と共に横へずれ始めた。

「ううゝ……………もう少し寝たかった……………」

目を擦りながら穴から出てきたスピネルは、一度大きく伸びをすると体をほぐしはじめた。

「ふあゝ、眠いけど……………そろそろ行くか」

スピネルは背中にリュックを背負い、岩山の麓を山肌に沿う様に歩き始めた。

「……………残り、二食分くらいか……………」

岩肌や木々の隙間、地面の様子を調べつつ歩き続けて約5時間、手頃な岩に腰掛け昼食を取っている。

「水は補給できたから当分心配いらないけど……………食料もどうにかしたいところだな……………」

残り少なくなつた携帯食料を口に放り込み水で流し込むと、スピネルは再び歩き始めた。

「……………あの穴……………何かの気配を感じる……………」

軽い昼飯の後二時間ほど歩いた所で、岩肌から生えた木々に隠れる様に大きな洞穴をスピネルは見つけたのだ。

「……………何か居るのは間違いない……………確認してみないと」

今は絶ゼツを行ってるので気配に敏感なスピネルには何か生き物が居る事は解っているのだが、目的の獲物が確認する為に足音をださない様神経を使い洞穴に近づいていく。

「……………クソっ！真っ暗で何も見えない……………仕方ない、穴に入るか……………」

凝ギョウケンと堅ケンを行い、今まで以上に慎重な足取りで穴の中を進んでいく。

「……………（見た目より広いな）……………」

入口から5メートルも進むと、洞窟は高さ6メートル、横幅3メートルと見た目より大きな空間になっていた。

「……………（いつ、居たあゝっ！写真と同じ熊っ！や、やっと見つけたっ！）……………」

真っ暗な空間の中でも凝キョウのお陰がある程度の視野を確保できているスピネルの目に十数メートル先に丸く寝そべっている熊が目に入り、その場で無言のまま喜びを表現するかのように満身の笑みを浮かべながら両手を上げている。

「……………（ハハ、何時までもこんな事してる場合じゃないな……………獲物が寝ている内に捕獲しないと。さて、どうするか……………普通熊なら散々孤児院の森で狩ってたけど、第2級危険指定動物って

話しだしな……………リスクは最小限にしときたいし……………」

十数メートル先の標的を見ながら、スピネルは数秒考えていた。

「……………（これ以上近づいて、万が一起きたりしても大変だし……よしっ！バンク・オブ・ニードル、20本っ！）……………」

スピネルが無言で腕を振ると、腰のニードルホルダーから銀色に光る針が数本飛び出し空中で静止した。

「……………（へへへ、念のため、マさんに注文しといて正解だったな）……………」

針が飛び出したのを確認したスピネルは、背中のリュックから5センチくらいの丸いケースを取り出し蓋を開けた。

「……………（針の先にこの麻痺毒をつけて、準備完了ってね）……………」

スピネルが手に持っている丸いケースへ空中で漂っていた針がゆっくり入り、再び浮き上がっていく。

実はこの麻痺毒はベンスナイフの毒を注文した際に、別料金で針に使う用の物も頼んでいたのである。

「……………（20本も必要無いとは思っけど、念には念を入れないとな。よしっ！まずは5本、行けっ！）……………」

スピネルが再び無言で腕を振ると、微かに銀色の針が飛んで行くのが見えた。

「グオッ！」

スピネルの腕が振られて数秒後寝ていた熊が驚いた様に声をあげ起だし、立ち上がるうとはするものの足がフラ付き起き上がれないでいる。

「流石第2級危険指定動物、5本じゃ完全に麻痺させる事はできないか……この針1本分で普通の人なら2日は動けないって、マさんは言ってたけど。まあ、体も大きいな。それじゃ、あと5本いけっ！」

再びスピネルが腕を振ると数秒後に、目は動いているが口からは涎を垂れ流し熊は完全に倒れこんでしまった。

「よしっ！捕獲完了っ！」

倒れた熊が本当に動けないか確認したスピネルは、熊の体に刺さっている針と空中に待機させていた針全てを操作し回収（麻痺毒は綺麗に拭き取った）した。

「しっかし、大きいよな……こいつを飛行船まで運ぶのも骨が折れそうだ……」

ゲンナリとした表情で熊を見ていたスピネルだが、溜息を1つ付くとロープを背負い森に入っていた。

「これで取り合えずは運べるけど……こいつ担いで森を抜けるのは危険だよな……いくらオレが絶^{ゼツ}してもコイツの気配も臭いも消せないし……岩山沿いに行つて、外周部まで出てから戻るか……メチャクチャ遠回りだ。トホホ」

森で太い木を切り枝を払いその木に熊の四肢をロープで結び何とか背負える状態を作ったスピネルは、重さ300キロ以上はあるのかという熊を背負いドスドスと岩山に沿って歩き始めた。

. . .

「ふひひ、やっと外周部にでれたあ。少しだけ休憩するか」

熊を担ぎ歩き始め、約一日。徹夜で歩き通し、試験開始3日目の昼にようやく外周部の岩地に到着したのである。

「お腹空いたし、眠たいし……ここから飛行船までなら、大体二時間もあれば着くだろ。あと少し頑張るかあー」

スピネルは自身に1つ気合を入れると、立ち上がり再び歩き始めた。

「ふう、やっと見た事ある場所だあ。あと一時間くらいで到着だあ」

外周部に出て一時間くらい歩くと前方にモノレールの降り口が見え始め、ここでやっとスピネルの顔に安堵の表情が表れた。

「さて、早いところ試験終わらせて何か食べたいや。早く行こう」

一言呟いたスピネルは、今迄よりも少し足早に歩きだした。

「え？うわあっ！」

そこから更に30分ほど歩いていると前方の岩陰で何かが光った瞬間、スピネルに向かい何かが飛んで来た。いきなりで驚いたスピネルは咄嗟に担いでいた熊を離し、体を横に投げ出した。

「ほうく、よく避けれたな。ガキとはいえ、一応ここまで残っただけはあるってことか」

岩陰から現れた男はナイフを手に持った、モヒカンの男。この男は二次試験終了時に、スピネルをバカにした様に話し掛けてきた男である。

「……………（クソっ！せっかく今まで、熊を無傷で運んできたって言うのにつ！）……………」

いきなり飛んで来たナイフをスピネルは避ける事が出来たのだが、木に縛られた熊は当然動けず肩辺りにナイフが突き刺さっていた。

「へへ、そう睨むなってガキ。その熊を置いて消えりゃー、オマエの命は助けてやるよ。ククク、良い条件だろう？」

何が楽しいのか、ナイフをお手玉のようにクルクル投げながらニヤニヤと笑っている。

「誰が置いてくか……欲しけりゃ自分で取って来いっ！」

空腹と寝不足を我慢し、あと少しで飛行船に辿り着くと思いついた処での出来事にスピネルはとても冷静ではいらなかった。

「オイオイ、そう尖がるなよお。オレは殺しは得意だが、生け捕りみたいなデリケートなこたあ苦手なんだよ。オマエはもう一度獲ってくれば良いんだよ。俺が笑ってる間に黙って消えろ」

男はニヤけていた表情を消し、殺気を漂わせて威圧し始める。

「……………イヤだね。オマエみたいなヤツには絶対に渡してやらないよ」

スピネルは腰の木刀を手に取り、構えながら言う。

「そつかあゝ、残念だなあゝ。じゃあゝ死ねやつ！」

スピネルの返事にモヒカンに男は手に持ったナイフを投げつけると同時に、スピネルに向かい走り寄る。

「死んどけやつ！オラアツ！」

「ハアツ！」

スピネルは飛んで来たナイフを軽く避け、モヒカン男が背中に

背負っていた片手斧での切りつけを木刀で受け流していた。

「ヘッ！ガキにしては中々やるじゃねーかつ！さっさとくたばりやがれっ！」

その後も何度も斬戟をモヒカン男は振るい続けるが、その全てをスピネルは木刀で受け流している。

「……………（弱くはないけど、精々140階層くらいか……………オッサンこの程度で襲って来やがったのかあ？しかも殺す気満々で……………ダメだ、本気でム力ついてきたっ！）……………調子乗んなよオッサンがっ！」

モヒカン男の振り下ろしを横に避けた処で、スピネルは罵倒しつつ木刀をモヒカン男のわき腹目掛け切りつけた。

「くっ、ゲボオオッー」

かなり頭に来ている状態のスピネルではあったが流石に殺す気にはなれず、モヒカン男が斧の柄で防ごうと構えるのを待ちそれなりに力を入れて振り抜いた。結果、ガードした鉄製の斧の柄はくの字に曲がりモヒカン男は10メートル近く飛ばされ木に叩きつけられた。

「ガッ……………カヒユ、ヒユ……………」

「思いつきり背中をぶつけたから息が出来ないんだろ？ざまあみろって感じだな。さて、獲物を横取りする為に人のこと殺そうとまですしたんだ、覚悟は出来てるよな？」

まともに呼吸が出来ないで苦しんでいるモヒカン男に、スピネルはゆっくり近づいていく。

「ヒ、ちよっ…………ちよっとまってくれ…………た、助けてくれ、俺が悪かった。た、頼む……………」

モヒカン男は息も絶え絶えに頭を地面に擦り付ける。

「ま、まってくれっ！殺す気なんてなかったんだっ！す、少し脅かそうと思っただけなんだっ！助けてくれっ！」

「…………オツサン最悪だな。自分が勝てそうな相手なら簡単に殺そうとして、負けそうなら命乞いかよ…………まあ、強かって事なんだろうけど…………なんかバカらしくなってきた、もういいや。オツサンもう行けよ、二度とオレにちよっかい出すなよな」

話してる内に今までの疲労がドツと出た気がしたスピネルは、モヒカン男にそう言つと疲れた様子で熊の方へ歩きだした。

「へ、へへ……………ありがとよ……………この様子じゃ、もう俺は試験には通らない……………でも……………へへ、甘ちゃんガキ、おめえも合格はできねえなっ！」

後ろでブツブツ言っているモヒカン男を無視し熊に向かい歩いてきたスピネルは、男の言葉の最後が聞えた瞬間に感じた殺気に慌てて振り返った。

「なっ！くっ、くそっ！」

モヒカン男はブツブツ言いながら腰の後ろに挿していたナイフを

取り出し、言葉の最後にそれを熊に向かい投擲したのだ。そして、その姿を見た瞬間スピネルは熊に被さるように横っ飛びし、さらに両手を突き出した。

「へ、へへ……バカなガキだぜえ、熊を庇ってオダブツかよ。キヒヒ、そのナイフには即効性の猛毒が塗ってあるんだ。まあ、もう聞えてないだろうがな。クヒヒ、それじゃ熊を貰ってオレ様は試験突破だ。クっ！イテテ」

モヒカン男が投げたナイフはスピネルが咄嗟にだした右手の甲へ当り、スピネルは横っ飛びの体勢で草むらに倒れこんでいた。

「チツ、バカ力で木刀振りやがって……体中が痛いじゃねえーか。クソっ！」

男は折れ曲がった斧を杖の様にし、悪態をついて右足を引きずりながら熊に近づいていく。

「……ふう、危なかった……やっぱり試合と命がけの実戦は違っつて事か……一歩間違ったら死んでたな……」

「なっ……バカな……あの毒食らって生きてられるハズがない……」

スピネルが落ち込んだ様子で立ち上がり服に着いた砂を叩いているのを見たモヒカン男は、啞然として立ち尽くした。

「ナイフが刺さってたら死んでたんだろっね……でも、残念ながらナイフは刺さらなかったんだよ……（纏テンを解いてなかったか

ら助かったただけなんだけどな……俺は心の何処かで試験を、いや、命の遣り取りをナメてたのかも知れないな……このオッサンみたいに意地汚くても最後に生き残った方が勝ちなんだ……闘技場でソコソコ強くなっていい気になってたかもしれない……さて……

服を叩き終わったスピネルは、モヒカン男を振り返った。

「ヒッ、ヒイイー。ゆ、許してくれっー！この通りだっ！助けてくれっ！」

スピネルと視線があったと同時に、モヒカン男はその場に座り込み頭を地面にこすり付ける。

「……オッサンより俺の方が甘かったただけなんだ、別に怒ってはいないよ……」

「ほ、本当か？俺を殺さないのか？」

「ああ、殺さないよ……ただ、同じ失敗はもうしない」

言い終わると同時にスピネルは一瞬で土下座している男の後ろへ回り込み、首にナイフを当てた。

「ヒッ……た、助けて……」

「殺しはしないよ……動けなくはなって貰うけどね」

スピネルは首に当てていたナイフを、モヒカン男の頬に当て軽く切り付けた。

「ヒッ……………え？それだ……………かつ……………」

モヒカン男は頬を切りつけ離れたスピネルに、気を抜きかけたと同時に呂律が回らなくなった事に目を見開いている。

「……………ウ……………ギ……………」

「オッサンのと同じでこのナイフには毒が仕込んであるんだ。即効性のキツイ麻痺毒がね。これで傷付けられたら、どんなに早くても3日間は指先1つ動かない。オッサンのお陰で俺も自分の甘さが身にしみて解った。ありがとよ、じゃーな」

モヒカン男が動けないのを尻目に、言う事だけ言うとスピネルは一度も振り返ること無く熊を背負い歩き出した。

・
・
・

「……………ふむ。小さいキズはあるが、健康状態には問題ないな。スピネル」ストン選手、三次試験通過おめでとう。試験終了まで後2日ある。その間は飛行船で食事と睡眠をとってもらってかまわん。ゆっくり休んでくれ」

モヒカン男に襲撃された場所から一時間半ほど歩き、スピネルはやっと飛行船の処に辿り着いたのである。

「ええ、ありがとございます……………ふう、ようやく一息着けそうだ……………」

無事に試験通過を言い渡されたスピネルは、取り合えず何かお腹にいれようかと飛行船の食堂に入っていた。

「……………」

「……………」

「……………（先に試験通過した人達か……………あのオッサンとは違い、二人共結構強そうだ……………）」

食堂にスピネルが入ると脇に槍を立てかけた30代くらいの細身長髪で浴衣の様な服を着た男と、デリバン試験官のような感じでテンガロンハットに皮のベストを着て背中に大型のボウガンを背負った短髪色黒な20代後半くらいの男二人と視線が一瞬交差した。

その後、空腹の為通常の倍近い量を胃袋に収めたスピネルは風呂に入り与えられた部屋で早々に眠りについた。

「日が沈んだな。では三次試験を終了とするっ！三次試験通過人数は35人だ。この35人は来年ハンター試験を受ける際には、無条件で試験会場まで案内される。ではこれより全員次の試験場に向かう為飛行船に乗ってもらう。到着は明日の朝だ。それでは乗船してくれ」

スピネルは試験が終わるまでの二日間体を休めつつ、飛行船近くの森で獣を数匹狩り携帯食料代わりに燻製肉を作ったりして次の試験の為に準備をしていた。

二章少年期 16話 四次試験×最終試験(前書き)

大変遅くなりました。次からやつと本編に入れるかも?宜しく願
いします。

二章少年期 16話 四次試験×最終試験

「なあ、デリバンさんから見て今年の受験生はどんな感じ？」

飛行船が天空魔境を飛び立った後、試験官のデリバンとラデオの二人は部屋で酒を飲んでいいる。

「ふむ、お主は試験官は始めてだったな。私は何回か試験官を勤めたが、今年の受験生のレベルはまあ例年並と言った処だな。若干、気になる者も少しは居るがな」

「例年並か……俺的にはかなり低く感じたんだけどなあ。俺が受験した時はもつと腕が立つヤツ沢山いたし」

「まあ、その年々によって受験生のレベルは随分変わるからな。一概には決めにくいだろう」

少し不満気な表情のラデオに対し、デリバンは腕を組みながら真面目に答えている。

「で、デリバンさんが気になってるヤツって誰なんだ？」

「ふむ、受験ナンバー395番、スピネルIIストーンだな。普段の動きを見る限り、あの年齢では考えられん程鍛えられている」

「ああ、確かに嫌でも目に付くよな………わずか10歳で念も身に付けている上、子供とは思えない見事な纏テンだ。俺より綺麗に出来てるんじゃないかな」

「ハハ、それはどうか解らんが……念は才能も必要だが、修行を行った時間も重要だ。子供でも念能力者はそれなりに居るが、あの年齢であれだけ見事な念には初めてお目にかかった。しかも……あの腰にある物気付いているか？」

デリバンは真面目な顔でラデオに問いかけた。

「ああ……強烈なオーラーが腰のふくらみに集まってやがる。凝キョウなんかしなくても感じたよ……あのオーラーの密度と量は普通じゃないぜ……俺が目一杯鍊レンをやってもあれには及ばない……10歳のガキがだぜ？」

訳が解らないといった表情で、ラデオは両手を上げた。

「ふむ、あれは多分彼の発ハツなんだろう……どの様な方法や制約であそこまで強烈なオーラーを作り出しているかは、解らんがな……」

「ああ、俺もそう思うよ……ああ、そう言えばこの話しは聞いたかい？三次試験でアイツの担当で後をつけてたヤツに聞いたんだけど、獲物を捕まえて戻る途中に他の受験生から攻撃を受けたらしいんだ」

「ほう、それは知らなかったな。で、彼は念を使ったのか？」

「いや、体術のみで対処したらしい……獲物を捕まえる時は洞窟内だったらしく、詳しい事は解らなかったって話だったよ。そいつが言うには、かなり離れてたらしいけど自分が着いてきてる事は気付いてたかもしれないって言ってたよ」

「なるほどな。誰かに見られている状態なら、尚更^{ハッ}発^{ハッ}は使わんだろうな……発^{ハッ}を他人に見られると言う事は、それだけで自分の弱点を探られる可能性が高くなるからな」

二人はその後、深夜まで酒を飲みながら色々語りあっていた。

「よし、全員飛行船から降りたな。では次の四次試験を担当するリンパオさんだ。では頼みます」

朝の8時過ぎに目的地に到着した飛行船は小さなテーマパークの駐車場に降下し、その場で一行は下船した。

「ああ、引き受けた。私は、これから行う四時試験を担当するリンパオだ。よろしく頼む」

全員の視線を受けながら、デリバンから引き継いだ四時試験の試験官リンパオと名乗る女性が皆に挨拶をした。

「では最初に、その箱の中に入っているボールを先に引いてくれ。引く順番は三次試験の通過順だ」

箱が置かれた机に長髪の槍を持った男が近づき、箱に手を入れた。

「……………黒い玉だ」

「ああ、自分が取った玉はちゃんと持っておくんだよ。どんどん

続けて取りな」

リンパオに急かされ、テンガロンハットの男も箱に手を入れる。

「ん？俺は白か」

それに続き、スピネルは箱から黒い玉を取った。

その後も全員が箱から玉を取るのを、リンパオは静かに待っていた。

「さあ、全員取ったね。それじゃー、黒い玉を取ったヤツは前に出な」

リンパオがそう言うのとスピネルと長髪槍男を含め、5人がよく解らないといった表情で前に並び始めた。

「さあ、これで準備は整ったわけだ。今からやる試験内容は、マ
ンハント。いわゆる人間狩りだ」

「……………人間狩り？どうゆう事だ？」

何人かの受験生が訳が解らないといった感じで口をひらいた。

「それじゃー説明するよ。この前に出たヤツ等はブラックリスト、いわゆる賞金首だ。そして白い玉のお前らが、こいつらを捕まえる
ブラックリストハンターって訳さ。この試験はハンター役のヤツは
賞金首を捕まえたら合格。賞金首は時間まで逃げ切れれば勝ちだ。今
が8時30分。9時になったら賞金首は先に遊園地に入って逃げる
なり、隠れるなり好きにすればいい。そして10時の時点で試験開

始、ハンターの狩り開始だ。今日は土曜日、一般客も9時から入園するだろう。絶対に一般客に手を出さない事。これを破れば失格だよ。そして、終了時間は夜の19時。ハンターはこの場所まで賞金首を連れてこないと合格にはならない。当然途中で奪われても合格できない。それと、この遊園地を一步でも出た時点で失格だ。これは賞金首、ハンター共に同じ条件だ。それじゃー、9時になったら賞金首は中に入れてもらう。以上だ」

そして時計の針が9時をさした時点で、スピネル達賞金首役の受験生は一斉に遊園地へ駆け出した。

「……………受験生は誰も追ってきてないな……………(……………同じ賞金首役っていつても油断は出来ないからな。しかし、今回の試験はオレには結構有利な気がする。絶^{ゼツ}で気配を完全に絶って隠れたら早々は見つからないだろうし。まだ時間は十分あるし、ゆっくり隠れ場所を探すとするか……………)」

その後アチコチと見て回り結局スピネルは劇が開催されている木製の舞台へ上がる階段の側板を外し、中に隠れる事にした様だ。

「……………13時……………あと、八時間か……………」

開始直後から6段ほどしかない階段下に身をかくしているスピネルだったが、それでも何度かは受験生の気配が近くまで来た事は何度かあったのである。

「……………（ハンター協会の人らしき気配はずっと同じ場所からしてるけど、それ以外にはバレてないみたいだな……………ヘタに動く方が危険だし、バレるまで此処に隠れとこうか）……………」

そして、それから八時間近く経ったのだがスピネルにはこれといった出来事も無く時間は過ぎていった。

「……………サイレン鳴ったな……………（……………結局オレはずーっと隠れてただけで四次試験合格か……………少し後ろめたい気もするけど仕方ないよな……………行くか）……………」

サイレンが鳴り時計も19時を過ぎている事を確認していたスピネルだったが、それでも廻りを注意しながら駐車場へ向かって行った。

「……………試験官も居るし、出て行っても問題なさそうか……………」

暗がりではフェンスの隙間から様子を伺っていたスピネルだったが、試験官や何人かの受験生の姿を確認してから姿を現した。

「おっ！最後の一人も到着したね。それじゃー四次試験終了だ」

スピネルが仮設テントの近くまでやってきたのを見て、リンパオ試験官は試験終了を告げた。

「おめでとう、あんた達が四次試験を合格した5人だ。」

テントの前にはスピネルも含めた5人の受験生が並んでいる。そこには、三次試験でスピネルより先に通過していた長髪槍男とテンガロン、ボーガン男も並んでいた。そして残りの二人は、身長2メ

一トル以上あり背中には大きな斬馬刀のような大刀を背負っている男と、身長160程の小柄で腰のベルトには小型のナイフが十数本刺さっている男がいた。ただこの二人に共通しているのは体のアチコチにキズがあり血だらけ、満身創痍な状態で息も切れ切れとなっている事である。

「さて、今年のハンター試験は次で最後になる。そして最後の試験はネテロ会長自らによって行われる。では会長どうぞ……………」

リンパオの言葉が終わると同時に、後ろのテントから高い下駄を履きモヒカンに似た髪形の老人が笑顔で現れた。

「……………マジかよ……………テントの中に人の気配なんか微塵も感じなかった……………しかもすげえオーラーだ。ただゆつたりと纏テリをしてるだけなのにとんでもない重厚感だ……………あれが念の最高峰なのか……………すげえーな……………」

スピネルが目を見開いて驚いていると、テントから現れたネテロ会長はリンパオの横に並び受験生の顔を見渡した。

「ホツホツホ、流石にここまで残った連中じゃ、なかなかの面構えをしているのう。紹介にあずかった、ワシがネテロじゃ。さて、次が最後の試験となるわけじゃが……………次の試験会場はハンター協会本部近くに用意してある。飛行船で移動するでな、全員乗り込んでくれ」

その後全員が飛行船に乗り、出発した。

「ホッホッホ、皆少しは休めたかの？今から行く最終試験は総当り戦じゃっ！その成績で上位三名を合格とする」

一行を乗せた飛行船は遊園地を出発し、次の日の朝8時には協会本部近くのビルの屋上へ着陸しそこから車で10分ほどの体育館のような所へ辿り着いていた。

「試合の勝敗については、相手が気絶するか戦意喪失すれば勝ちじゃ。ただし相手を殺した場合は失格とするのでう。それでは試合の順番を決めるクジを引いてくれ」

そして、くじ引きの結果は以下の様に決まった。

一回戦 バリッサ（ボーガン男）VS ウエイラ（小柄ナイフ男）

二回戦 スピネルVS マタザ（長髪槍男）

三回戦 ボルダイ（斬馬刀男）VS スピネル

四回戦 バリッサ（ボーガン男）VS ボルダイ（斬馬刀男）

五回戦 スピネルVS ウエイラ（小柄ナイフ男）

六回戦 マタザ（長髪槍男）VS ウエイラ（小柄ナイフ男）

七回戦 スピネルVS バリッサ（ボーガン男）

八回戦 マタザ（長髪槍男）VS ボルダイ（斬馬男）

九回戦 ボルダイ（斬馬男）VS ウエイラ（小柄ナイフ男）

十回戦 マタザ（長髪槍男）VS バリッサ（ボーガン男）

「フム、思いの他片寄らなかったのう。さてこれで試合の順番はきまった。各自不満も有ろうが、これも試験運と思い精一杯頑張つて欲しい。では一回戦から始めるとするか」

ネテロ会長の合図と共に、黒服を着た協会関係者らしき男が試合場の真ん中に進み出て来た。

「それでは第一試合を開始します。選手は前に出て下さい」

黒服を着た協会員であろう審判役に呼ばれた二人は、開始線が貼られている場所にやって来た。

「武器の使用は自由、制限時間はありません。何か質問は？」

「……………私は結構」

「俺も無い」

開始位置には身長170程で大型のボーガンを肩に掛けたバリッサと、身長150程で腰に小型のナイフを十数本挿し痛々しく体のアチコチに包帯を巻いているウエイラの姿があった。

「……………今更だが、一応言つとこう。その状態で私と戦つのは無謀だ、棄権してはどうか？」

「…………俺はやれる……………」

「……………」

「……………それでは試合を始めます……………試合開始っ！」

二人の会話の終わりを感じた審判は一度両者の顔を確認し、試合開始を宣言した。

「ハッ！」

「フッ！」

試合開始の合図と同時に二人はバックステップで後ろの下がりつつ、武器を構えた。バリッサは一瞬で肩からボウガンを外し矢をつがえており、ウェイラも両手十本のナイフを持ち何時でも投げられる体制で両者対峙している。

「……………来ないなら、こちらから行かせてもっらおうか」

睨み合いが数秒続き、包帯だらけのウェイラが走りだしつつ右手の中にあつたナイフを投げつける。スピネルの目からみても中々の速さであったが、水平に並ぶように飛んで来たナイフをジャンプで避けたバリッサは空中で矢を放っていた。

「クっ！」

バリッサが放った矢は不安定な体勢ながらもウェイラの下半身に向かつて行き、走りつつ横に飛び辛うじてウェイラは避けている。

「……………」

「チツ……………」

二、三回転がり、起き上がり様にウェイラは左手に持っていたナイフを勘でバリツサの着地ポイント辺りに投げつけていたのだが、それを予想していた様にバリツサは危なげなく避けていた。

「……………くそっ……………当らねえーな……………」

「中々見事なナイフ捌きだが怪我の為かスピードが足りないな……………残念だがその速度では私を捉えるのは無理だ」

お互いに何時でも攻撃が出来る様に武器を構え睨みあっている。

「……………スキもなけりゃー、油断もしないか……………総当たり戦最初でこれ以上の怪我は出来ない。俺の負けだ」

ウェイラはそう呟くと、一人勝手に離れて行った。

「……………第一試合、バリツサ選手の勝ちとします」

審判がバリツサの方を向き勝敗を告げる頃には、ウェイラは建物の端に移動し壁に体を預けるように目を瞑っていた。

「……………それでは第二試合、スピネル選手対マタザ選手の試合を始めます」

審判がそう言うと、建物の端に座っていた二人が無言で立ち上がり開始線の所へやってきた。

「ルールは先ほどと同じです。両者よろしいでしょうか？」

審判が二人の方を確認すると、スピネルは頷くと木刀を出し構え、マタザの方も背中に背負っている槍を手元に引き寄せた。

「それでは第二試合開始っ！」

「せりゃっ！」

「フッ！」

審判がコールしたと同時にマタザが槍の柄を持ち扇風機のように振り回して攻撃を行い、スピネルは咄嗟に後ろにジャンプしそれを避けた。

「フフ、良い反応だ、思った通りお主は強いな」

何処か嬉しそうに槍を頭上で回転させているマタザだったが、言い終わると一気にスピネルに走り寄った。

「ハアッ！うおりゃっ、りゃ、りゃ、りゃ、りゃ、りゃっ！」

「ハッ！、フッ！」

一気にスピネルの二メートル程前方まで走り寄ったマタザは槍を正面に構え連続で高速の突きを放ち、スピネルは体をズラしつつ後ろに下がり攻撃を避けた。

「おおっ！受けずに全てかわすか………速さでは及ばんか」

「……………（中々早い突きだけど、これくらいなら十分避けれるな）
……………」

「ふふ、行くぞっ！」

スピネルが後ろに下がった距離だけ前に詰めたマタザは槍の柄の一番端を手につくと頭上に振り上げ、大剣でも振り下ろすかの様にスピネルの頭に叩きつけてきた。

「フツ、なにいつ！くそっ！……………」

その攻撃を横に移動して避けたスピネルは振り下ろしの体勢でスキが出来たマタザの脇腹に向け木刀を横なぎに叩きつけようと構えた瞬間、床に当たった槍が跳ね返りスピネルの腰の辺りに目掛け斜めに切り上がって来たのをギリギリ木刀で受け止めていた。

「……………（あ、危なかった……………視界の隅に微かに見えたから反応できたけど……………流石に此処まで残った人は油断できないな……………）……………」

「ムウ……………（この一撃も通らんか……………）…ならばっ！ぐぬぬぬっ！」

スピネルが槍を木刀で受けた形のまま、マタザは力一杯に槍を上方向に向けて押し上げようと力を入れる。

「ぬお……………（う、動かん……………速さが及ばんのはまだ理解できるが……………まさか筋力すら負けているとは……………恐れ入った）……………やはり最初に感じた力量は本物であったか……………ここは引かせて

もらおうか。思う存分戦ってはみたかったが、試験に合格する事が優先だからな」

それだけ言うと、マタザは自らの足で試合場から離れて行った。

「……………第二試合勝者、スピネルⅡストーン選手っ！」

そして審判のコールにスピネルは少し頭を下げた。

「それでは第三試合、ボルダイ選手対スピネル選手の試合を行います」

審判の言葉に開始線で頷くスピネルに、名前を呼ばれたボルダイはゆっくり立ち上がると中央に向かって歩いてきた。

「ぐふふ、こんな子供に勝ちを譲るなんてさっきのヤツは何考えてんだかなあ。まあ、オレは手加減なんて出来んからな。早めに降参してくれや」

角刈りに無精髭を生やし背中に巨大な刀を背負い2メートル以上もの体格の男が、僅か身長1メートル50程の小さな子供を見下ろしている姿は見ている者の距離感を狂わせる程の光景である。

「両者共よろしいですね。それでは第三試合を開始します、試合開始っ！」

開始コールと共に木刀を構えたスピネルに対し、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべたボルダイはゆっくりとした動作で背中から刃渡り2メートル近くはあるつかという巨大な斬馬刀を抜きだした。

「ぐふふ、小僧、最後の忠告だ。負けを認めてさっさと消えろ」

ボルダイが斬馬刀を肩に担ぎ、スピネルを見下ろし言った。

「……………」

「……………ケツ、バカなガキだ。死んで後悔しろっ！」

スピネルにその言葉を投げつけると同時に、ボルダイは肩に担いでいた刀を力まかせに叩き付けた。

「……………（中々の威力だな。でも、この木刀なら受けても問題無さそうだけど……………」

油断無く構えていたスピネルは余裕をもってバックステップしたが、刀が叩きつけられた床は轟音と共に完全に破壊されその衝撃で建物全体がゆれた様に感じた。

「ふん、避けるのは上手そうだな……………しかし一撃でも決まれば即終わりだ。いつまでも逃げられると思うなよ」

その後もボルダイの歩的な攻撃から分ほど続き、中央付近の床は穴だらけの状態になっている。

「ぐぬぬ、クソガキっ！貴様戦う気が有るのかっ！チヨロチヨロと鬱陶しいっ！」

ボルダイが歯を剥き出して怒っているのに対し、スピネルは無言を通していた。

「ふん、バカ者が……（あんな遅い攻撃では、一年やってもあの少年にカスリもせんだろうな……あのバカが単調な攻撃を繰り返し、スキ出来た所で終わりだな）……」

建物の端に座って様子を見ていたマタザが首を振った処で、ボルダイはスピネルに向かい既に何度目になるか解らない突進からの振り下ろしを行っていた。

「……………まだバテてこないか、普通空振りつてのが一番体力使っただけだな。曲がりなりにも、ここまで残っただけはあるって事か……………無理する事もない、もう少し様子を見るか）……………」

その後も10分ほどその様な攻防が繰り返され、ようやくボルダイは肩で息を吐いた。

「ぐう……………（くっ、くそつ……………あのガキ、すばしっこくて攻撃が当たりやがらねえ。これ以上体力が減ると次の試合がヤバイじゃねえーか……………何かいい手はねえか……………）」

斬馬刀を構え、大きく肩を上下させているボルダイは足を止めた。

「くそつ、ダメだ体力切れだあ……………」

足を止めていたボルダイだったが、いきなり床に座り込み斬馬刀も床に置き手を離れたのである。

「ふう、攻撃が全く当らねえ。その年でたいしたもんだな、散々文句言っただけだったなあ」

床にへたつているボルダイは、頭を掻きながら苦笑いでスピネルに詫びだしたのである。

「……………別にいいけどね」

軽く呆れた表情でその様子を見ていたスピネルは、小さく溜息を着くと建物の端に向かおうと歩きだした。

「いや、本当に悪かったと思ってるんだぜ？な・ん・せ・勝たせてもらう事だしなあっ！」

「なあっ！くうっ！」

スピネルの背中に言葉を掛けながらゆっくり起き上がり斬馬刀を握った途端、ボルダイは一気にスピネルに駆け寄り背中から斜めに切り下ろした。

「ぐへへ、その細っこい腕でよく受けれたもんだ。だが、オレの斬撃をモロに受けたんだ、その腕は当分使い物にはならんだろうな。ぐふふ、ここからが本当に勝負だなあ〜」

慌てて後ろを振り向いたスピネルだったが頭上から斜めに攻撃された為、横にも上下にも避ける事が出来ず結果的に木刀で受けるしか出来なかった。

「ぐははっ！おらっ！ドンドンいくぞっ！」

顔の前で斬馬刀を受ける形になっているスピネルに体重を掛け力任せにボルダイは押し続け、ジリジリとスピネルは後退している。

「……………三次試験の時に油断はしないって反省したばかりだったのにな……………ホント俺もダメな奴だよ……………しかしオツサンも覚悟は出来てるよな？こんだけ卑怯な手を使ったんだからなっ！」

言い終わると同時に下がっている足を止めたスピネルは、上から力任せに斬馬刀ごと押ししてくるボルダイを木刀で弾き返した。

「うがあっ……………ぐっ、バ、バカな……………」

床に尻餅を着いた体勢で啞然とした顔をしているボルダイを、見下ろした形になっているスピネルは口を開く。

「早く立つたら？俺は優しいから構えるまで待つてあげるから」

「ぐう……………マグレだ。そうに決まっている。あんなガキに力で俺様が負けるハズがない。そうに決まってる……………」

立ち上がりながらブツブツと呟いているボルダイが、何処か不安そうな顔で斬馬刀を構えた。

「腕力や筋力にマグレなんかあるかよっ！」

「ぐおっ！ぐうううううう」

言いわると同時に、スピネルはボルダイに構えた斬馬刀に向かい木刀を叩きつける。その攻撃は一撃だけに留まらず、何十撃と続いた。

「ぐああっ……………（な、何でこんなガキが此れほどに力があるんだ……………う、腕が、もう刀を持ってられん……………）……………」

……」

マタザが無言で考察している様に、廻りの選手も驚きの表情で言葉無くしていた。

先ほどの試合で床に沢山の穴が空いた為、試合が一時中断になり同じ建物内の別の場所に試験会場は移された。

「それでは引き続き第四試合と言いたい処ですが、ボルダイ選手は未だに気絶中の為棄権とみなします。バリツサ選手不戦勝です」

その後の第五試合はスピネル対ウエイラだったが、先ほどの試合の為かウエイラは早々に負けを宣言した。そしてその時点で3勝が確定したスピネルは、ハンター試験通過が決定した。その次の第六試合が実質最後の試合となった。0勝一敗のマタザと0勝二敗のウエイラの戦いは、最後までしぶとく粘ったウエイラではあったが自力の差がある上に怪我で全力が出せなかった事が影響し三敗目を喫してしまった。結果気絶中のボルダイは全敗、ウエイラが三敗となり、スピネル、マタザ、バリツサの三名が試験合格となった。

「うむ、三人共ハンター試験合格おめでとう。これからハンター協会本部でハンターについての簡単な講義を受けてもらう。では行くかの」

その後三人を乗せた車はハンター協会本部ビルに入り、ハンターとハンターライセンスについての講義が開始された。講義の内容は簡単に説明すると以下に様な事である。

ハンターの種類について説明

賞金首ハンター、財宝ハンター、美食ハンター、遺跡ハンター、骨董ハンター等他にも様々なハンターが存在する。

ハンターライセンスについての説明

・ハンター協会は国家を大きく上回る規模と信頼性を持ち、国際的ライセンスとして国家資格がそれ以上の信用ある資格として広く認められている。

・無料で電腦ページを使用できる。

・このハンターライセンスがあればほとんどの国はフリーパス。ビザがなくても外国に長期滞在可能。

・民間人が入国禁止の国の約90%と立入禁止区域の75%まで入ることが可能になる。

・公的施設の95%はタダで使用できる。

・売るだけで7代遊んで過ごせるし、持っているだけでも一生何不自由なく暮らせる。

・このカードを使えるのはこの世でプロハンターだけ。他人には使用不可能。それでも大金で買ったがる物好きは大勢いる。

・ハンターに合格した者の5人に1人が、一年以内に何らかの形でカードを失っている。

・一度合格した者が試験を受けることはできない。再発行も不可能。

・死刑囚を雇用することができる。

・ライセンスを持っているとハンター専用の情報サイトを利用できるようになる。

・各種交通機関のほとんどを無料で利用できる。

・その他の面でも多大な信用を得ることができ、殺人を犯してもハンターライセンスがあれば不問になる場合もある。

以上の様な説明が二時間程掛けて行われた。

「長い間ご苦労じゃったの。スピネル、ストーン、マタザ、コウエ、バリッサ、クレア、この三名を我々ハンター協会は新たな仲間として歓迎しよう。これからの活躍にきたいしている」

ネテロ会長の締めくくりの言葉で、ハンターライセンスの授与式は終了した。

「おおっ、そう言えば忘れる処じゃった。スピネル、ストーン君。お主にはちと話があるのな、残っていてくれんか？」

会長の言葉に黙って頷いたスピネルは、二人の合格者と何人かの黒服の人が部屋から居なくなるまで椅子に座っていた。

「うむ、待たせたのう。お主に話したかった事は二つあるんじや
よ」

部屋の中にネテロ会長と、ハンター試験に立ち会ったハンター以

外が居なくなつた時点でネテロ会長がスピネルの座っている席の前までやってきたのでスピネルは立ち上がった。

「うむ、1つ目はお主が裏ハンター試験にも合格している事を伝えたかつたのじゃ」

「裏ハンター試験ですか……………（一応知識ではしってるけどね）……………」

「そう裏なんじゃよ。通常のハンター試験を通過した者だけに課せられる試験なんじゃ。その条件は念法の会得。お主は既に身に付けてるからこそ解るハズじゃが、念とはある程度の才能が有る者なら時間は掛るが誰にでも習得可能じゃ。だが、念を使った攻撃は非常に強力じゃ。特に念を知らない者に向けた場合は致命的だの。だからこそ一般的には公開しない裏試験という訳なんじゃよ。普通の場合は表の試験に合格した者が危険な思考を持っていないか見定めた後、心源流の師範が指導に当るんじゃ。まあ、偶にお主の様に既に会得した者が受験する場合もあるんじゃがのう。どうやって念を会得したかは聞かぬよ、それを聞いてしまつとお主の念情報バレてしまう場合もあるでな。まず伝えたかつたのは、これでお主はプロハンターとして認められたと言う事じゃよ」

ネテロの説明にスピネルは無言だが、しっかりと頷き返している。

「二つ目は単に気になつたから聞くんじゃが、お主の動きの中の所々に我が心源流の物が見受けられるんじゃよ。動き全体は心源流の物とは違ふんじゃがのう。それに気付いた時点で各支部に確認はしたが、お主が一時でも門下生にいたという形跡はなかつた。念のため心源流を学んだプロハンターにも確認したが、誰もお主を弟子にした者や指導した者もおらなんだ。お主は何処で心源流を学んだ

んじゃ？」

顎髭を撫でながら、ネテロは本当に疑問をもっているのか不思議そうに聞いている。

「ハハ、誰かから学んだって訳じゃないですよ。申し込み用紙にも書いてるけど、俺が育ててもらった孤児院でメチャクチャ田舎にあるんです。そんな田舎だから当然学ぶ場所なんて無くて、仕方なく俺は中古本を買ってそれを見ながら自分で色々やってたって感じなんですよ。それで買った中古本つてのが、初めての心源流、初歩心源流ガイド、心源流中級指南の三冊なんですよ。でも動きを見ただけで、そんな事まで解るんですか？」

苦笑いしながら説明をしたスピネルだったが、言葉の通りネテロの慧眼は素直に驚いていた。

「なんと、心源流の指南書じゃとっ？……ほっほっほ、驚いたのはこつちじゃわい。誰の指導も受けずに市販されてる指南書だけでそこまでいくとはのう、対した小僧だの。だが、確かに納得のいく答えじゃな。動きは我流だが、個々に心源流の型が含まれているからの。個人的な事で時間を取らせてしもつたのう。すまなんだ」

「いえ、俺も話しが出来て色々勉強になりました。ありがとうございます」

苦笑いで謝罪するネテロに、スピネルは首を振り笑顔で答えた。

「そう言ってくれと有り難いのう。これからはお互いプロハンターじゃ、また何処かで会う事もあるじゃろう。それまで健勝でな」

「はいっ！その時は宜しくお願いします」

スピネルの返事に機嫌良さ気に頷いたネテロは他の試験官を引き連れ部屋を出て行った。

「……………先ほどの話しは本当の事でしょうか？」

部屋から出たネテロの後ろに付いて歩いていたデリバンが、ネテロにたずねている。

「まあ、ワシは事実だと思っがのう」

「そうですか……………僅か10歳であれほどの体術と、新人ハンターとは思えない程磨かれた念能力を誰の指導も受けずに身に付ける……………恐ろしい才能ですな」

デリバンの言葉に、廻りの試験官だったハンターも無言でうなずいている。

「うむ……………これはあくまでワシの予想じゃが、念に関しては生まれつきか、何かのシヨックでかなり幼少の頃に発現したんじゃないかのう。偶に生まれつき念が使える子も居るからな。体術に関してはまだまだ雑じゃが、あの年ではよく鍛えられておる。ワシが気になったのはあやつハッの発ハッのほうじゃな」

「……………そうですね。腰の部分に集まっているあのオーラ、我々中堅ハンターの錬レンにも引けを取らない量でした」

「そうじゃな、あれは子供に出せる量ではないからのう。これもワシの予想じゃが、あれ程のオーラを常時発するのは不可能じゃ。」

あの発は多分オーラを何らかの方法で腰の何かに貯め込んで見
るべきじゃな」

「貯め込むですか……………それは通常時のオーラを削って貯めてい
るといふ事でしょうか？」

「まあ、そういう事じゃな。ワシも過去数人しか見た事は無いが
のう、そのどれもが具現化系じゃったハズじゃ。貯め込むオーラの
量にもよるが、中々強力な念が多かったのう」

「オーラを貯めるか……………そういう発想は思いつかなかったな」

デリバンとネテロの話しを真剣に聞いていたラデオが思わず呟い
ていた。

「まあ、普通の者は攻撃力や利便性を追い求めると共に、錬でい
かに多くのオーラを瞬時に出すかを追求するからのう。確かに中々
思いつかない発想じゃろうな。あの手の念は普段はさほど脅威を感
じんし、貯めたオーラを一度使ってしまうとその後は対した事は出
来んしな。ただその貯めたオーラを使う1回の攻撃力は相当な物に
なるじゃろうな。謂わばハイリスク、ハイリターンと言った処じゃ
な」

ネテロの説明に、後ろを歩いている一同は頷く事しか出来なかつ
た。

そんな感じで、自分の事を考察されているとは知らないスピネル
はどいつじや。

「ふう〜、やっと試験終了か……………短い様で長かった気もするな

あゝ………何時までもボーっとしてても始まらないか、取り合えず今日の宿を探そう………」

やっと終わった試験の開放感を感じつつ、のんびりとリュックを背負い直しネテ口達が出て行った扉に向かい歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0774t/>

スピネル奮闘記

2011年7月29日21時11分発行